



自然学校は地域を救う

～ESD(地域を元気にする)拠点として期待される自然学校～

シンポジウム報告書

主催：立教大学

共催：立教大学 ESD 研究センター

開催趣旨

立教大学 ESD 研究センター長 阿部 治

ESD(Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育)は、持続可能な社会づくりに向けた、様々な知識や知恵、技術、そして実行力などを兼ね備えた人々を育む教育や学びのことです。ESDは、知識の習得を中心とした伝統的な学校教育とは異なり、参加体験型をベースとしたその学びはコミュニケーション力や批判力など、自覚的な市民として「生きる力」に結びつく能力をも育む学びです。

立教大学ESD研究センターは、日本国内はもとより、アジア・太平洋地域を含むフィールドを対象に、高等教育や企業などをも対象として、広く、ESDの実践的研究を進めています。そして、これらの研究の成果や研究を通じてできたネットワークなどを生かしながら、とかく難しくとらえられがちなESDを目に見える形で、広く一般の方々に提示しようとする活動をEco-Opera(エコオペラ)として行ってきました。本シンポジウムもこのエコオペラの一環です。

本日は、ESD拠点としての自然学校を扱っています。自然学校の詳細については、「あとがき」の中で、川嶋教授が記述していますので、ここでは述べませんが、この20年ほどの間に、自然学校はわが国の環境教育の一つの大きな流れとして発展・定着してきました。私自身、この間、この自然学校の発展を目の当たりにしてきた当事者として、自然学校の活動に関わってきましたが、その過程で、自然学校が果たしている特異的な役割に気付くようになりました。というのは、日本がお手本とした自然体験活動を中心とした米国の自然学校とは異なり、もちろん、自然体験活動は行うのですが、そればかりでなく日本では、持続可能な地域づくりの拠点として機能するようになってきたことです。すなわち、ESDの拠点として、自然学校が機能しているということです。この動きを米国の自然学校や環境教育の関係者に伝えたと、皆さん、一様に驚かれます。アジアにも同様な活動を展開しているところが無いわけではありませんが、この日本の自然学校の運動は持続可能性の追求が一般化した現在において、国際的にみても非常に価値が高い活動であるといえます。今後、日本から発信をしていったならば、必ずや注目されるのではないかと思います。

本日は、5つの自然学校の方々から、取組についてお話をお聞きするとともに、自然学校や地域づくりに造詣の深い専門家の方々のコメントをいただきながら、わが国における自然学校の意味や価値を皆様とともに探りたいと思います。おそらく、本日の発表にあるように、自然学校の型は一つではなく、ミッションや地域によって、非常に幅広いものとなっています。しかし、そのベースには、地域の生態系サービス、すなわち、自然(資源)が持っている様々な価値をしっかりと確認し、自然という源が存在しているから人間も生存できるという、自然界の理(ことわり)を各自然学校が持っているのではないかと推測しています。食料資源として、あるいは癒される源として、さらには文化として、これらを含めたいろいろな自然とのかかわりの中で、人間は生きており、このような自然資源の持続的利用を通じて、人々の生活は豊かになってきたのです。

今回、日本各地の自然学校とその地域とが、持続可能な地域づくりに向けて、現在どのような協働活動を行っているのか、その実例を紹介していただきます。その活動を通して、自然学校がESDの地域における拠点としての役割を期待されていることを確認したいと思います。また、各地の自然学校が、その地域への影響にとどまらず、地域外(日本・海外)への影響を及ぼす存在になっていることも確認できるのではないかと思います。さらに、キーワードとして「つなぐ」と「再生する」をあげたいと思います。つなぐものとしては「地域と地域外(日本各地、アジア各地など)」「高齢者の知恵と若者(子ども)たち」「集落と行政」などであり、再生は、「地域の誇り」や「地域の価値」であり、「地域の元気」などです。このような役割を自然学校が果たしていることも確認できるのではないかと思います。

このように、ESDとしての自然学校は、今その役割が、非常に明確になってきています。今回のシンポジウムを通して、ESDとしての自然学校の価値がより一層明確になることを願っています。

2010年3月



自然学校は地域を救う

～ESD(地域を元気にする)拠点として期待される自然学校～

- 【主催】 立教大学
- 【会場】 立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3F 多目的ホール
- 【日時】 2010年3月2日(火) 14時～18時
- 【共催】 立教大学ESD研究センター

【パネリスト・自然学校／事務局】

- ① 関原 剛 (NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部・専務理事)
岩片 克己 (白山神社宮司、NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部・理事)
- ② 辻 英之 (NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター・代表理事)
横前 明 (泰阜村総務課村づくり振興係長)
- ③ 大西 かおり (NPO 法人大杉谷自然学校・校長)
寺添 幸男 (大台町役場大杉谷出張所長)
- ④ 高野 孝子 (NPO 法人 ECOPLUS・代表理事 / TAPPO 南魚沼やまとくらしの学校)
小野塚 彰一 (清水地区活性化委員会委員)
- ⑤ 高砂 樹史 (NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会・専務理事)

【パネリスト・専門家】

- ESDの専門家＝阿部 治
(立教大学社会学部／大学院異文化コミュニケーション研究科教授、ESD研究センター長)
- 自然学校ネットワークの専門家＝広瀬敏通
(NPO 法人日本エコツーリズムセンター・代表理事)
- 全国の地域再生、実例の研究者＝鹿熊勤 (フリー・ジャーナリスト)

【司会】

- 川嶋 直
(財団法人キープ協会・常任理事、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任教授)

【当日配布資料制作】

- 大浦 佳代 (フリーライター・フォトグラファー)

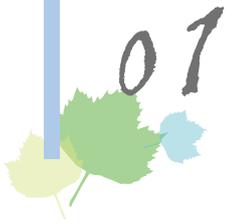
本事業は、立教大学「Eco Opera!」事業として開催されました。Eco Opera! は、地球環境の保全・環境教育に取り組む産公学が連携し、市民との関わりの中で活動を広めていくことを目的としたプログラムで、ESD研究センターが企画監修を行っています。



目次

開催趣旨	1
開催概要	2
目次	3
01 かみえちご山里ファン倶楽部	5
質疑応答	8
02 グリーンウッド自然体験教育センター	21
質疑応答	24
03 大杉谷自然学校	37
質疑応答	40
04 TAPPO南魚沼やまとくらしの学校	49
質疑応答	52
05 おぢかアイランドツーリズム協会	61
質疑応答	63
パネルディスカッション	69
まとめ	75
当日配布資料	79
参加者アンケート	103





環境教育から生存共学へ（ひとつの村落から村落集合体へ）

かみえちご山里ファン倶楽部

関原 剛（NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部・専務理事）

生存技術は総合性の場

NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部は 2002 年に設立され、常勤スタッフ 8～9 名、会員は現在 340～350 名、年間予算約 4,500 万円で運営しています。地勢は、桑取川の源流から日本海河口までの 17km を含む豪雪地帯の中山間地であり、川に沿った形で十数カ所の集落があり、総称して桑取谷と呼んでいます。山文化・海文化が混交しており、土地との交感が非常に重要であると考えているため、この土地の「水の巡り」を活動の主幹としています。

我々は「守る・深める・創造する」を活動理念としています。まず「守る」とは、千年続いた「口伝」の生存技術を調べ、記録し、復元することです。次に「深める」とは、それらの技術をノスタルジアで博物館化せず、新たな位置付けの中で、合理的なものとして再評価することです。そして「創造する」とは、それらの地域資源を既存のまま使うのではなく、新たな組み合わせにより新しい価値を創造することです。

また、資源調査をする時に大切なことがいくつかあります。①具体的な事実を調べ情緒的な思い込みを排除すること、②人と人との関係性を最優先すること、③結論誘導や理想の押し付けをしないこと、④「口伝」を可能な限り記録すること、⑤復元・実施することで新たな価値と意味を創造すること、です。

受託事業としては、「上越市地球環境学校」を運営しています。これは、プログラムが具体的な自然や村のありようと絶対に乖離しないよう、村も都市から共に学ぶという「生存共学」をキーワードとした体験型学習施設です。村の生存技術とは、区分けや縦割りによる分断ではなく総合性の場です。人間が出会い、コミュニケーションの場をどう維持するかが、受託事業ではあっても貫かなくてはならない要素なのです。

以前、「～体験」という事業で田舎がテーマパーク化され、人々が疲弊したという前例があったため、現在は自己責任で使える技術を真剣に学ぶ場としての「学校」としました。ここでは娯楽提供をするのではなく、参加者の生存技術のスキルアップを目的としています。また、お年寄りたちが畑や田んぼを続けられなくなって「中止されるものづくり」に、何か「始めるものづくり」をあてがうことが必要となってきています。

インターンシップの受け入れでは、個人の「リアル」を重視しています。個人が「リアル」でない人は、他者を「リアル」に想定できないからです。コミュニティ理解のためには、まず「自己をリアルに感覚すること」が大切であると考えています。その上での他者との共存であり、共同体の感覚が空虚ではなくなることに繋がります。この一点だけちゃんとしていれば、学生たちは自動的に自分で学んでいきます。

「ムラ」という場で人は何を回復できるのか？ 考えられる要素として、一つ目には都市での五感縮小があります。村では自然が人間に総合化を要求しますが、都市ではシェルター内での部分機能として視聴覚だけが増大していきます。二つ目には言語コードの回復があります。言語コードとは、まず言葉以前のイメージが十分にあり、それが発声によって圧縮され、書き言葉で究極的に象徴化された



関原 剛

（NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部・専務理事）

1961 年生まれ、糸魚川市出身。目の前の海や野山で遊んで育つ。高校卒業後、東京で就職。その後、商業施設の設計会社を辞め、95 年に U ターン。協同組合ウッドワークの求人「17 時に終業」を見て、「夕方釣りができる」と職員になる。



環境教育から生存共学へ（ひとつの村落から村落集合体へ）



あと、その文字を読んだ人が脳内の解凍ソフトを使い、その文字から再び元のイメージを連想することです。現代では、言語化以前のイメージ体験が圧倒的に欠落しているため、この解凍ソフトが非常に貧弱です。これを取り戻すのも“ムラ”の機能であると考えています。生活者としての言語コードを持っていれば、同じように話は通じますが、現代では独立した言語秩序の存在する場が横行しています。村落の場合は、個の生活者としてのコードがあるため、共通言語の取り戻しは非常に重要になってきています。

このように五感が縮小し、言語コードが希薄になっている中で大切なのは、「人間に戻る」ということです。バラバラな状態から一つの総合体へ、抽象コードの仮想現実から具体へ、生産合理性から真の合理性へ、知識の楼閣から知恵の湖へ、出し抜く「他者」から助け合う「他者」へ、その他大勢からひとりずつへ、などです。

NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部の機能は、繋ぐことです。村は無知ではなく、ただ行政用語と学術用語を知らないだけです。一方、都市は無知ではなく、ただ生存と生活の用語を知らないだけです。これらを繋ぐ我々の役割の核心は、「媒介性、媒体性、編集性、翻訳性、意識性」だと考えています。村落にとって外の人というのは、非常に重要な役割を果たしています。村落を美しい数珠の玉に例えると、それを繋ぐ紐というのが外の人であり、その紐の役割は、今、自然学校で働く若者たちに期待されているのです。

今、我々は、行政制度上は存在しない任意のものとして、複数の村落集合体を「クニ」と呼ぶことを盛んに行っています。それは狭過ぎず、大き過ぎず、生存が感覚できる範囲であり、まかないを実感できる範囲です。さらに、土地の形に逆らわず、人が群集化されない範囲でもあります。単独の集落よりは大きく、市よりは小さい、非常に居心地の良い大きさです。しかし、こういう「クニ」というものは、行政制度上規定され得ません。

また、山里や集落、村人、中山間地、活性化、限界集落という用語は、半抽象で形而上学的です。このような惰性の用語使用は大変危険です。言葉の意味というのは、背景と文脈こそが重要なのであり、同じ言葉でも誰が語ったかで意味が全く変わってしまいます。そういう話者不在の抽象言語に、それ以上の奥行きはないだろうというのが我々の考え方です。具体的な試みは、惰性の用語使用を疑うことから始まるのです。

我々が決めた「クニ」を特徴付ける 10 のまかないとは、①農のまかない、②水産資源・塩のまかない、③天然採取物のまかない、④森林資源のまかない、⑤水のまかない、⑥エネルギーのまかない、⑦教育のまかない、⑧民俗伝統・景観のまかない、⑨福祉のまかない、⑩地域循環産業・経済のまかない、です。まかないとは、自給性であり独自性でもあります。「クニ」の集合が国であるべきではないでしょうか。

生存力というのは、総合性と連関性を感覚することだと考えられます。そして、大切なのは誇りの復元です。外からの目によって、地域が自分たちの地域資源を再評価し、「場の力」を感覚し、内向きから表明できる誇りへの転換です。それは、良い文化は都市にだけあるということの逆転でもあります。「舞台」を持つ土地は誇れる場所であること、このように地域が思えるような活動が我々の役割であると考えています。



岩片克己（白山神社宮司、NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部・理事）

桑取谷とは、新潟県の南西部、海から山に繋がる 17kmの水の循環、桑取川の谷間の地域です。春日山城、西の防衛線、そして秘密の兵站線でもあります。西の防衛線と言われたのには、地域の人がまとまるために、その中心をお寺や神社に据え、宗教も絡めて人と人との繋がりや集落と集落の繋がりというものを堅固なものにしていった、という背景があるのではないかと考えています。

また、海から谷に入っていった所に集落が 16 あり、小さい集落は 4 戸、大きい集落でも 40 戸に満たない単位の集落です。その中で神社が 13 あります。そして、禅宗の寺院が 9、その他、廃寺になったものが 2 寺院あります。過去数百年、僅か 9 戸の集落が神社と寺院を維持・管理し続けている所もあります。これこそが、その強さではないかと考えています。

そんな中、神社を中心にした伝統・文化・行事が随分多くあります。小正月というのが 1 月 15 日にあり、いろいろな行事や民俗・文化の伝統を繋いでいこうと行っていました。しかし、ある時 1 月 15 日が成人の日となり、さらにその後、国民の祝日法が改正され、成人の日が変動することとなり、1 月 15 日が休日でなくなってしまいました。その結果、今まで続いていた伝統・文化が立ち消えになったり廃止されたりしました。

我々は、子どもの社会教育の場として小正月行事を続けたいと考えています。我々の小正月行事の特徴は、子ども達自身がいろいろな行事の進め方を主体的に決めて、上級生をリーダーにグループとしてまとめ、物事を運営することにあります。そして、各戸を回りお年玉がたくさん集まると、上級生はたくさん、1 年生は少しだけ。働く者はたくさん、働きがまだ少ない見習いは少しだけというように、子ども達の責任で分けます。こういうことをきちんと子どもの中でできるということが、原体験としてあり、学校でもなかなか教えられない教育の場になるのです。

そこで私どもかみえちごの理事長が、学校、教育委員会に掛け合いに行き、このような意味を持つ伝統文化の大切さを伝えた結果、1 月 15 日は休みとなり、子どもたちは生き生きと行事を行っています。これが、我々の考える「繋ぐ、繋げる」ということの一事例です。



岩片克己

（白山神社宮司、NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部・理事）

1952 年生まれ、西横山集落出身。桑取谷にある白山神社の宮司（神主）。神主としては若手だが地域に人望があり、NPO と地域のつなぎ手としても活躍している。



環境教育から生存共学へ（ひとつの村落から村落集合体へ）



広瀬敏通

NPO 法人日本エコツーリズムセンター代表理事、ホールアース自然学校代表者。日本の自然学校の草分けであり、自然体験型環境教育の第一人者。

〈質疑応答〉

広瀬： 自然学校とは何かということが、この10～15年、随分変わってきています。かつては、地域の自然や文化を背景にしながら、そこを借用して自分たちの自然体験のプログラムを行う場でしたが、今は、地域社会の中に入って触媒機能を果たす役割が注目されてきています。その中で、地域と自然学校との距離の取り方に独特の考え方を持たれているようですが、その辺りを少し話していただけますか？

関原： かみえちご山里ファン倶楽部で働いているスタッフたちは、来た当初は単純同化したいという考え方をします。つまり、早く村人になりたいのです。その気持ちはよくわかります。過疎をどうにかしたいという思い込みで来ますが、そんなに簡単にできるわけがないだろうと言われ、落ち込む。お百姓になりたいと言うが、元々5人百姓がいて、過疎の村に6人目の百姓が増えたからといって、問題は解決されません。NPOというのは、6人目、7人目、8人目のお百姓さんが就農できるような仕組みを作る側で、直裁的にそこに出かけていくのではありません。ただお百姓になりたいのなら、お百姓さんに弟子入りすればいいのです。つまり、かみえちご山里ファン倶楽部の職員は、都市にも属さず、村にも属さない宙吊りの中で踏み止まる精神的な強さがないとやっていけません。単純に村に属すというのでは、村の役に立てません。また、都市側に寄るのも駄目です。従って、都市のこともよく知って、村のこともよく知りながら、その中間でぶら下がるという厳しく辛いことを要求しています。



環境教育から 生存共学へ

(ひとつの村落から村落集合体へ)

かみえちご山里ファン倶楽部作成
2010・2

1

生存技術は 総合性の場

2



3

桑取谷の地勢

- 日本海から水源の山頂まで17キロ
- その背後には頸城連峰(2460m)
- 海岸まで「中山間地」
- 川沿に沿う集落の連なり
- 山文化と海文化の混交
- 30集落・600世帯・2000人(夜間人口)

4

土地と交感する

その場所は、
その場所以外に無い。

<桑取谷・水の巡り>

5

その暗さは真水の豊かさ



6



環境教育から生存共学へ（ひとつの村落から村落集合体へ）



7



8



9



10



11



12



森の匂いの水が、故郷に導く

13



葉は枯れ落ち、水のスポンジになる

14



真水の原野

15

かみえちご山里ファン倶楽部とは

- 1、設立年 平成14年
- 2、会員数 約330名
- 3、常勤スタッフ数 9~8名
- 4、年間予算 約4.500万円

16

守る・深める・創造する

- 守る
1000年続いた「口伝」の生存技術を調べ・記録し復元する。
- 深める
それら技術をノスタルジアで博物館化せず、新たな価値づけの中で、合理的なものとして再評価する。
- 創造する
それら地域資源を既存のまま使うのではなく、新たな組み合わせにより新しい価値を創造する。

17

■受託事業・委託管理・指定管理など



上越市地球環境学校



上越市くわどり市民の森



18



環境教育から生存共学へ（ひとつの村落から村落集合体へ）

受託事業

- 受託事業のソフトが、
具体の自然や村のありようと
絶対に乖離しないこと。
- そこが「場」になるとは、内と内、
内と外、外と外の「人間」が出会
う場であり続けるということ。

19



20

資源調査

- 情緒的な「思い込み」を排除。
具体の事実を、まず調べること。
- 人と人の関係性を最優先すること。
- 結論誘導や理想の押し付けをしない。
- 「口伝」を可能な限り記録すること。
- 次に「復元・実施」すること。
- それに新たな意味と価値を。

21

体験ではなく「学校」



22

「体験」の失敗から「学校」へ

- ～体験という事業は、田舎のディズニー
ランド化であり、かえって人々を疲弊さ
せた前例がある。
- 自己責任で使える技術を真剣に学ぶ場。
- 娯楽提供ではなく参加者の生存技術のス
キルアップを。
- 「中止されるモノづくり」に「始めるモ
ノづくり」をあてがう。しかし時間との
戦い。

23



24



25

自己がリアル だから 他者と生きる

26



■ インターン・研修受け入れ



27

インターンシップの目的

- 個の「リアル」の取り戻し。自己存在が希薄。半透明の体から具体的に存在する体へ。
- 個が「リアル」でないものは「他者」をリアルに想定できない。しがってコミュニティ理解とはまず「自己をリアルに感覚すること」
- その上での「他者」との共存であり、共同体の感覚が空虚ではなくなる。
- この一点だけがインターンの目的。あとは自動的に、学生は自分で学ぶ。

28



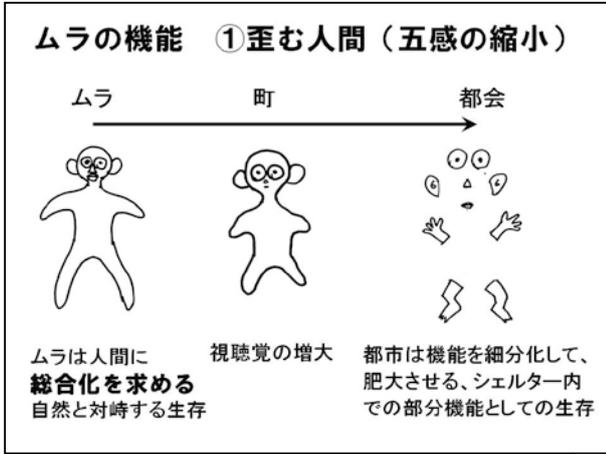
29

ムラという場で 人は何を回復するのか

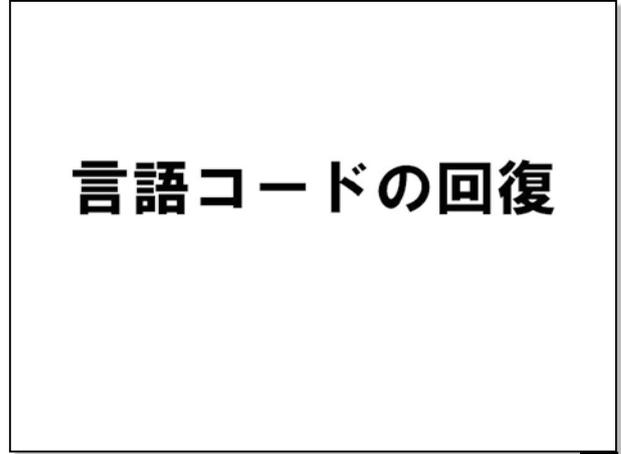
30



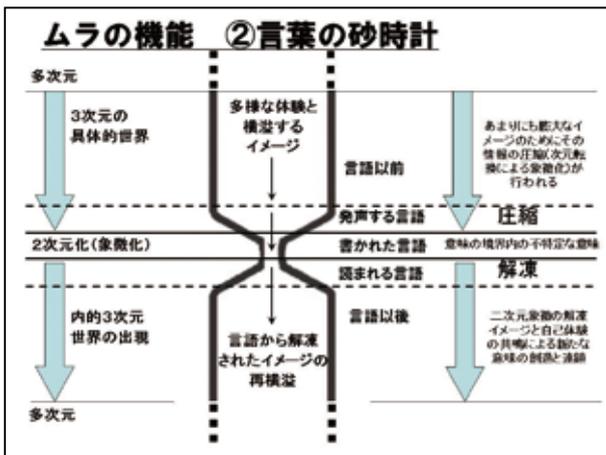
環境教育から生存共学へ（ひとつの村落から村落集合体へ）



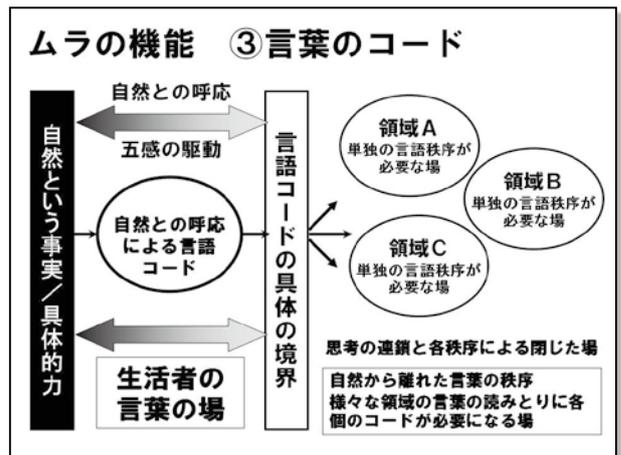
31



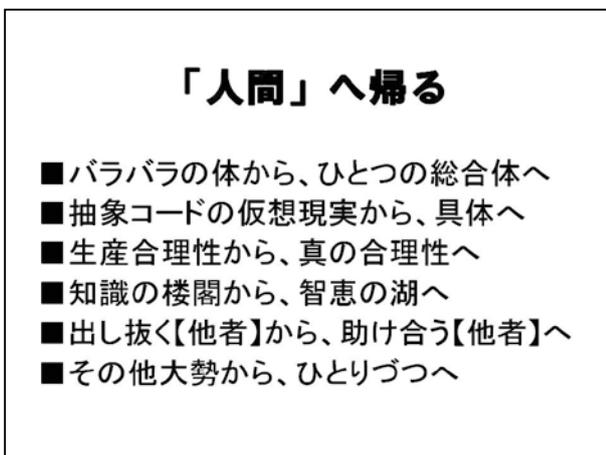
32



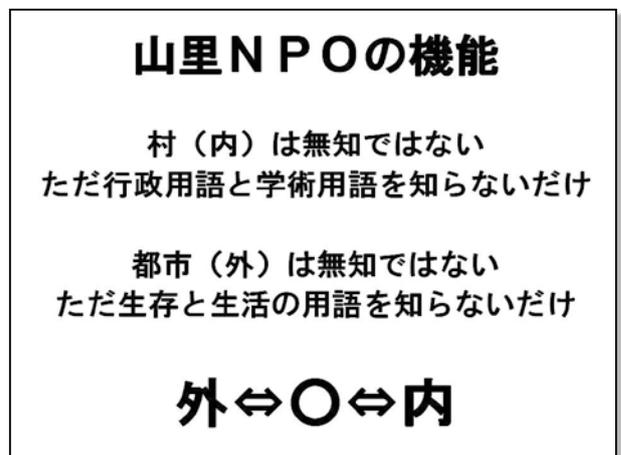
33



34



35



36



山里NPOの機能

媒介性・媒体性・編集性
翻訳性・意識性
(間に立つもの)

37

無から有への重要性
内と外の共鳴による【価値】の発生

単音→和音→音階→コード→旋律→シンフォニー



38

珠+ひも=数珠

- 珠だけでは数珠にならない。
 - ムラは歴史もつ。それには加害者と被害者の記憶もある。
 - 「外の若者」が「ひも」になれる理由とは、ムラに対して前科がないこと。
 - 三層の世代の「失われた世代」の補完であること。
- (20~40) (40~60) (60~)

39

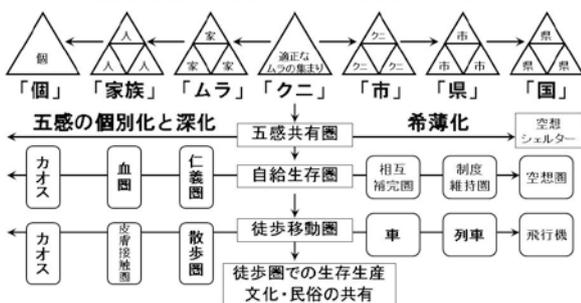
村々から「クニ」へ

行政制度上は存在しない任意の広がり
狭すぎず、大きすぎない範囲
生存が感覚できる範囲
まかないが実感できる範囲
土地のかたちに逆らわない範囲
ヒトが「群衆化」されない範囲

40

新たなクニの大きさ 小さな過ぎず、大き過ぎない

個人と国家の中間に位置する範囲「クニ」



国民、県民、市民である以前に【部族/トライブ】である集団

41

抽象から具体へ 【用語を疑う】

42



環境教育から生存共学へ（ひとつの村落から村落集合体へ）

農村や環境という言葉は抽象的である。
具体の何物をも指し示さない場合が多い。

山里、村落、集落、ムラ人、中山間地、振興、
農業、活性化、限界集落、共同体、自分、他人、
エコ、環境、環境教育、自然、地球を守る

**具体の試みは
情性の用語使用を
疑うことから始まる**

43

言葉の意味は話者で変わる

- ・背景と文脈こそ重要
- ・同じ言葉でも誰が語ったかで意味が変わる。
- ・話者不在の抽象言語に「それ以上の奥行きはない」

44

生存の地平線①

自分が生きるために
必要な範囲の感覚

45

生存の地平線②

極大範囲とは「地球」
「地球を守れ」の二面性。

46

環境・教育から



生存・共学へ

47

「地球を守る」から



「ここで生きる」へ

48



具体へ

まかなふ・つくるふ

まかなうために、つくるもの
るものを最初からつくる。

49

クニを特徴づける10のまかない
まかないとは。自給性であり独自性である。

- ①農のまかない。
- ②水産資源・塩のまかない
- ③天然採取物のまかない
- ④森林資源のまかない
- ⑤水のまかない

50

クニを特徴づける10のまかない
まかないとは。自給性であり独自性である。

- ⑥エネルギーのまかない
- ⑦教育のまかない
- ⑧民俗伝統・景観のまかない
- ⑨福祉のまかない
- ⑩地域循環産業・経済のまかない

51



52



53



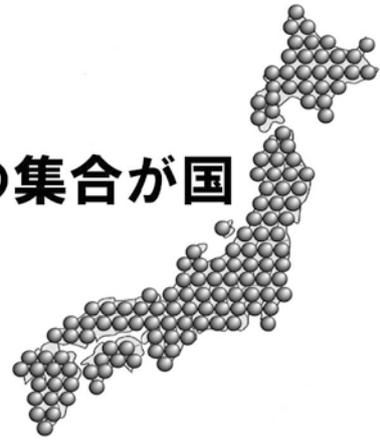
54



生存力
総合性
連関性

55

クニの集合が国



56

誇りの復元

- 他者（ソト）の目による地域資源の再評価。
- 内向きな誇りから、表明できる誇りへ。
- よい文化は都市にだけある、の逆転。
- 「場の力」を感覚すること。
- 例えばよい芸能は土地に臨在して呼応したとき真の姿を見せる。「舞台」もつ土地は誇れる場所である。

57

月満夜の神楽



58

東吉尾の池祭り



59

むすぶ
結・産・括
生む・つなげる

60



古事記より
高御産巢日神
(たかみむすひのかみ)
神産日神
(かみむすひのかみ)
菊理媛神
(くくりひめのかみ)

61





地域の教育力を育む自然体験

グリーンウッド自然体験教育センター



辻 英之

(NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター・代表理事)

1970 年生まれ、福井市出身。大学卒業後、北海道の僻地での体育教員を目指す。教育実習の際に「だいだらぼっち」を見学。学校教育の枠外で 2 年ほど学ぼうかと職員になる。

辻 英之 (NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター・代表理事)

グリーンウッド自然体験教育センターは長野県の最南端、下伊那郡泰阜村に存在し、公共交通機関では大変時間がかかる場所にあり。人口は 2,000 人弱で、国道はまだ走っていません。山岳地帯にあるため、年貢は米で納められず、木で納めていました。満蒙開拓、植林政策、減反政策、自治体合併と、常に国策に翻弄されてきた村です。現在、自治体合併はしていませんが、村民は「この村には将来がない」と、その境遇を嘆き、結果、若者が減って高齢化率が上がっています。里山は荒れ、放棄農地が増え、自治会や PTA、消防団などの住民組織も持続困難になりつつあります。

我々は 1986 年にこの村に入りましたが、当初はまったく理解されませんでした。林業の衰退・農家の激減と、産業を継続しにくくなっていった村民からは、我々がこの地で自然環境を資本とした産業を興すことなど絶対に無理と思われていました。

しかし現在、当センターでは 15～16 人を雇用しており、人口 2,000 人のうちの 15 人ですから、村の中では大企業だといえます。自然を資本とする新たな事業の産業化に成功し、スタッフは住民組織の担い手や政策提言の担い手としての期待にも応えつつあります。そして、村民自身が、教育の自己決定権の発揮を模索し始めました。自分たちの村は自分たちで考えていこうということを少しずつ始めています。教育を中心に据えた持続可能な地域社会づくりへの挑戦が始まっています。

我々の一つ目の基本理念は「多様性の共存」です。お互い様、結び、支えあい、思いやり、といった他者との関係を豊かにする力、すなわち他者と自分との間に存在する「違い」を「対立構造」として捉えるのではなく、「豊かな構造」として捉える力を育成していく場でありたいと考えています。その「力」を育成することこそが、若者と年配者、男性と女性、農山村と都会、日本と他の国々など、多様性が豊かに共存する社会を構築できる「自立・自律的な」人材を育成する源泉となると信じています。

二つ目の基本理念は「地域に根ざし、暮らしから学ぶ」です。「暮らし」の中に「学び」の原点があると考えています。日々の暮らしは「生きる基本」を学ぶための優れた学校です。日本の農山村には、その風土によって創り出された独自の「暮らしの文化」があり、学ぶべき暮らしの「知恵」が豊富に存在しています。暮らしが脈々と営まれてきた「地域」の持つ潜在的な教育力を重視し、体験活動の中にそれらの生活の知恵を取り入れながら、子どもたちや青年の健全育成と地域の活性化を目指しています。

我々はその地域に住まなければ、その地域の教育力は享受できないと信じてやってきました。20 年経って振り返ると、よそ者と村民たちが、急速に消えていく村の文化に内在する「教育力」を一緒に守ってきたのかもしれないと気付きました。

貧しい環境は、それゆえに地域内の資源をやりくりして生き抜く自立・自立的気風を育んできました。今も地域住民が行政に依存しない共同作業が続いています。また、昭和初期の世界恐慌時には、子どもたちの情操教育のために教員が給



地域の教育力を育む自然体験



料を返上して、それを全村民が支持したという経緯があり、目先のことにとらわれずに長期的視野でものごとを捉える教育尊重の気風があります。小さな村の住民が、少ないながらも財を持ち寄って豊かな地域コミュニティを創り上げてきた、支えあい・相互理解・相互補完の気風があります。貧しさが「お互い様」の文化を残してきたのです。そして、生み出す暮らしの文化といえるほどまでに循環型の暮らしが確立されています。我々は、これらをきちんと教育のプログラムに反映していくことが大切だと考えています。

自然体験教育は、1年間子どもたちを預かる山村留学「暮らしの学校・だいだらぼっち」、1年間も行けない子どもたちのために夏・冬に預かる3泊～2週間ほどの「信州山賊キャンプ」、地元の子ども対象の体験活動「伊那谷あんじゃね自然学校」の三つがあります。

山村留学「暮らしの学校・だいだらぼっち」は、僻地山村で生き抜いてきた村民の暮らしから学ぶことが狙いです。今年は15人が参加し、村の学校に通っています。センターは学校ではなく、生活を学ぶ場です。23年間で約350人が参加しました。「信州山賊キャンプ」は、暮らしを軸にした子ども主体の自由キャンプです。1年間で関東中京圏の子ども1,100人とボランティアスタッフ350名が参加しています。「欧米に追いつけ追い越せ」という戦後教育は、「都市に追いつけ追い越せ」という意識をも泰阜村民に強烈に植え付けました。村民はこの村が持つ教育力を否定的に捉えて子どもを都市部に送り出してきました。しかし、我々との活動を通して、村民の意識が質的に変化し始めています。我が子を都市部に送り出した村民が、今度は都市部の子どもから教えられているのです。村民有志がNPOを立ち上げてグリーンツーリズムや民宿を始めました。

また、地域内の連携を伴って、自然体験教育も質・量ともに充実してきています。

この地域の教育力に気付いた村民たちが地元の子どものための体験活動を始めようとしています。それが「伊那谷あんじゃね自然学校」です。「あんじゃね」は、方言で「案ずることはない、心配するな、大丈夫だ」という意味です。人間と自然、社会と人間、老若男女が「あんじゃね」な関係に役割を果たせないかということで設立しました。当センターは運営を担い、地域財政の厳しい村の負担を最小限にとどめるため、民間助成金などで資金を確保して活動をコーディネートしています。これはまさに、泰阜村の教育力が村民の手によって取り戻されていく作業です。地域の教育を地域住民が考えていく。それはそもそも当たり前のことなのです。

我々の活動は、自然を資本とする新たな産業（教育を通じた都市と山村の交流）を誕生させました。地域への経済波及効果は年間約7,000万円です。我々は間接的に雇用の促進をしようと考えています。NPOだけが儲けずに、城下町・門前町の発想で、自然学校があると周りが儲かるという仕組みを目指しています。そして今、若者がUターンし始めています。村に優秀な青年が戻り始めています。自然体験教育が、持続可能な地域社会づくりに一定の役割を果たしつつあります。



横前 明 (泰阜村役場総務課村づくり振興係係長)

村と当センターとの位置づけについてのお話をします。泰阜村は何もありません。信号機もコンビニもありません。ならば、この原風景、自然を大切にされた方がよいと考え、泰阜村は都会を追随しない村の良さとして自然を前面に押し出しています。当センターも自然を生かしていこうという教育に取り組んでおり、村とは何らスタンスが食い違うことなく、同じ方向に向かって進んできています。村長も役場職員も、当センターには様々なノウハウを教えてください、また、村への提言をしてもらったりもしています。



横前 明

(泰阜村総務課村づくり振興係係長)

1959年生まれ、泰阜村出身。役場職員ひと筋30年。前の所属は、教育委員会教育振興係長。村長が描く“福祉が産業の泰阜村”を支える役場職員の職に誇りと自負を持つ。



地域の教育力を育む自然体験

〈質疑応答〉

阿部： グリーンウッドの場合は、泰阜村というこの地域だけではなく、国際理解教育という平和の視点がありますが、国際理解教育の視点は、この地域にどんな影響を与えていますか？

辻： 「同じ釜の飯を食べる」ということが相互理解に非常に役立つのではないかと思います、それを国際理解教育に生かしたいと考えています。この村は満州開拓に千数百名を出しており、帰国してきた人が今でも住んでいます。そういった異文化と、私たちのようなよそ者の異文化が混在して、この村の暮らしが成り立っているということは、日常ではなかなか気付きません。国際理解教育を行うことによって、村の人にそのことを気付いて欲しいし、そういったことが実は財産なのだとわかって欲しいのです。このような狙いが我々にはありました。これからその成果が出てくるだろうと思います。

司会： これは実際に海外から子どもたちが泰阜村にやって来るというプログラムなののでしょうか？

辻： 環日本海側の国ばかりですが、北東アジアの5カ国から各国10人ほど集まって来ています。

横前： 国際理解教育を行うことで、泰阜村の小・中学校、中学生に個性的な意味で良い影響を与えています。

鹿熊： 長期留学の場合、留学生は村に住民票を移しますが、1人増える、1人減るといのは行政的にどういう意味を持つのでしょうか？

横前： 泰阜村の人口は現在1,914名で、1年間に約30～40名が減っています。10年経てば1,500人になってしまうので、かなり危惧しています。1人増えると交付税で30万～40万円増えるという計算になります。現在の人口構成は逆三角形であり、底辺が広がるきちんとした形の三角形になれば、村も活気づくと思います。子どもは小学生と中学生を合わせて160人です。そのうち約1割の15名はセンターの山村留学生ですから、センターの影響はかなり大きいです。

鹿熊： 世代のバランスが取れることが、人口が単純に多いことよりも大事だということでしょうか？

広瀬： 自然学校の生業はとても小さいですが、地域への経済波及効果は、実は非常に大きいのではないかと考えています。その地域を訪れる人の旅行費用総額のうち、少なくとも2.5%（本州の中山間地）、多くて25%（沖縄、屋久島、北海道など大観光地）ほどが自然学校そのものに落ちる金で、約50%が宿、食、買物などで地域に落ちていることを考えると、非常に大きい経済効果があるのではないのでしょうか。また、地元の方が元気になる、笑顔が増える、生きがいを持つ、というような意味の効果——それを経済と言っはいけないのですが——もあるということを今後、トータルに可視化できる、指標にできるようなものをつくりたいと考えています。



阿部 治

立教大学ESD研究センターセンター長および社会学部/大学院異文化コミュニケーション研究科教授。NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）代表理事、日本環境教育学会会長。筑波大、埼玉大を経て2002年より現職。専門は環境教育/ESD。環境教育のパイオニアとして国内外で活動。



鹿熊 勤

フリー・ジャーナリスト。立教大学兼任講師（自然環境と人間）。NPO法人日本エコツーリズムセンター理事。アウトドア、自然教育、環境問題、第一次産業、手技、食など自然に接する領域で取材活動を続ける。近年は「地域活性化」「地方の自立」もウォッチング。著書に『葉っぱで2億円稼ぐおばあちゃんたち』など。



2009年度立教大学 Eco OPERA事業

NPO-GREENWOOD

教育を中心に据えた持続可能な地域づくり

～信州のへき地山村: 泰阜村の挑戦～

特定非営利活動法
グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事 辻 英之
泰阜村役場総務課課長 藤村 誠 副 課長 横前 明

1

NPO-GREENWOOD

持続可能性の低い村

- ・長野県南部のへき地・泰阜村。人口2,000人を切った。
- ・国道がなく大型バスも入れない。信号もコンビニもない。
- ・米を年貢で納められなかった貧しい歴史を持つ。
- ・満蒙開拓、植林政策、減反政策、そして自治体合併。常に国策に翻弄。
- ・村民はその境遇を嘆いていた。「この村には将来がない」
- ・高齢化率が上がり、若者労働力が減少する
- ・里山が荒れ、放棄農地が増える。
- ・住民組織も持続困難になりつつある。

2

NPO-GREENWOOD

村の子の血が染まる

- ・「村の自然環境が良い」というよそ物が理解されるはずがなかった
- ・戸塚ヨットスクール事件とムラの論理
- ・NPOもタウンの言葉もない時代
- ・「林業の衰退」「農家の激減」…自然環境を武器に産業を継続しにくい村民から見れば…
- ・自然環境を資本とした産業は「絶対に無理だ」
- ・ああ、あすんどの衆だなん

3

NPO-GREENWOOD

しかし、今

- ・しかし、今、グリーンウッドは、村内では大規模の事業者に成長した
- ・自然を資本とする新たな事業の産業化に成功した
- ・スタッフは住民組織の担い手や政策提言の担い手としての期待にも応えつつある
- ・村民自身が、教育の自己決定権の発揮を模索し始めた
- ・教育を中心に据えた持続可能な地域づくりへの挑戦が始まる

4

NPO-GREENWOOD

私たちの基本理念

違いは豊かさ=多様性の共存

グリーンウッドは、お互い様、結い、支えあい、思いやりといった、他者との関係を豊かにする力、すなわち他者と自分との間に存在する「違い」を「対立構造」として捉えるのではなく、「豊かな構造」として捉える力を育成していく場でありたいと考えている。その「力」を育成することこそが、若者と年配者、男性と女性、農山村と都会、日本と他の国々等々、多様性が豊かに共存する社会を構築できる「自立・自律的な」人材を育成する源泉となると信じている。

Safety × Peace × Nature × Future
安全教育 × 国際理解教育 × 自然体験教育 × 持続可能な未来

5

NPO-GREENWOOD

私たちの活動理念

地域に根ざし、暮らしから学ぶ

グリーンウッドは、「暮らし」の中に「学び」の原点があると考えている。日々の暮らしは「生きる基本」を学ぶための優れた学校である。日本の農山村には、その風土によって創り出された独自の「暮らしの文化」があり、学ぶべき暮らしの「知恵」が豊富に存在している。暮らしが脈々と営まれてきた「地域」の持つ潜在的な教育力を重視し、体験活動の中にそれらの生活の知恵を取り入れながら、子ども達や青年の健全な育ちと地域の活性化を目指している。

Safety × Peace × Nature × Future
安全教育 × 国際理解教育 × 自然体験教育 × 持続可能な未来

6



地域の教育力を育む自然体験

NPO-GREENWOOD

名称 特定非営利活動法人グリーンウッド自然体験教育センター
 会長 梶さち子
 代表理事 辻英之
 設立 2001年(前身団体1993年、活動開始1996年)
 本部所在地 長野県下伊那郡赤穂村6342番地2
 愛知事務所 愛知県愛西市誌高町藤城3-2
 目的 日本の豊かな自然環境を活用した自然体験教育活動を推進し、青少年の健全育成及び国民の豊かな余暇生活の構築に寄与することを目的としている。
 事業 自然体験教育・国際理解教育・安全教育等の教育事業及び地域づくり事業、各事業に関する指導者の研修及び養成。
 従業員 正職員15名、非常勤5名
 育成 研修生1名、実習生1人、大学実習受け入れ年間100名
 サポート ボランティア(年間400名以上)
 ファン 山村留学卒業生家族 300家族以上
 予算規模 約9,000万円～1億円(平成20年度予算)
 受賞歴 2006年度 第37回博覧会賞(教育活性化部門)
 2006年度 第4回オーライ!ニッポン大賞審査委員会長賞
 2006年度 第1回山村力コンクール林野庁長官賞(山村力発揮大賞)
 2006年度 第4回信州日報文化賞
 2008年度 長野県知事表彰(教育功労団体)
 2008年度 第35回環境賞(目立グループ)、個体賞(信濃毎日新聞社)
 2009年度 読売教育賞最優秀賞、地球編組推進賞(文部科学大臣賞)

7

NPO-GREENWOOD

N 自然体験教育・・・Nature

- 暮らしの学校「だいだらぼっち」
一年間の長期自然体験教育
- 信州山賊キャンプ
長期休暇対応体験教育
- 伊那谷あんじゃね自然学校
地元地域対応体験教育

Safety × Peace × Nature = Future
 安全教育 × 国際理解教育 × 自然体験教育 = 持続可能な未来

8

NPO-GREENWOOD

めんどくさいことが楽しいんだ

- 暮らしの学校「だいだらぼっち」(グリーンウッドの運営する山村留学)
- へき地山村で生き抜いてきた村民の暮らしから学ぼうという願い

暮らしの学校 だいだらぼっち

9

暮らしの学校・だいだらぼっち 1年間の長期自然体験活動プログラム

- 循環型のライフスタイルを重視した、一つ屋根の下に暮らす「大家族」「田舎暮らし」体験活動
- 「違い」や「おなじ」を認め合いともに暮らす子ども主体の長期プログラム
- 参加者は、住所を移し地域住民となって地元の学校に通う。
- 平成21年度参加者数 15人(小学校3年生～中学校3年生)
- これまで23年でのべ 350人
- 平成21年度林野庁、長野県、長野県教育委員会後援

10

NPO-GREENWOOD

私は嫁に来るつもりで村にやってきた

- 山村留学の子どもに村のマナーを教える
- しかしそれ以前に、スタッフ自身が村民になる努力をし続けること
- 共同作業では、村民の2倍も3倍もかかった。
- 若者雇用、定住、消防団やPTA、自治会役員など住民組織の担い手
- 創設者の魂は、即座に答えた。妻はこの村で生き抜く覚悟だ
- 原住民(地域住民)は、常に新住民(よそもの)の覚悟を見抜く
- この努力の過程は同時に、「原住民」と「新住民」が力を合わせて、村の風土によって作り出された「暮らしの文化」を維持し続ける過程だった = この失ってはならない暮らしの文化こそ教育力

11

NPO-GREENWOOD

泰阜村の文化に内在する教育力

1. 自立・自律の気風
貧しい環境は、それゆえに地域内の資源をやりくりして生き抜く自立・自立的精神を育んできた。今も地域住民が行政に依存しない共同作業が続く
2. 教育尊重・長期的視野の気風
昭和初期の世界恐慌。将来を担う子ども達の情懷教育のために教員が給料を返上し、それを全村民が支持した。「貧すれば貧せず」。目先のことにとられずに長期的視野でものごとをとらえる教育尊重の気風。
3. 支えあい・相互理解・相互補完の気風
貧しさが「お互い様」の文化を醸成してきた。隣組、仲間、結い。小さな村の住民が、少ないながらも財を持ち蓄って、豊かな地域コミュニティを創り上げてきた。農業開拓の勇退者を受け入れてきたのも支えあいの気風。
4. 循環型の暮らし・生み出す暮らしのありよう
生み出す暮らしの文化といえるほどまでに完成されている

辻英之「へき地山村に於ける自然体験教育活動」『山村留学実践研究』第104号(北海道大学大学院 2009)

12



13



14



15



16



17



18



地域の教育力を育む自然体験



④循環型の暮らし・生み出す暮らし

19



間伐材などに良い材があれば...

20



捨てる材が、生活食器・家具に変身
捨てに来たおしいさんも感激した

里山の恵みを暮らしにいかす

21



生活食器の一部も自分たちで作る

22



陶器上薬は灰(薪ストーブと風呂)から作る

里山の恵みを最後までいかし切る

23



米と野菜もできる限り自分達で作る

足りない野菜は村住民が「余ったから」と持ってきてくれる

24



自分たちで作った食器と イスと米と野菜で一家団欒

村では当たり前前の暮らし方

25

生ゴミは落ち葉やワラと共に堆肥化

26

猟師さんが朝獲ったイノシシを解体 獲れた朝だけの即興食育授業

27

暮らしの学校「だいだらぼっち」参加者数

年次	参加者数
2014年	13
2015年	10
2016年	12
2017年	13
2018年	20
2019年	17
2020年	10
2021年	16
2022年	16
2023年	18
2024年	18
2025年	17
2026年	18
2027年	15
2028年	20

28

辻君、わしや、 生まれ変わったら 教師になりたい

1999年夏、村最奥の集落でアマゴ養殖を営む木下氏の言葉
村民が実行委員会を組織して初めて取り組んだ長期キャンプ(文部省委嘱)
「わしや、子どものことは何もわからん」と固辞。しかし実行委員長に、
2週間を終えて子ども達を見送った後につぶやいた
その後、村議会議員に、村の青少年健全育成をリード。
たった2週間の経験が彼を変えた。

29

NPO-GREENWOOD わしや、生まれ変わったら教師になりたい

- 「欧米に追いつけ追い越せ」という戦後教育は、「都市に追いつけ追い越せ」という意識をも豪農村民に強烈に植え付けてきた。
- 村民はこの村が持つ教育力を否定的に捉えて子供を都市部に送り出してきた。
- 言葉を変えれば、村の学校教室で教育を受ければ受けるほど、この村に居てこない若者を増やしてきたのだ。
- 山村の文化を否定的にとらえていた村民の意識が**質的に変化した**
- 我が子を都市部に送り出した村民が、今度は都市部の子どもから教えられる
- 村民有志がNPOを立ち上げてグリーンツーリズムや民宿を始めた
- 地域内の連携を伴って、グリーンウッドの自然体験教育キャンプも、質・量ともに充実していく

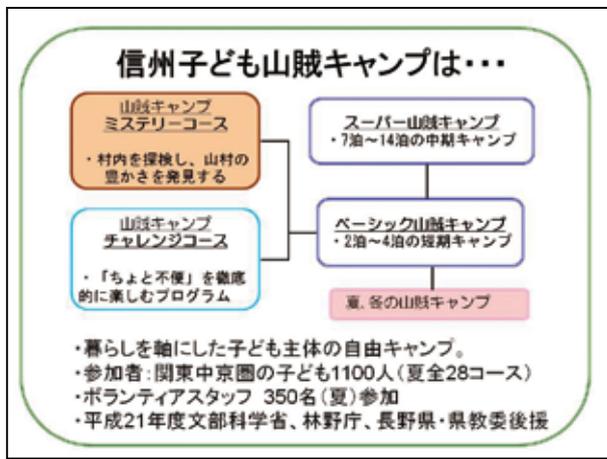
30



地域の教育力を育む自然体験

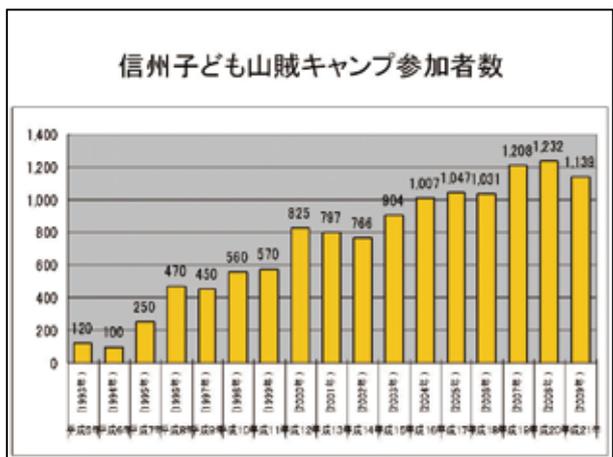


31

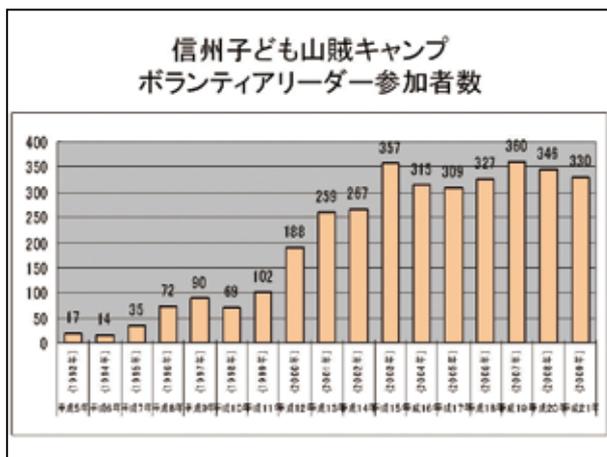


32

グリーンウッド自然体験教育センター



33



34

**野菜をおいしい！
とってくれる**
農家・中島千恵子

**もっと安全な野菜を
つくらにやあ**

朝採った日級野菜を、こづかい種でキャンプへ。
 朝採り野菜のおいしさに子どもが種いなきゅうりを丸かじりした
 お礼に来たことに感謝して、ますますやる気になった
 地産地消、農家のプライド

35



36

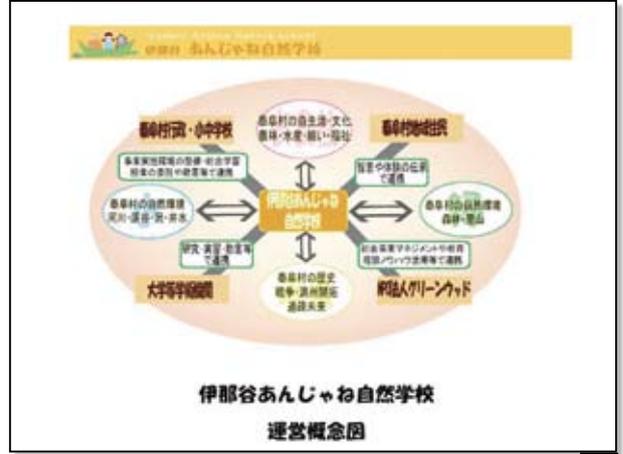


伊那谷 あんじゃね自然学校

理念
 「この村には何も無い。」豊卓村ではよく聞かれる言葉です。しかし、その『何も無い』土地で、自然と共存しながら生きてきた人たちの知恵がこの村にはあります。つまり、その『生きる知恵』こそを私たちは子どもたちに伝えていかなければならないのではないのでしょうか。現代においてこれらの『知恵』を学ぶ機会はいへん限られています。
 伊那谷あんじゃね自然学校は、豊卓村の豊かな自然と地域の人々の知恵や技を掘りどころとし、未来を担う世代がまさにこれらの『知恵』をあらためて学ぶ場の提供とそのお手伝いをしていきたいと考えています。

名前の由来
 伊那谷は諏訪湖から流れる天竜川の谷沿いの地域のことを指しています。「あんじゃねえ」とは「案じることはない」「大丈夫」というニュアンスの伊那谷地方の方言です。
 伊那谷には豊かな自然と生活文化が現在でも根付いています。人と自然が共生していきける「安心な環境」「安全な環境」を実現したいという願いを込めての名称です。

37



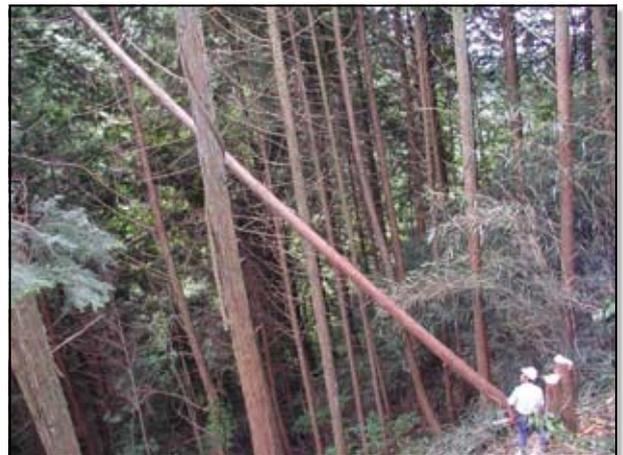
38

7月 第5回目の授業

**やすおかの山から
柱を出す！**

日 時：2003年7月5日（土）
 参加者：豊卓村在住の小中学生
 内 容：伐倒の見学・重材体験・チェーンソー体験・皮むき
 講 師：松下西実子（NPOグリーンウッド）他

39



40



41



42



地域の教育力を育む自然体験



43

2004年度 プロジェクト

やすおかの森に 富良野地をくまなく

日時：2004年5月23日・6月6日・7月10日
7月29日～8月2日

参加者：富良野村在住の小中学生
内容：旧牛新村内に湧けるツリーハウスの建設
講師：小林 康（地元林業士）
大越 隆（地元林業士）
近藤 弘一（地元林業士）
島崎 隆幸（地元製材業）
松下 真実子（NPOグリーンウッド）

44



45



46



47

子どもと一緒になんて
やれるか！

わしゃ、子どもと
一緒じゃなきゃ、やらん



伝統技術の炭薪作りを子どもと一緒にやってほしいとお願ひした
しじふ子どもと一緒にやってみた。ところが……
村の子どもたちの一生懸命さに驚いた。こりやうかうがしてられない
山の暮らしをもっと次の世代に伝えたい

48



NPO-GREENWOOD

教育を地域住民の手に取り戻す

- あんじゃね自然学校は、グリーンウッドが自然学校の運営を担い、民間助成金など資金を確保し、活動をコーディネートする
- 地域財政の厳しい村の負担を最小限にとどめ、子どもたちを育てる「あんじゃね」な村づくり
- 今、「あんじゃね支援学校」が組織化され、大きなうねりになっている。
- アマゴが泳ぐ川にも、炭を焼く里山にも、野菜が育つ畑にもこどもの声が戻ってきた。
- それはまさに、泰阜村の教育力が村民の手によって取り戻されていくかのようだ。
- 地域の教育を、地域住民が考えていく。そもそもそれは当たり前のこと

49

あんじゃね支援学校名簿

氏名	所属	役職
1 杉島 真澄	泰阜村	村長
2 藤田 正次	泰阜村教育委員会	教育委員長
3 宮下 正孝	泰阜中学校PTA	会長
4 山本 眞直	泰阜小学校	校長
5 伊藤 幸子	泰阜小学校PTA	会長
6 高野 祥	泰阜村保育園連合会-泰阜村保育園	会長/役員
7 新下ムツ子	泰阜村保育園	主任保育士
8 稲野 幸枝	NPO法人グリーンウッド研究会	代表 副理事長
9 岸下 雅樹	泰阜村連合会-環境教育推進室	室長/環境推進員
10 藤田 正孝	伊勢谷あじふ自然学校の顧問代表	顧問代表
11 津田 真穂子	泰阜村公民館副理事長	保護者代表
12 宮川 仁	泰阜村農協	農林部長
13 藤田 晴	泰阜村福祉課	村づくし担当係長
14 熊田 力	北山大学	名誉教授
15 宮川 美穂紀	泰阜村青年団	
16 村上 浩樹	NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター	代表理事
17 森田 雅志	京都府立大学	名誉教授
18 藤田 幸子	伊勢谷あじふ自然学校	校長
19 大庭 隆	関西工務局連合会-泰阜地区PTA	主席/会長
20 藤川 美樹	伊藤女子短期大学	准教授

50

泰阜村保育園での「森のようちえん」へ発展

51

NPO-GREENWOOD

持続可能な未来に向けて

P 国際理解教育・・・Peace

Safety × Peace × Nature = Future

安全教育 国際理解教育 自然体験教育 持続可能な未来

52



53



54



地域の教育力を育む自然体験

グリーンウッド自然体験教育センター



55

NPO-GREENWOOD

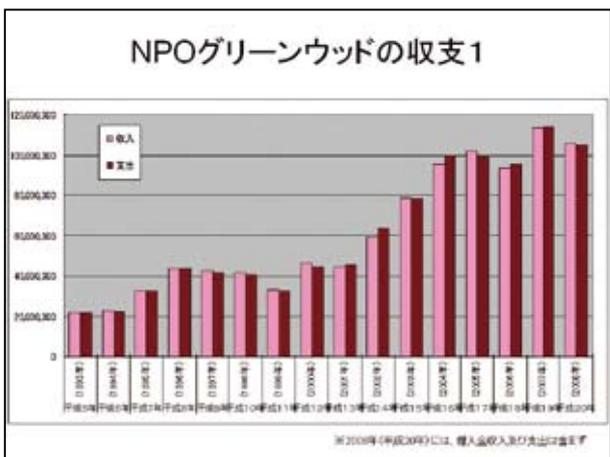
地域への成果

- ・春単村の価値の再発見 ⇒ 「共助・支え合い」の仕組みは良質な学びの場
- ・村民による自律的な運営各種が始まった ⇒ 相互依存・連携を通じた自己決定権の発揮
- ・自然を資本とする新たな産業（教育を通じた都市と山村の交流）の誕生。 ⇒ 地域への経済波及効果（7,000万円が還元）。
- ・間接的に雇用の促進。城下町、門前町の発想で、NPOだけが儲けない。
- ・里山保全、環境保全型農業への志向、環境負荷軽減
第36回環境教育賞「新地島山村における自然体験教育システムの構築と実践」日立環境村賞
- ・マスコミの露出 ⇒ 2003年度～437件。広告宣伝効果は。
- ・青年団の復活 ⇒ 村に、優秀な青年が戻り始めた。山村留学は…
- ・自然体験教育が、持続可能な地域社会づくりに、一定の役割を果たしつつある。
- ・行列のできるプログラム。村民はその土台が何であるかに気づき始めている。

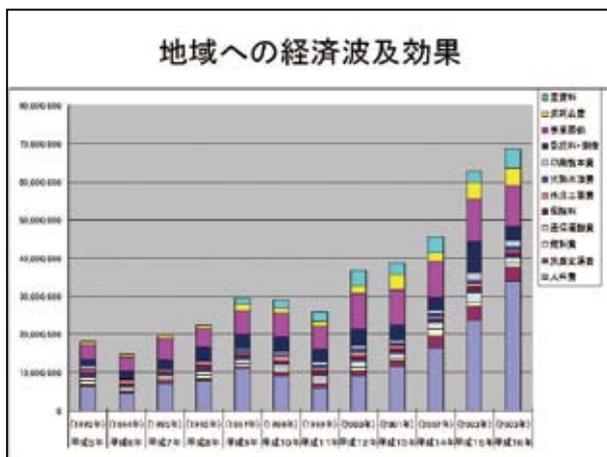
↓

きんたろう〇〇ではなく、ご当地〇〇

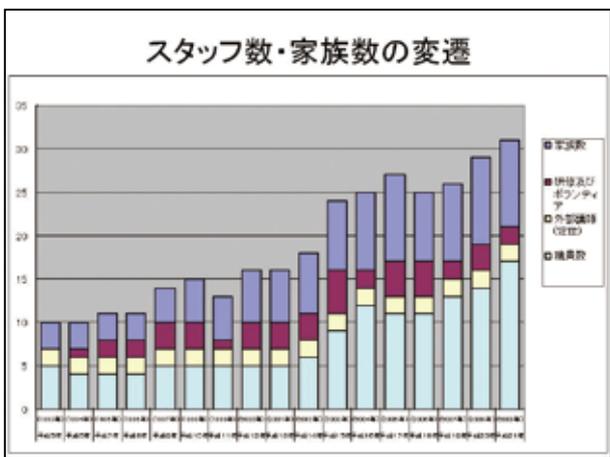
56



57



58



59

NPO-GREENWOOD

へき地山村における自然体験教育 5つの課題

1. へき地山村が持つ教育力を整理・可視化すること
2. へき地山村が持つ生産的な暮らしの文化を維持する努力をすること
3. へき地山村に根ざす人材を育成すること
4. へき地山村の暮らしの文化を、自然体験教育プログラムに反映すること
5. 自立的な組織運営と、ファン(10,000人の観光客より100人のファン)を創ること

これらすべてに共通する重要なことは、原住民が新住民かにかかわらず、その地域に住む人々こそが決めるという自己決定権を発揮すること

辻元之1へき地島山村における自然体験教育活動に関する研究報告書(第04号)北海道大学大学院 2008

60



「何もない村」の産業化 二つの秘訣

●その1 教育の切り口を貫いたこと

- ・「過疎対策」や「地域活性化」ではなく、「教育」の切り口でマーケットへ訴えてきた。
- ・4月1日がゴール。学びの政策ではなく一時移民政策。4月1日からの教育的意義を考えた地域少ない。
- ・都会の子供と地域コミュニティを消費的にとらえてしまう「過疎対策や地域活性化の論理が裏にある教育活動」からは何も生まれない。
- ・それを証明するかのように、今、全国の山村留学は継続難にあえいでいる。

61

「何もない村」の産業化 二つの秘訣

●その2 教育の質を磨いたこと

- ・「教育」を切り口としてマーケットに訴えるといっても、それがへき地つまり過疎山村の資源や現実とかけ離れた教育プログラムでは、マーケットの反応はない。
- ・全国どこでも通用するパッケージプログラムを採り入れるのではなく、泰阜村に残る生活文化を教育プログラムに反映する努力を続けてきた。
- ・グリーンウッドの教育プログラムは、今や行列ができるほど全国の子ども達から人気がある。この人気を支える土台が、欧米で開発されたプログラムではなく、村の暮らしの文化に内在しているということに、村民も気づき始めている。
- ・泰阜村の持つ「貧すれど食せず」という教育力を団体経営にも反映、不採算部門の山村留学を、具現化の象徴として守り続けた。それが「質」を磨くという意味である。
- ・「山村は山村のままがいい」ということを反映した質の高い教育プログラムが、グリーンウッドが実施する事業のような個人参加のマーケットに替わ時代になっているのである。

62

まとめ

- ・ NPO自体だけが儲けない
間接雇用を狙い、地域全体が儲かる産業の仕組みを創る。
門前町、城下町の発想で。
- ・ 教育を中心に据えた持続可能な地域づくりへ
経済的にも、環境的にも、社会的にも、へき地が持続性を保つために、教育を中心に据える。
- ・ 10,000人の観光客より100人のファン創り
周囲との良質な連携・相互依存を通して自己決定権を発揮する。へき地山村の自律。

63





03 自然学校は地域を救えるか？についての検証

大杉谷自然学校

大西かおり（NPO 法人大杉谷自然学校・校長）

大杉谷自然学校は三重県の中央より少し東側の多気郡大台町大杉谷地区にあります。現在、人口 301 人の地区です。

主幹産業の林業が衰退して仕事がないこと、若者がいないこと、過疎・高齢化した地域は元気がないという背景のもと、環境教育で地域を活性化するために 2001 年 4 月、当校を設立しました。ただ、「地域を活性化する」という言葉はもう使わなくなっています。

我々の事業は以下の四つです。①環境教育事業：子ども向けの自然体験・キャンプ、大人向けのエコツアーなど、②環境教育普及支援事業：指導者養成や講演など、③調査・研究事業：植生調査、生態系調査など。2004 年度に災害に見舞われましたが、この災害後の魚類の調査を継続して行っています。④地域協力支援と地域づくり：地域の祭りの手伝いや、災害の時の災害復旧など、です。

我々はこれらの事業を通して、どんなことを伝えたいかを以下の三つのポイントに整理しました。

一つ目は「自然体験を通して得られる学びの場」です。小学校の子どもたちが裏山を間伐・整備し、子どもたちが間伐材を乾かして切り、市場で売ります。また、地域に民泊をして、様々な話を聞くというコミュニケーション、伝統漁法、林業家からの話、イノシシやシカなどを解体・試食など、山里にまつわる様々な体験などがあります。これらから学ぶことは、都会で今、学べないことが非常に多いです。

二つ目は「懐かしい未来を創造するためのアイデア箱」です。地域はアイデア箱です。例えば炭焼き・薪割り、これで風呂を炊いて入ったり、あられを炒ったりします。おそらく、小さい頃にこういった体験をした子どもたちは、大人になってから自分の家に薪風呂をつくることはないでしょう。しかしながら、技術革新によって得られる新しいエネルギーといったものを志向する子どもたちが生まれます。「賢い消費者」をつくる要因になるのではないかと考えています。今、社会の息詰まりのようなものを打破するヒントは、地域社会に残されているのではないのでしょうか。地域社会を見て未来をつくり出す。その未来はおそらく懐かしさを感じさせるようなものになるのではないのでしょうか。

三つ目は「昔の日本人のすごさを伝える劇場」です。老人が雪の中、裸で乾布摩擦をする。そして、それを拝んでいるおばあさんたちがいる。これは昔の日本人のすごさを伝える歴史です。これからは「ネイティブジャパニーズ」なのです。

老人たちは、地域に庚申様、不動様などいろいろな神様を祭っていて、それをとっても大事にしています。こういったものが私たちに引き継がれているのでしょうか。昔の日本人には本当にすごいものをつくり出す、独創性、創造性、素晴らしいものが数多く存在しています。こういった、地域に残るものの再評価をしながら、我々は自然学校の活動をしてきました。

しかしながら、これらはあくまで初期の段階であり、途中から変化していきました。8 年ほど前に無くなってしまった、参加者が大人や高齢者ばかりの運動会の写真を見た時に、私は、このままではこの地域は必ず消えてしまうと思いました。ここから我々のまた新たな戦いがスタートしたのです。ハエ叩きをつくっている様子、餅撒きをしている様子、炭焼きがもう朽ちてしまった様子、盆踊り、こういった昔の日本、



大西かおり

（NPO 法人大杉谷自然学校・校長）

1972 年生まれ、旧宮川村出身。高校時代から下宿して地域外の学校へ通う。大学卒業後、JICA の青年海外協力隊で 3 年間、フィリピンで理科の教員をつとめる。帰国後、「生まれた地域で働ける仕事」を求め、自然学校に可能性を見出す。北海道の自然学校で研修中に、大杉谷自然学校立ち上げの話があり、就職を決める。



自然学校は地域を救えるか？についての検証



素晴らしいヒントがどんどん消えていっています。地域が消えるということは、日本が古くから引き継いできた心が消えることなのです。しかしながら、もっと大事なものが、どんどん失われていってしまっているのです。

我々が今、戦っているのは、限界集落化という問題です。65歳以上の人口の比率が55%を超えると、限界集落と呼ばれる地域に分類されます。以前、地域の真ん中にありましたが、その上流部分が全部消えてしまい、小学校なのに集落の外れに存在しています。これによって、どのような問題が発生しているのでしょうか？集落が消滅して何か問題があったのでしょうか？何の問題もなかったのです。地域の人は、実は平和に生き、今の限界集落の生活に何ら支障はありません。さらに、やがて静かに消えてしまうのが限界集落の自然なかもしれないという気持ちもあります。

現在、高齢化率が70%もあります。我々が2001年に当校をオープンした頃の人口は374人でしたが、現在は301人です。もう70人以上がこの10年間で減少してしまったということになります。

人がいない地域の問題は数多いです。出合（であい）という寄り合い制度による墓場の掃除や、人々が乗り合いで行く買い物など、一人消え、二人消え、三人消えとなってしまうと、大変不便になってしまいます。また、シカの防護ネットを張ろうにも、自分の力ではどうにもなりません。つまり、人がいないことによって集落機能の崩壊が起きてしまうのです。

いったい、いつ、誰が、どこで何のために始めたのかということが希薄な祭りは非常に多いです。冠婚はすでに消滅しているため、今、この地域に残っているのは葬祭の部分が多いです。しかしながら、若者たちは、そもそもこんな地域の慣習を守ることに何の意味があるのかと思っています。よって一時的に復活しても絶対に続かないのです。

昔の冠婚葬祭の役割は、結束を固める手法の一つ、人を一人前にする社会教育の場、若者たちの紹介の場であると考えます。要するに、これは人を結ぶ壮大なシステムであり、1,000年以上地域で続いているすごいシステムなのです。これが今、崩れてきています。

今、お金より大事なものが何かあるのか？ということが問題なのだと思います。例えば山の神様は、実は山の高台にあって田畑を見守ってきたものですが、高い山にあったら人が登れないため、最近、低い場所に降ろされました

三重県南部にある丸山千枚田では、昔は一面の山で木が生えていました。これが何百年の年月をかけて田んぼになったのです。大事にされています。

我々と一緒に活動している「せせらぎ会」という食のグループの方々をブドウ狩りに連れていったところ、大変なことが起こりました。土産にブドウを買い占めたのです。お世話になった人、これからお世話になるかもしれない人、親戚、近所に配るためです。しかし今、都会では、お土産自体も非常に小型化し、そういったものを配る必要がなくなってきました。このようなところからも、お金より大事な人との繋がりというものがどれだけ社会に不要になっているのかがわかります。

金より自然の力が大きかったのが田舎だったはずですが、都市化して、今や自然よりお金の力が大きくなってきているのです。自然、地域の繋がり、田畑、地域で行う冠婚葬祭、家族、親戚はお金で解決できて、いらなくなりました。お金があれば一人でも生きられる社会、これがそもそも悪いのです。



当校は、実は小遣い程度の経済効果しかありません。売り上げは約 3,800 万円、職員は常勤が 7 人で、全部で約 10 人います。これが限度です。自然学校は産業になっていないのです。自然学校だけでは無理です。行政のテコ入れを待ちたいと思います。

寺添幸男（大台町役場大杉谷出張所長）

私は 30 年以上行政マンをしており、出張所勤務は初めてとなります。300 人の集落に現在、部下が 3 人と集落支援 1 人の計 4 人がいます。今までは、産業課に約 13 年在籍し、10 人以上の部下を持ち、村興し・産業振興の部分で第三セクターをつくる、いわゆる職場づくりを行ってきました。ホテル、水工場、高速道路のパーキングエリアなど、それにより 200 人ほどの職場ができました。そして、もともと、上司が今の町長であり、町長自身が大杉谷の出身で、大杉谷を何とかしたいという思いがあったため、限界集落対策を任せられたのです。

町長は、2009 年度の施政方針で「大杉谷地域は清流宮川の源流部であり、大台町の原点でもあります。大杉谷に元気を出してもらわなければ大台町も元気が出ません。地域が元気を出すためには行政指導では限界もありますが、地域の人々と一緒になって元気が出る方法をとともに考えていきたいと思っています。そのために、大杉谷出張所に地域づくりの予算と権限を与えるとともに担当職員を配置します」と述べています。

まず、自然学校と共同で地域調査を行い、地域の約 300 人に、一人 2 時間ぐらい話を聞いて、自然学校の立ち位置を確認しました。自然学校に対する批判は一つもなく、もう少し自然学校と関わってみたいという声が多かったです。このことを考慮して、自分が仕掛ける交流会を自然学校に委託しました。2010 年 2 月中旬に、名古屋と大阪で 700 人近い大杉谷の出身者に手紙を出し、その中から 40 名が名古屋と大阪に来て、いろいろな懐かしい思い出を語ってもらったのが始まりです。

この後も、自然学校とともにいろいろな仕掛けを考えています。その一つが、2 地域居住になるのか、U ターンになるのかはわかりませんが、出身者の孫に大杉谷に来てもらい、大杉谷の伝承者になってもらうことです。いずれ、空き家を改築してそこから始めようと考えています。これは、活性化のために何をしたらよいかと考えた時に「I ターンよりも U ターン」という地域の人々の声があったからです。まずはこれから始めて、皆が理解できたら、次は I ターンも考えたいです。

大杉谷地域は自然学校が主体となってやっていくべきです。役場の人間は高コストです。失礼な言い方ですが、自然学校は低コストであり、従って、自然学校に役場の役目をどんどんお願いしたい。可能であれば窓口業務を自然学校にやってもらいたいです。

私は、大台町で行われる公益性の高い仕事は、自然学校のような NPO にどんどん任せていくという仕組みをつくっていきたくと考えています。各町村単位で、もう一回行政を見直そうという仕組みを今こそ真剣に考えています。



寺添幸男

（大台町役場大杉谷出張所長）

1956 年生まれ、旧宮川村出身。行政マンひと筋で、08 年度まで産業課長として、町に産業と雇用をつくる仕事をしてきた。道の駅、温泉宿泊つきアウトドアレジャー施設、食品加工施設、製材加工業など多彩。「大杉谷でも産業を」と地域外にも広くアンテナを張る。



自然学校は地域を救えるか？についての検証



〈質疑応答〉

広瀬： 国内 62,000 の過疎集落のうち、2,600 集落がまもなく消えるといわれており、その消える集落の 40%が川の上流部にあるといわれています。大杉谷小学校の上流部はもう皆消えてしまったという話がありましたが、まさにそのとおりです。その中で、誰がこれから村を支えていくのでしょうか。もう静かに消えてしまうしかないというのは、皆が言っていることなのですが、消えさせたくないという集落もあります。その辺を誰がどう支えていくのかという問題で、今、自然学校がいろいろと話題になっています。大杉谷の報告で出てきたものの中に「まだこの村に住み続けたい」「何も不自由してない」という意見がありました。不自由していない。満足している。これはまさに都会に人にとっては驚きを感じるかもしれません。実は全国調査「人口減少・高齢化の進んだ集落等を対象とした日常生活に関するアンケート調査」（平成 20 年度・国土交通省）で、限界集落といわれる集落の 90%の人が住み続けたいと答えています。高齢者だけではなくて、30 代、40 代も含めて住み続けたいと答えています。10 代、20 代はさすがに 55%ですが、何がそう思わせるのかというのも、やはり非常に大きい課題ではないかと思います。とはいえ、医療がない、教育の場がなくなる、買い物ができないという声もあります。その中で、地元食材などの利便性の高い移動販売カーを自然学校でやったらどうかという意見もあります。自然学校は、もはや自然だけをテーマにやっている時代ではなくなってきていると思います。田舎では自然学校が墓守もやらなければならない、移動販売もやらなくてはならないというような状況があります。自然学校が安く仕事をしてくれるというだけでなく、そこの自然学校の活動がしっかりと担えるような形で行政とうまく仕組みをつくるには、どの辺に配慮したらいいかという考えを寺添さんから聞かせていただけますか？

寺添： やはり、まずは地域住民に理解されることが一番重要であり、そこから役場における自然学校の位置がはっきり見えてきます。私のところは 1 町 1 村の小さな合併です。1 万人の合併をただけなのです。本当は合併したくありませんでしたが、交付税の関係や、合併特例債がもらえるということがあって合併しました。その中で自然学校は、まだ明確な位置付けがありません。ですから、自然学校は今一度、大台町というフィールドの中でしっかりした位置付けにしたいという思いがあります。その中で、若者たちに高い志を持ってきてもらい、そこにいろいろな仕事を願うということ、当然あっていいのではないのでしょうか。アンケートを行うと、本当にほとんどの人が「このままでいい」と答えます。しかし一方で「交通が不便なところは何とかしてくれ」という要望もあります。非常に小さな幸せを、本当に皆が感じています。その中で、住民は質素儉約で、自然にやさしく生きています。これを都会の人に学んで欲しいのです。やはり、自然にやさしく生きる方法を、もう一回日本の中で学び直さなければいけないのです。全国の自然学校が



それを持っているのではないかと思います。

鹿熊：期待されているものや、これから自分たちが背負わなければいけないものが、始めた時とは違ってきているのではないのでしょうか？ 例えば、大杉谷自然学校という組織名でこのままやっていくのか、あるいは地域のNPOとして新たに組織変えて、多面的・多角的にやっていくのか、その辺りの意見・構想を聞かせてください。

大西：まず、我々のミッションの変化についてですが、私は地元出身だったため、スタートをした時は、地域で生活していくための仕事として自然学校というものをチョイスしました。従って、子どもが好き、自然が好きと言って自然学校に入ってくる人とは違い、金儲けとして考えていました。ところがやっているうちに、地域というものは、我々の金儲けのネタではない、そんなものにとどまっていられるわけがないと気付いたのです。今は、これからの日本社会のヒント、未来へのヒントは地域にあると考え、我々は未来を見つめたり、未来を創造したりする、フューチャリストになる必要があるのではないかと考えています。限界集落は消えるかもしれません。しかし、そこから発信する、今、学んでもらいたいことがたくさんあります。我々は自然学校という名前を変えるつもりは毛頭ありません。楽しいという漢字を使うつもりも毛頭ありません。学校は学校です。そういったものを学ぶところです。

阿部：この地域の人々は今の生活に満足している、幸せだと感じているということに引っかかっています。例えば、今の高齢化率75%という値がどんどん上がっていき、周りの人々がポツポツと消えていく中で、関係性、要するにある一定の人のコミュニティが成り立つ村民がいる所と、一人世帯、一軒家があるような所は共通なのではないでしょうか？ それとも、やはりそれなりにコミュニケーションが交わせるような地域の人たちのほうが幸せ感、あるいは逆に孤独感…… その辺は感じられますか？

大西：集落を考える時に、霞ヶ関のほうでは、もっと広域な範囲で集落をつくったらどうかというような話があると聞きますが、現場に来てくださいと言いたいです。実は、大杉地区は、人口は少ないが非常に大きな行政単位です。その中には大字があり、そして小字が存在します。私たちの地区には、さらにその下に「組」という単位が存在しています。やはり、「組」という非常に小さな集落の単位が一つずつ元気であるというのが、一番幸せ感が高いと思います。「組」は、徒歩5分以内で回覧板などを回す、という範囲の単位です。私は3組ですが、以前は3組だけで墓掃除をやっていましたが、人口が減って、5組と合同でやるようになってきました。

阿部：資料に「地域の人々が誰かに頼られる存在になると、その地域が元気になる」と書いてあります。今、満足だ、幸せだと思っている人々であっても、例えば外から来た人たち、自然学校で来た人たちとの関わりの中で、地域住民の人々の自己効力感とか肯定感のようなものが上がっていくというのは感じられますか？



自然学校は地域を救えるか？についての検証

寺 添：「組」について、もう少し話をしたいです。大西校長が言うように、集落というのは大小あり、10軒ほどの集落から60軒ほどの集落まであります。それらは昔の形であり、現在は10軒だったり5軒だったりしますが、その組の中で役割が決まっています。従って、高齢者はその中でも若いほう——60代、70代が若いといわれる年代——の人々が支えているのです。その仕組みを我々が邪魔するわけにはいかないのです。その役割を剥奪してしまうことは非常に難しく、そこで、何が過不足しているのかを調査をするという形になります。きちんと役割があるため、孤独という感覚は田舎の人々には絶対にはないと思います。自然と触れて、四季を感じ、人の繋がりがあるから、何も問題ないのです。都会のほうが非常に殺伐としていると思います。年齢的には高いが余力があるので、そこへ無理のない形で、その人々の能力を利用させてもらうという形がよいと思います。

大 西：やはり頼られるというのは非常に重要なことだと思います。それは自然学校や、そういった仕組みにとどまらず、あらゆることで起こるのではないかと思います。頼られている人間はなかなか死ねないし、死ぬ気も起こらないと思います。

阿 部：人口が減っていくと、頼られる存在でなくなっていくというのがあると思います。当然、減れば減るほど関係性はなくなり、薄くなります。そういう状況においても幸せなのでしょうか？

大 西：過疎化において、集落で果たす役割、家族において果たす役割がない人は、幸せ感は薄くなると思います。生きる気力自体が減ると思います。ただ、人がいなかったとしても、例えば神様が祭られているのであれば、それを守り続けなければいけないという、地域に発生している義務感というのは非常に強いと思います。



自然学校は地域を救えるか？ についての検証

三重県多気郡大台町
NPO法人 大杉谷自然学校
大西かおり

1



2

大杉谷自然学校設立の背景

- 主幹産業の林業が衰退して仕事がない。
- 若者がいない。
- 過疎高齢化した地域は元気がない。

平成13年4月大杉谷自然学校設立
環境教育で地域を活性化

3

1) 環境教育事業



4

2) 環境教育普及支援事業



5

3) 調査研究事業



6



自然学校は地域を救えるか？についての検証

災害後の魚類調査

7

4) 地域協力支援と地域づくり

8

自然体験活動3ポイント
～大杉谷自然学校の場合～

- ・ A自然体験活動を通して得られる学びの場

9

10

B なつかしい未来を
創造するためのアイデア箱

11

C 昔の日本人の
すごさを伝える劇場

12

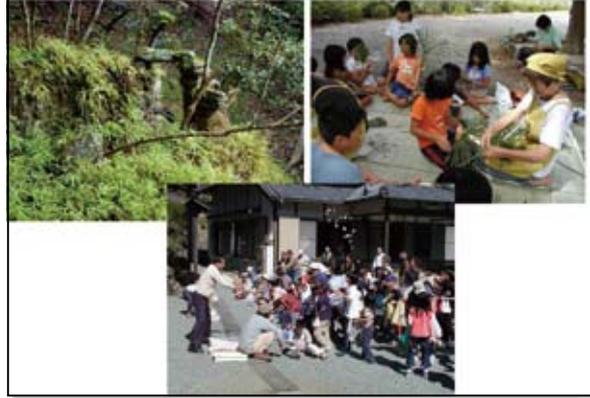


ある地域が消える日はいつか？



13

消えゆく昔の日本



14



“地域ガ消エル”
ということは
日本が古くから引き継
いできた
“心ガ消エル”こと

15

課題 ～限界集落化～

16

小学校なのに集落のはずれにある



17

限界集落は消えていく

- 集落が消滅して何か問題があったか？
- 地域の人々は平和に生きている。今の限界集落の生活に支障はない
- やがて静かに消えてしまうのが限界集落の自然である。

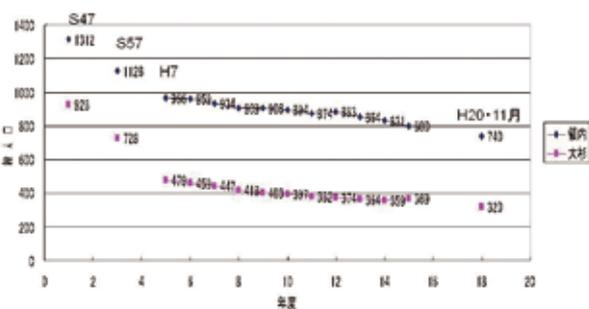
大杉谷地域 301人 高齢化率 70%

18



自然学校は地域を救えるか？についての検証

大杉と領内の人口推移



19

人がいない地域の問題



20

葬祭



そもそもこんな地域の慣習を守ること
に何の意味があるのか？



21

昔の冠婚葬祭の役割

- ・ 結束を固める手法の一つ
- ・ 一人前にする社会教育
- ・ 若いパワーの消化の場

地域は人を結ぶ壮大なシステム

22

お金より大事なもの

- ・ 田畑
- ・ 家族・親戚
- ・ 地域の人



23

お金 < 自然 = 田舎

自然 < お金 = 都市

24



お金で解決できて、いらなくなったもの

- 自然
- 地域のつながり
- 田畑
- 地域で行う冠婚葬祭
- 家族、親戚

お金があれば一人でも生きられる
都市化で一人ぼっち

25

お小遣い程度の経済効果



自然学校は産業にはなっていない

26

2名～4名増※



27

検証結果: 自然学校だけでは無理

行政のてこ入れを待つ

28



高野孝子 (NPO 法人エコプラス・代表理事)

TAPPO 南魚沼やまたくらしの学校は、我々 NPO と、いくつかの集落と一緒にやっている事業の名前です。「TAPPO」は、我々の方言で田んぼを指します。

この清水地区は、標高 600 ～ 650m の所にある南魚沼市の一つの集落で、もともとは清水村でした。南魚沼は豪雪地帯で、地球上で人が暮らしている場所で最も雪が深い場所だと思います。その中でも清水地区は雪が多い地域です。しかし、人々はここで何百年も暮らしてきており、そこで積み重ねた知恵があります。

我々は南魚沼全体の農山村を活動範囲としています。我々の活動は、「暮らす人々の幸福感・希望感」「地元子どもたちの成長と教育＝持続可能な社会の基盤」「互いの学び合い」「スモールビジネス」「すべての土台としての生物多様性」ということを目指して始めました。暮らしている人々が幸せで希望に満ちた村づくり、何といても、地元で育つ子どもたちが大事だと考えています。小さなビジネスをつくり、百姓のありようのように、たくさんのいろいろな仕事をしながら、そこで暮らしていくことができたらよいのではないかと考えています。

もともと、ECOPLUS (TAPPO の事務局である NPO 法人 ECOPLUS) が 10 年以上に渡って、この地域一帯でいろいろな活動をしてきたため、農山村が学びの宝庫であるということはおわかりしていました。学びの宝庫というのは、その人々の人生に関係すること、アイデンティティに関係すること、未来に関係すること、社会づくりに関係すること、平和に関係すること、です。

しかし、一つの事業を地域と一緒に興すということは簡単にはできません。NPO として勝手に乗り込んでいって「やらせてくれ」ということでもありません。きっかけは、栃窪集落の当時の区長から、小学校が統廃合になりそうだと言われたことです。その時、全校生徒は 8 人でした。新築して 3 年で統廃合の話が出てしまったため、何とかしなくてはならなくなったのです。ならば、その小学校を存続するかどうかということではなく、もっと広い視野で、南魚沼市の農山村の価値を世の中に問う、その時期ではないかということになり、TAPPO の活動が始まりました。

今、いろいろな問題が起きている中で、農山村が果たせる、農山村が持っている教育力というのはものすごいものがあります。それを村の中にいる人々に問い、外の人々に問い、皆で考えようというのが、我々の土台にある意識でした。農山村の価値を現代的・社会的に位置付けたいとあるように、雪深い所で人がずっと暮らしてきた、そこで培われた知恵や技術といったものの中に、持続可能な社会のヒントがあるのではないかと考えたのです。

南魚沼市全体を学びの場として、地域の人々から教えてもらう。学びは必ずしも一方通行ではなく、教えているつもりが教わっているということがあります。その中から共同作業でいろいろなことが生まれてきたらよいと思っています。

生態系調査、休日農業講座、子ども・ファミリー対象体験事業、都市農村交流事業、僻地ネットワーク大会の他に、「栃窪かあちゃんず」「ナメコ」を代表とするスモールビジネスなどの試みを行っています。

自然に働きかけるということから学べることはとても多いため、機械を使わない農作業を行っています。我々のためにわざわざ手作業でやってもらっているではありません。栃窪という集落は棚田で、大型の機械が入るには限度があり、平野の大き



高野孝子

(NPO 法人エコプラス・代表理事)

1963 年、旧塩沢町の酒造業（現在は販売業）を営む旧家に生まれる。北極海横断などの国際的な冒険プロジェクトを重ねながら、イギリスで環境教育についての研究を行い、エジンバラ大学で教育学博士号を取得、日本の野外・環境教育を先導。



暮らす人々の幸せと希望をもたらす農山村の宝



な田んぼでやっている農家とは競争できません。ならば付加価値を付けようということで、村の人々が伝統的な農業を取り入れること、つまり手作りをすることになりました。有機農業で、自然、水と土壌菌と虫といったものに繋いでもらった米を天日乾燥して市場に出すという、コシヒカリとしては通常、市場に出回ることがない、愛情いっぱい、手間ひまいっぱいの米をつくることになり、我々もその一部を手伝うという形で始まりました。

村の外の人々もやって来ますが、子どもも老人もサラリーマンも、いろいろな立場の人々が一緒に作業をします。いろいろな感想があります。生き方に関係するような感想が数多くあり、これはやはり農山村の教育力だと思います。人が自然の中で体を動かすこと、自然に働きかけることに関わるということは、生き物としての人間にとって、とても大事な何かがあると感じています。人生の教訓を教わったりする人もいます。村にずっと伝わってきた知恵や技術を教えてもらいながら、自然の近くに暮らすことの価値に触れる。そのことで、自分たちのライフスタイルを見直す。そのようなことに繋がっています。

清水集落は、ネット環境から無縁の場所でした。2009年10月に光ケーブルが通って、とたんにブログを始めたり、清水の人とメールのやり取りができたりするようになりました。

宝物会議、山里ワークショップというTAPPOのイベントをするために、清水地区活性化委員会が結成されました。この時の話し合いで、特産物としてナメコをつくることになりました。

現地の人々の多くは60代、70代で、危険な作業は彼らが全部やります。仕事が早くて格好良いので、皆が惚れてしまいます。共同作業の後に振り返りの会が開かれます。この村の宝物は何だと思ふか、これからどういうふうにしていけるかということ話し合うのですが、いろいろな意見が出ます。現地の人々は、村の外から来た若者たちを含め、いろいろな世代の人々と関わっています。

我々はそれぞれの地域でアンケートを実施しました。地域の人々の意見を総合すると、自然と食を生かした健康の里にしたい、子どもたちがずっと暮らせる地域にしたいという思いを持っていることがわかりました。もっと何かしたいと清水の人々も栃窪の人々も思っているので、そこに我々の事業があります。

先日、別の集落で会議があり、そこで「TAPPOを通じて元気になった」と言った女性がいました。「村が明るくなった」という声もありました。若い人たちが来て活気が出てきたと、70代、80代の人たちも言いました。

また、20代の若者たちが自分たちで村に関わり始めました。家に引っ込んでいた女性が外に出てきました。自分たちのところはそんなに悪くないという誇りが生まれています。

結束が固い村だと思っていましたが、TAPPOをきっかけに、今まで話をしなかった人と会うようになったと言われてとても驚きました。例えば清水では、学校が無くなってしまったことで、おそらく人が出会う関係が減ったのではないかと思います。



小野塚彰一（清水地区活性化委員会委員）

我々は、よそから来る人々は戦力だとも思いませんし、彼らが来たからといって、どれだけ良くなるかと頼らないようにしています。ただ、来てくれる人々は皆無茶苦茶一生懸命で、本当に清水を好きになってくれます。私は限界集落という言葉自体が大嫌いです。「歳は60過ぎたが、気は若いぞ」という気持ちでやっています。都会から来た若い人はパワーを置いていってくれます。そのパワーを貰えることが、我々にとってとても有り難いのです。そして、また次の年に彼らが来るのが楽しみになります。落ち込んできたかなと思うと、彼らが来てくれて、またパワーが貰えるので、本当に有り難いと感じています。

TAPPOに関わるようになって、村の人々が交流するようになり、委員長が「道路の草刈りに来てくれないか」と言えば、ひと声で集まるようになりました。これまでならば、「忙しい」「仕事がある」と言って、なかなか一つにまとまらなかったのが現状だったのですが、今では20代から80代の人まで出てきてくれます。その点はかなり変わったと思います。



小野塚彰一

（清水地区活性化委員会委員）

1949年生まれ、清水集落出身。JRの保線、建築土木関係などの仕事をしてきた。地域の仲間と一緒に、神社の鳥居やゲートボール場をつくったり、公民館新築に力を注いだりなど、集落のために熱心に活動。



〈質疑応答〉

広瀬： 福島県の阿武隈で自然学校をやっている進士さんは、全く地縁・血縁もない人で、地域に入った当時は、いったいどの馬の骨が来たのかという目で見られていたといいます。すぐ隣に住んでいる人が関心を持って、近づいてきて、いつしか一緒にやるようになったら、そこから劇的に地域との関係が変わりました。つまり地域にとって、身内の人が自然学校の重要な役割を果たすようになったわけです。そのような、地域との距離感や入り方は非常に重要なポイントだと思います。そうしたプロセスに失敗して、なかなか地域にとけ込めなくてめげてしまうという事例も実際にあります。その辺はどう考えていますか？

小野塚： 清水の集落の人々は全員、自分が教師だと自負しています。プライドが高く、何をさせても負けたくないという気持ちの人が多いです。この木を切るのは、あの大將でなければ駄目だというようなことが決まっています。そういうことに我々がやたらに踏み込んで怒られても仕方ないので、歳がいくつになっても任せるようにしています。

高野： とても重要だと思います。外部からある集落のことに何か言うのは余計なお世話。しかも集落というのは、一枚岩でも何でもなくて、複雑な社会が織り成されていて、口を聞ける人、口を聞けない人がいます。ですから、どの筋で地域に入れるか、自分が考えていることに共鳴してくれる人がいるか、一緒にやろうと思ってくれる人がいるかというのは、やはりとても重要なことだと思います。

阿部： 清水の集落は日本百名山の一つ、巻機山の麓です。巻機山の登り口に清水があります。非常に有名な山であり、いろいろな人々がやって来ます。大学の山岳部、大学の先生なども行ったりして、都会の人々がかなり行く場所です。今まで、そのような人々は単なる通過者になっていたのでしょうか？ そのような人々との関わりは今までにありませんでしたか？

小野塚： 過去にもいろいろな団体が来て、今でも一緒に活動している団体もあります。ただ、清水の集落が一丸となってやろうと言ったのは、高野さんが清水に来てからです。それまでは清水の総意としてということはありませんでした。当時、清水の人々は皆仕事を持っていて暮らしていける、そういう時代でした。誰の世話にならなくても生きていけるという自負心がありました。それが、今、このような時代になり、今度は誰かの知恵を借りないと存続自体ができなくなるという危機感が生まれ、そこでTAPPOが入ってきました。皆が潤うというような劇的なことはありませんが、精神的にとっても豊かになり、これからもまた、もっと良くなるのではないかという希望もあります。本当に持続させていきたいと思っています。



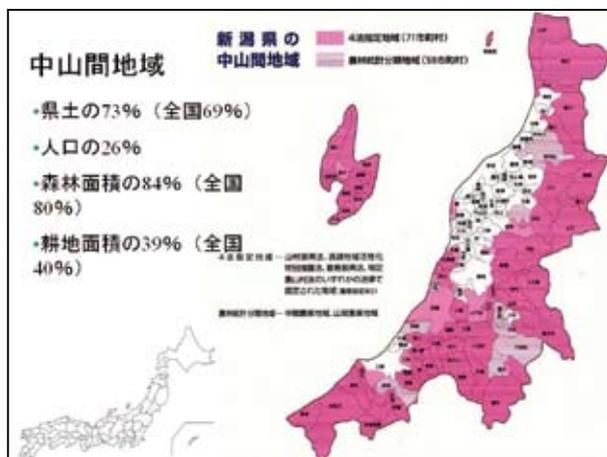
- 鹿熊：** スモールビジネスについてお尋ねします。まず、手間ひまをかけて、愛情を込めてつくっている米は、地元の人々に対して、どのような貢献性があるのでしょうか？ また、『地域活性化委員会だより』によると、お土産の販売所やコーヒーショップをつくりたいという地元の意向があるとのことですが、そのようなことは20～30年前から各地で試みられており、上手くいっていない地域もあれば、非常に売れている地域もあります。TAPPOは、人との交流を生かしたり、物販を生かしたりという仕組みづくりの中で、どのように資源を経済に結び付けていくのかという具体的な構想や細かいアイデアはありますか？
- 小野塚：** 清水もかつては集落内に3町歩近くの圃場（ほじょう）、棚田がありましたが、今、集落の中では米は一軒もつくっていません。清水の集落に田んぼの形はありますが、米はつくっていません。今は、木を切っても売れませんが、炭焼きをしても炭は売れません。熊捕りにしても、熊は捕れるかどうかわかりません。従って、ほとんどの人が勤めに出て生計を立てている状態です。当然、私のように年を取って会社を辞めると、楽しみもなく、年金だけで食べていくのはちょっと心細いということになれば、今やっているような地場産業、木を利用したナメコなどのキノコ類や山菜しかありません。そういったもので少しでも収穫を上げて販路を決めれば、少しは糧になるのではないかと思います。15～20年間はキノコの収穫があると思うので、それを期待しています。
- 高野：** 栃窪集落では、もう自分たちで稲作ができなくなった人たちの田んぼが、耕作放棄されないように集落営農が始まり、天日乾燥の米づくりはそこでやっています。現在、本当に手作りのものは限定をしています。村全体が同じレベルの低農薬や天日乾燥をするくらいでなければならぬのではないかという話は出てきています。販路は、今のところかなりあります。また、棚田オーナー制度という、環境保全にも貢献するサポートをしてくれる人々のシステムがあり、それがもっと広がれば村としてはかなり助かるはずで。コーヒーショップやお土産販売所は、今はまだアイデアの段階ではありますが、ただ、それで食べていこうというわけではなく、こういうことが始まると、他のことも始まり、そうなる今40代、50代の人々も仕事をもちながら、それをやり始めます。そして、それを見ていた子どもたちが起業します。インターネットも入ったし、民宿が多い所もあるので、いろいろなやり方で広がっていきたくらうと考えています。動きながら少しずつ先のことを計画したいです。



暮らす人々の幸せと希望をもたらす農山村の宝



1



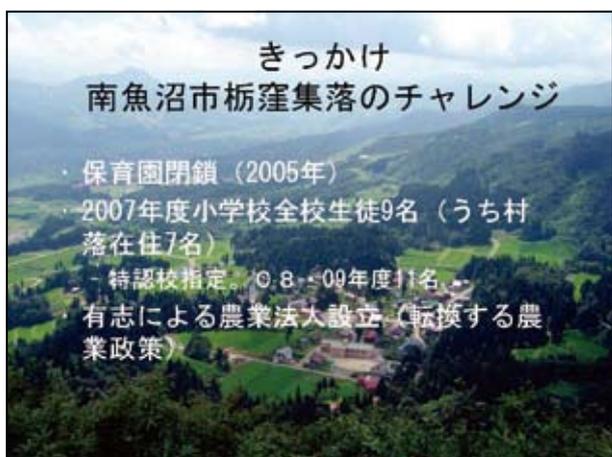
2



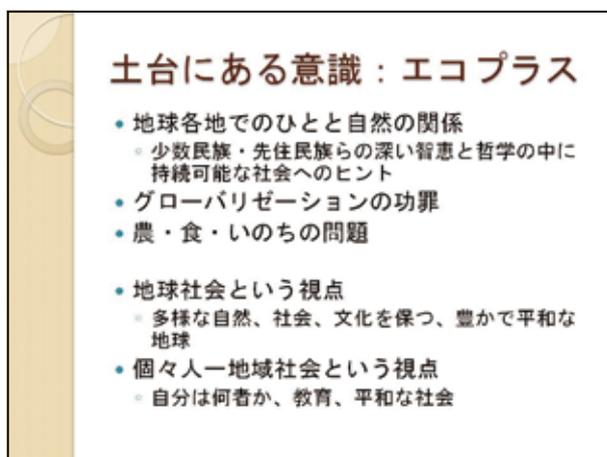
3



4



5



6



TAPPO設立へ

- 農山村の価値を現代的、社会的に位置づける
 - 自然環境と調和して存続してきた知恵と技術を、持続可能な社会作りという現代社会の課題に生かす
 - 持続可能な社会に向けてのシフト（価値観、地産地消、循環、経済・社会構造etc）
- 南魚沼市全体が学びの場
 - 地域の人たち、子どもたち、市内外、都市部
 - 後山・清水・栃窪（過疎高齢化進行中）の南魚沼大三角形の連携
 - 持続可能な社会に向けて
- 地域作り：創造的に地に根ざした教育から
 - アイデンティティと誇り
 - きずな

7

幾つかの試み

- 生態系調査
- 休日農業講座
 - 田んぼのイロハ
 - 畑と料理、食と暮らし
- 子ども・ファミリー対象体験事業
- 地域再生ビジョン会議、都市農村交流事業
 - 清水宝物会議、やまざとワークショップ
 - 横田草刈りアート日本選手権
- へき地ネットワーク大会
- 「栃窪かあちゃんず」「なめこ」などスモールビジネス

8

農地・水・環境保全対策事業

とちくぼ生きものプロジェクト

まず地域の人たちが自分たちの環境を知る。理解と愛着、誇りが生まれる。アイデンティティにつながる

9



10



11



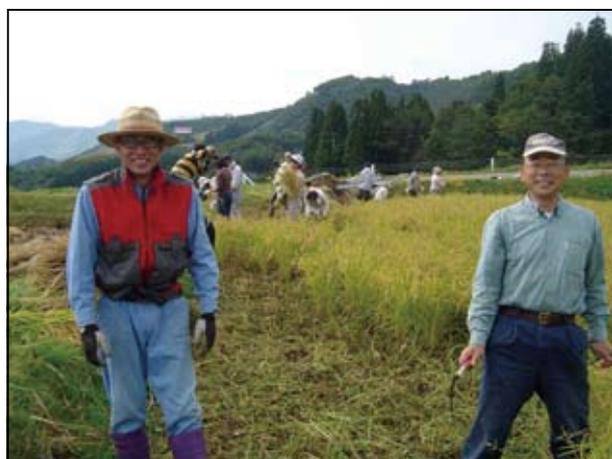
12



暮らす人々の幸せと希望をもたらす農山村の宝



13



14



泥の感触、草の取り方・・・五感で体感できた事が感激でした。地域の方々の暖かさにとっても感謝しています。これからはお米を大切に食べたい。土に向かって生きている人たちはすごい。今までずっと、一日24時間じゃ足りないなと思っていたのに、24時間ってこんなに楽しめるんだと思った。

15



母ちゃんの畑
食と暮らし

16



大豆の苗を生まれて初めて植えた。2本で植えると競争するという話に感動した。3本でもだめということ。欲張ってもだめなんだと教わった気がする。

17



18



19



20



21



22



23



24



暮らす人々の幸せと希望をもたらす農山村の宝



25



26



27



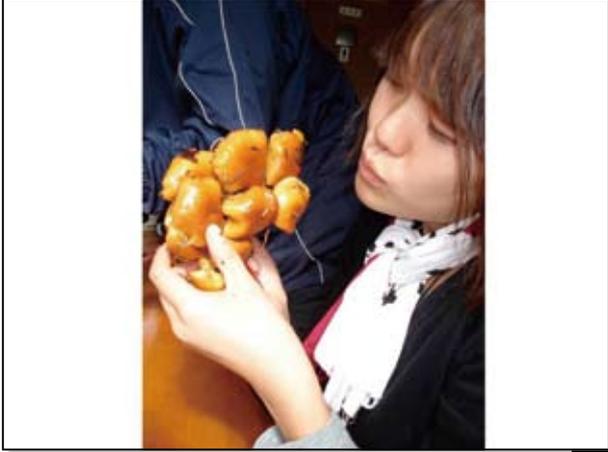
28



29



30



31



32



33



34



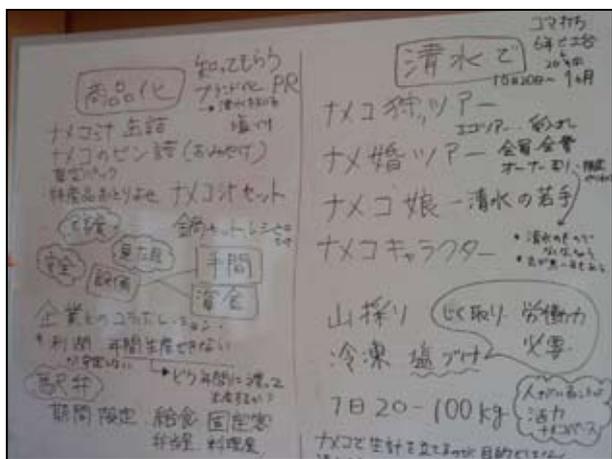
35



36



暮らす人々の幸せと希望をもたらす農山村の宝



37



38



39



40



41



42



観光まちづくり産業で未来に遺し、 伝えるプロジェクト

おぢかアイランドツーリズム協会

高砂樹史 (NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会・専務理事)

小値賀町は五島列島の北端にあり、博多からは約5時間半、佐世保からは3時間～3時間半の場所です。自然学校は私が来る前の2000年頃から始まっています。

島という特別な環境外海離島では、島の中ですべてが自活されなければなりません。佐世保までは3時間～3時間半かかるため、若者は佐世保に仕事に通うということが一切できません。島はまさに一つの国のようなものであり、貿易収支を考え、外貨をどう稼ぐかということを考えないと、島そのものが存続していけないという状況にあります。当然、自然との共生や、島の文化を守り育てていくという観点で活動していますが、同時に「なんぼ儲けんねん」ということも真剣な課題になっているのが現実です。

小値賀町の人口分布図を見ると、団塊ジュニア世代が一番欠けているのがわかります。当然、出生も少なくなってきています。2005年の人口は3,500人でしたが、2010年4月にはおそらく3,000人を割る見込みです。年間100人ずつ減っています。最も深刻なのは、18歳以下の子どもたちであり、急激に減っています。

島には小、中、高と1校ずつあります。2005年には高校3年生が2クラスあって、70数名いました。しかし、2009年に高校へ入学したのがたったの23人なのです。現在、小学校6年生、5年生がそれぞれ12～3人で、3年後には10人ほどになります。つまり、約8年で高校1学年の数が8分の1になっているという異常な減り方なのです。

産婦人科がないため、10数年ほど前から島内で子どもが産めなくなっています。里帰り出産ができない島民の場合は、自然分娩するのであれば1～2週間前から旅館代を払って佐世保に行くことになります。それができない人は陣痛誘発剤を使って、自然分娩はできないということになっています。

高校の存続も非常に危険な状況になっています。高校がなくなれば、島で子育てをしようという条件がなくなってしまうのは当然です。高校に行かせるために下宿をさせることができる裕福な家庭は島には一軒もありません。

そのような中で、観光を産業にして稼がなければなりません。特に若者たちの仕事を作らなければならないということで、現在の1億円の事業規模を、何とか物産も含めて5億円の事業規模にしていきたいと考えています。

現在、NPOでいわゆる教育プログラムを中心に、年間約1万人の客に来てもらい、1億円ぐらいの事業という形になっています。全体の8割が青少年向けの教育プログラムになっていますが、現実にもっとたくさんいるはずの大人の客を、しかも単価の高いお客様をしっかりと呼び込むために、もともとあった古民家——小値賀町はもともと江戸時代にクジラ漁で栄えて、米もたくさんつくれる豊かな島だったため、酒蔵が5軒あったりと、豊かな古民家がたくさんあります——の事業を、株式会社を設立して運営するとともに、旅行業の免許を取得して、様々な着地型の旅行商品を販売していくという形で大きく展開をしていき



高砂樹史

(NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会・専務理事)

1965年生まれ、大阪府八尾市出身。大学卒業後、インド、ヒマラヤを放浪。額に汗して働く人々の姿、都会なのに鶏がいる暮らしに触れ、「日本は異常だ」と感じたのが原点。25歳で劇団わらび座の公演に感動し入団。在籍10年のうち2年間は、東京事務所でプロデュース的な仕事を行う。00年に退団。島根などで有機農業を学んだ後、「昔の大阪のような町、食べ物が身体になじむ、完全な田舎」が気に入って、04年末に小値賀島に移住。



観光まちづくり産業で未来に遺し、伝えるプロジェクト



たいと考えています。

そのため、NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会と、株式会社小値賀観光まちづくり公社を設立しました。以前のNPO 法人の時代から、島の観光のワンストップ窓口として、一本電話をもらえれば、民泊、自然体験、弁当、チャーター船など、あらゆることを手配したり、島に向かってくるフェリー、高速船などの欠航情報を流したりという観光サービスを行っていたのですが、そのもの自体を旅行業として事業にシフト、同時に様々な旅行商品を生み出していこうと考えています。

ここ数年間で増やしてきた修学旅行生などの体験・交流目的の客にプラスして、1泊2食2万2,000～2万3,000円ほどの客を獲得するために、農水省や国土交通省の様々な補助金を利用して古民家の事業を立ち上げ、総事業費2億円ぐらいでレストランと古民家の宿泊、プラス大人の体験プログラムという形で展開していこうと考えています。

この島では1年のうち、安定して船が走るのは3～4カ月で、それ以外はいっつ船が止まるかわかりません。いったん船が止まったら、2、3日は止まってしまい、スーパーから物がどんどん消えていくということも普通です。例えば、台風が来た場合は「島を出られなくなるので帰ってください」と、240人の横浜から来た修学旅行生にも帰ってもらうということもありました。そのような事業展開であるため、これからは個人の大人の客を増やして、島の中でしっかりと雇用をつくっていこうと考えています。

町民は約3,000人ですが、高校生や子どもたちも含むと1,000人以上、3人に1人が交流に加わってもらっています。NPOは1軒で1会員と考えるため、会員数は約100です。島全体が1,300軒ですから、13軒に1軒はNPO会員になってもらい、島ぐるみで活動しています。



〈質疑応答〉

鹿熊： 自然体験のノウハウを、今度は株式会社という組織形態の中で、もっと多角的に観光を展開していく。その一つとしてツアー会社と提携するという話がありましたが、各地でいろいろな事例を聞くと、現実には、ツアー会社というのは自然教育と合致しないような注文もたくさんつけてくるのではないかと思います。そういう部分で、ここだけは守りたいポリシーやガイドラインなどについて、どのように話し合っていますか？

高砂： なぜ株式会社の形態を取るかという、現行のNPO法人に関わる日本の法律の限界で、旅行業、レストラン業、物産業などをやっていくにあたって、どうしてもそれらが営利事業と見なされるからです。NPO法人のままでは難しいので、NPO法人はNPO法人として残しながら、株式会社は株式会社として別の法人でやっていくということになりました。我々はその全体をアイランドツーリズムグループという形でやっていくので、2つの法人ではありますが、活動そのものは当然、この島を次世代に残していくための事業ですので、利益が出ても株主に配当はなく、利益が出れば次の投資や事業の展開や新しい仕事を生み出して、島の若者たちの仕事をつくっていくというように展開したいと思っています。

広瀬： 高砂さんは古民家を改修して行っていく過程の中で、現状の法律との壁にぶつかって、大変苦労しています。実際に、自然学校やエコツーリズム、グリーンツーリズムをやっている人の多くが違法状態に置かれています。これは、日本の法律の大半が戦後、業界が高度成長の中でつくられていく過程で、業界を保護するために業界のための法律・業法がつくられていったからです。業法というのは、基本的にそれを専業にしている人たちのための法律を指します。ところが、自然学校などの活動をしている人は、専業といえる程の収益もあげておらず、いろいろな生業をしながら活動しているというケースが多い。そうすると結果的に、車に載せても、泊めても、ご飯を食べさせても、プログラムを行っても、すべて違法になってしまいます。これは問題だということで、国でも、規制緩和や特区などの形を取っているのですが、根本的な解決策ではありません。現状は、まだこの辺の突破ができておらず、専業から多業、いろいろな生業を持つという仕組みを日本の地域社会に根付かせようということ、ようやく国の報告書でも出すようになってきています。そのような中で、仕事がないということがよく言われます。田舎には仕事がない、だから、若者は出て行ってしまふ。実は仕事がないのではなくて、仕事をしていた人が辞めて、出て行ってしまふのです。そのため、田舎はかなりの人手不足に陥っています。仕事不足、人手不足だ。田舎にこそ、たくさんの仕事が欲しいし、もっともっとつくれる隙間があります。高砂さんたちはその辺をつくってきているということだと思います。





観光まちづくり産業で未来に遺し、伝えるプロジェクト

高 砂： 中学校の先生に聞いて、一番ショックだったのが、中学3年生に聞いたら、3割の子どもが島に残って家業を継ぎたいと答えたということです。しかし、現実には20数年間、島に残った高校生は役場の職員くらいで、3年か5年に1人くらいしか雇わないということになっています。隣にある、今は我々のフィールドになっている無人島の野崎島は、もともと33集落800人が住んでいましたが、昭和の高度経済成長期にあっという間に無人島になってしまいました。あっという間に無人島になるという現実を目の当たりにしているので、そのような中で、どうやってその隙間の中に仕事をつくっていくか。そして、半官半農、半官半漁という形で、いろいろな仕事を一人がたくさん持つことで、何とか一軒の家族が食べていけるように、というようなイメージで活動しています。



西海の島 長崎県小値賀町

「心に残る島 おぢか」

観光まちづくり産業で
未来に遺し、伝えるプロジェクト

五島列島の北、
西海に浮かぶ17の島々からなる小値賀町。

ここでしかない出会いを
たくさんの方に届けるために。

私たち「おぢかアイランドツーリズム」の
「観光まちづくりプロジェクト」を
支援してください。

観光まちづくりの実際
詳しくはこちらの資料

1

福岡から 博多港より
フェリー太古で約5時間
野舟商船TEL092-291-0510
毎日運行(月一往運休日あり)
(深夜0:01出港)

各地より

長崎から 佐世保港より
フェリーが4便
高速船が3便
九州商船TEL0954-22-9151
美咲海運TEL0956-42-5607

詳しくは参加要項で
お知らせします。

博多港 博多駅 佐世保市 長崎市

おぢか 小値賀島 野崎島 上五島

船舶

2

これまでの取組

これまで 私たち「おぢかアイランドツーリズム」は
島の人、島の自然、島の文化、島のかげえのない魅力の数々と
訪れる人たちを結び、この島の恵みを感じていただきたい、と
一つひとつの事業に取り組んできました。

これまでの取組 1. 島ぐるみのおもてなし

これまでの取組 2. 野崎島をまるごと体験

これまでの取組 3. 国際的な交流

3

これまでの取組 1. 島ぐるみのおもてなし

小値賀島「民泊」

小値賀島で暮らす漁師さん、農家さんの
「普通のの家」に家族のよびこりおもてなしの
「民泊(みんなびの)体験」
一緒に食事をつくり、お話し、おしゃべりします。

4

これまでの取組 2. 野崎島をまるごと体験

野崎島「自然体験」

カヌー、磯遊び、タビの島までトレッキング、
無人島の自然をながめられるまで楽しんでから
水産校舎「自然学習館」でバーベキュー。

夏休みのことなかち、家族を中心に、
「心に残る特別な夏休み」を、一緒につくる
おもてなしをしています。

5

これまでの取組 3. 国際的な交流

長崎おぢか国際音楽祭
PTPアメリカ国際親善大使

PTP

6



観光まちづくり産業で未来に遺し、伝えるプロジェクト

私たちが目指す 小値賀の観光まちづくり

- 「小値賀らしさ」を大切にします
過疎高齢化により島から失われゆく文化・自然・景観を、日本・世界の多くの人々が享受できる形で再生、小値賀を愛するファンとともに継ぎ、次世代へと渡します。
- 経済に貢献し、若者が暮らせる島へ
島のさまざまな地域資源を活かすこと、島の人に活躍の場を提供することで、観光業のみならず各産業に活力をもたらし、島を離れたくない若者・島暮らしに挑戦したい若者が、安心して暮らせる島をつくります。

私たちは「心に残る島 おぢか」を、島に住む、島を訪れる、多くの人々とともに再生し、未来に残し、伝えていきます。

19

各自然学校／事務局・地域からの報告を受けて、
報告者全員によるパネルディスカッションを行いました。

ESD（持続可能な開発のための教育）について どう思いますか？

- 関原：**（「？」と回答）本当にわかりません。特にいつもわからないのがESDのDです。
- 司会：** Dはディベロップメント＝開発。これについては、客席の中野民夫（ESD研究センター CSRチーム研究員）氏が適切に答えられますか？
- 中野：** ディベロップメントは厄介で、日本では「開発」と訳が定着していますが、もともとは「包んであるものが開かれる」とか「成長」「発展」という意味もあります。これが開発というと、ダムやリゾートの開発をイメージさせてしまい、人間性や社会の開発という意味が隠れてしまいます。従って、持続可能な社会や持続可能な未来、持続可能性と言い換えたほうが、日本の場合はスムーズだと思います。しかし、もとは「可能性を開いていく」というとても大切な意味があり、非常に厄介であります。何かそこに可能性がある言葉なのだろうと思います。
- 辻：**（「お互い様」と回答）あまり難しくは考えていません。あのような地域で大事にしてきたことをしっかり伝えていくという意味でお互い様だと思います。一人ひとりが大事にされる世の中を目指しているので、例えば泰阜村では、豊の上で死にたいという老人のことをどう応援できるか、満州で開拓して帰って来て、地域の中では難しい立場を迫られている中国の文化を背負った人々にどうスポットを当てるか、そのようなことをしっかりやっていくことではないかと思います。
- 大西：**（「地域はそうでしたよ」と回答）たまにはダムをつくったりと、持続可能ではないこともあったかもしれません。概ね地域ではそういったところを昔は目指していたのではないかと思います。
- 小野塚：**（「好き」と回答）漢字で書いてもらえば少しは意味がわかるのですが、言わんとしていることは、我々は以前からやってきているので、これはよしとすべき。
- 高砂：**（「E えらい、S すごい、D でっかい・・・テーマ」と回答）そんなに大きいことを地域に言われても困るという意味です。例えば、私は主義として米を有機無農薬でつくっていますが、地域で米をつくっている人々は、もうほとんどが60代、70代ですので農薬を使います。除草剤を使わないでやろうと思ったら、この会場よりも広い300坪の田んぼを、4回ぐらいつつと草取りに入らなければなりません。そういう苦勞を老人にさせてよいのかと私は思いますが、都会の人が来ると、あっさり「ああ、ここ、農薬使ってるんですか」と言います。それはよく考えたほうがいいと思います。



司会：川嶋直

（立教大学 ESD 研究センター・CSR チーム主幹）
大学院異文化コミュニケーション研究科・特任教授。1980 年より山梨県北杜市の清里、ハケ岳の麓にある（財）キープ協会で環境教育事業を担当し、現在は常任理事を務める。「自然と人との橋渡し役」といわれる「インタープリテーション」と仕事とし、環境教育・野外教育・森林環境教育の指導者やインタープリターの養成事業の企画・運営を担当している。日本環境教育フォーラム・専務理事、自然体験活動推進協議会・理事などとして、2005 の「愛・地球博」における森の「自然学校・里の自然学校」統括プロデューサーも務めた。





パネルディスカッション



——— タイトル「自然学校は地域を救う ESD 拠点として期待される自然学校」をどう思いますか？

関原：（「気味が悪い」と回答）生理的に気味が悪い。要素は総合的だと思いますので、自然学校が、ということで、逆に環境そのものが具体から離れて、形而上学になるのではないかという怖さを感じます。私が思うに、我々の自然学校は地域から救われています。逆です。

横前：（「無限の可能性あり」と回答）泰阜村では、グリーンウッドのスタッフからいろいろな意見をもらっています。泰阜村にとっては、一つのシンクタンクでもあるという位置付けをしているので、そんなスタッフの皆が、同じように泰阜村をどのように描いていくかという、村を描くのに同じ歩調でいてもらえるので、これからも無限の可能性があると考えています。



寺添：（「ちょっと荷が重いですね」と回答）自然学校と言い切ってしまうと、ちょっと厳しいと感じます。地域全体で、行政も地域の人々も、皆が同じスタンスで理解し合うということが重要だと思います。

高砂：（「誰のために地域を救う」と回答）例えば小値賀のような離島や、自然が豊かで、そこに行けば、きっと都会の人が癒されるだろうというような地域、もしくは食料を供給するような地域。小値賀でいえば、漁業がそこで営まれており、まさに国境の海を守っているわけです。漁業が営まれている範囲だけでいえば、一つの県をはるかに凌駕するぐらいの広範囲で漁業が営まれています。その地域を救う、守る、存続させるというのは、一体誰のためだろうか？ 地域の人のためだろうか、それとも…… 本当に誰のためだろうかということは、是非また一緒に考えたいと思います。

小野塚：（「自分たち」と回答）自然学校をやったとしても、果たして、その集落、その地域が発展するかといえば、私個人としては、そうではないと思います。きっかけをつくってくれるのは確かに自然学校です。きっかけはつくってくれますが、実際にやるのは自分たちだと思います。その地域が一丸となってやるというのが大切だと思うので、本来、自然学校の団体が自然学校をするのではなくて、それより一歩進んで、その来てくれた客や子どもに対して、我々が自然学校風にやれば良いと思います。夢は大きいですが、そのようになれば良いと思っています。それで、「自分たち」ということになります。

——— それぞれの地域で、年間で最大何人受け入れることができますか？

関原：（「9,000人」と回答）これは単純に、宿泊が可能な部屋数×日数×5掛け。

司会： ×5掛けとは？



- 関原： だいたい50%くらいだろうと思っています。
- 大西： (「5,000人」と回答) 日帰りも含めて体験者数が年間4,500人です。プラス500人で、5,000人です。
- 高砂： 目標は30,000人泊。5人家族で約1,800人泊。
- 高野： (「1万人」と回答) 清水だけで、1日100人を民宿に泊めることができます。また、清水が麓にある巻機山は、少なくとも3万人は年間登山者がいるということから、民宿に泊まるだけでなく、外で寝る人などを含めば1万人くらいだと思います。
- 辻： (「 $1,100 \times 3 = 3,300?$ $20 \times 300 = 6,000?$ 他いろいろ」と回答) 自分のNPOのやっている数字ですけれども、ちょっとよくわからなかったところもあったので、話をすると、上(3,300)は、夏・冬のキャンプの子どもたちの人数を3泊として、これぐらいです。下(6,000)は山村留学で、1年以上いるので、要は延べ人数とすると、これぐらいになります。あとは、山村留学をやっていると、保護者やOBがたくさん来るので、それは計算できませんが、たぶん1,000人、2,000人が1泊ずつするくらいかなと思うので、今、実数はこんなくらいだと思います。そのような人々を我々の所にだけ泊めるのではなくて、隣の旅館や、地元のいろいろな所で泊めているので、もっと受け入れられるかと聞けば、もうちょっと受け入れられるかもしれません。
- 司会： この質問をしたのは国際自然大学の桜井氏ですが、どうして、この質問をしたのでしょうか？
- 桜井： 全国の子どもたちにこのような体験をさせたほうがいいという話が出ていますが、それを受け入れるだけの数字が出せるのかと思ったからです。とりあえず、今回参加した方々が受け入れるとしたら、何人受け入れ、それを掛け算して、自然学校の数で掛けると、受け入れられる人数が出て、日本中の1学年を本当にNPOの自然学校で受け入れられるのかということなどが計算できるかと思いました。



———— 1ターンのエピソード、苦労話

- 司会： 辻さんと高砂さんに質問します。他の人は皆1ターンですが、辻さんと高砂さんは2ターンです。外部から入っていくのは、なかなか大変だったのではないのでしょうか？
- 辻： 私はたまたま泰阜村にやって来ました。実家は福井県ですが、学生時代は札幌で体育の教員を目指していて、小さな僻地で教員をやりたいと考えていました。学校教育の前に社会教育の場を2年ぐらいうろろと思い、研修のつもりで入ったのが、たまたまこの泰阜村のこの団体で、こちらの方が面白いということで17年経ちました。地域は大変ですが面白い。大変なだけだったら、たぶんこの場にはいないと思います。17年ぐらいて経って、肩肘を張らなくなってきました。はじめ



パネルディスカッション

は、やはり地域に理解されようとか、皆に同化しなきゃと考えていて、結果的に、それは自分の中では不自然な状況でした。この2～3年はあんまり無理して理解して欲しいということはなくなってきて、「俺だって15年いるぞ」というくらいに考えてやっていますので、今は本当に楽しいです。

高砂： 私は、2000年に子どもが生まれたのをきっかけに仕事を辞めて田舎暮らしを始めました。田植えも稲刈りもまったく経験がありませんでしたが、子どもができて、自分でつくった米、野菜を食べさせる生活をしたいと思いました。本格的な田舎暮らしをするため、場所を全国で探して、3カ所目に住んだ場所が小値賀です。小値賀は、実は関西との繋がりが歴史的にもすごく深い場所で、関西人の私にとっては懐かしさを感じることができる場所でしたので、「ここで子どもを育てたい」と思い、やって来ました。厳しいか、厳しくないかと言われるれば、本当に厳しいです。とにかく最初は、まず言葉がわかりません。集落の村に入って、村の共同作業に出て行きますが、その中で話している言葉の8割から9割はわかりませんでした。今では5割ほどは理解できるようになってきましたが、地域のいろいろあるうちの一人であるうちは、地域の人々も大歓迎という感じですが、このような事業の中心を担当することになると、当然、いろいろなしがらみが出てきたりします。合併問題で真っ二つに割れた島ですから、そのしこりの真っ只中にこの事業もあるわけで、事業の中心になればなるほど風当たりも強く激しく、また応援してくれる人も強く激しくなります。田舎なので、100%全員と笑顔でということは、まずあり得ません。逆に、そのような人間関係の中に入れてもらっているということを喜びに感じなければならないと思っています。

——— 地元の子どもたちを自然学校で教育することによって、人口の流出を防ぐことができますか？

高砂： 「子育てできる収入が必要」と回答 私も最初は、島が嫌いで出ていくのだと思っていました。しかし先ほど言ったとおり、ショックだったのは、3割の子は島が大好きで、島に残りたいが、仕事がないから残れないという現実があることです。仕事というのも、当然、島だからといって自分の食い扶持だけでは駄目なわけで、子育てできる収入が必要です。島から他の島や内地には通勤できませんので、島の中で子育てできる収入を保障しなければなりません。現在、子育てをしているのは、ほぼ役場の職員だけです。

岩片： 「できる」と回答) できると思うし、実際、できています。3世代の家庭があります。親は自分の親を見て育ち、その子どもはまたその親を見て育つという、このような3世代の中で、いろいろなことが教えられ、そして、今いる子どもは育っています。雨が降ってから川へ流れるまで17km。その途中に住んでいるということは、5km～





10kmくらいの所に住んでいるということ。町まで5km、10kmというのは、今の時代では情報もあれば、自動車もあるから、実は生活圏内であるということ。そういう意味ではできています。なおかつ、町で仕事をしていますが、頭の中に残っている思いというのは、自分の故郷に繋がるものをかなり持っています。このような意味で「できる」という表現をしました。

横前：（「一度は都会を、外を見ること」と回答）私は泰阜村に生まれ育って、今も住んでいますが、一度は外に出てみないと、村の良さはわからないと思います。一度は外を見て、そして、村の良さに気づき、グリーンウッドが実施している子どもに対するプログラムを見て、「こんな素晴らしい村なのだ」ということを感じて村に帰ってくる。これがベストではないかと思います。

小野塚：（「イエス」と回答）私もできると思います。ただ、清水の場合は20戸の集落で、現在、子どもは、中学生が3人、小学生が2人しかいないのですが、今、手伝いをしていれば、将来町で暮らすことになっても、車で15分くらいですから、すぐ手伝いに戻ってきます。それは我々が一生懸命になれば絶対にできます。私の集落の兄は、親の面倒を見て、跡を継がなければならないということを叩き込まれているため、家を出て、家へ戻って来ないというのは、やっぱり引け目を感じると思うので、これはできると思います。

寺添：（「町内に住みたい子どもは増えるが、流出は止まらず」と回答）時代が随分変わり、本当に今、子どもたちは実は田舎にとどまりたいと思っています。そのため、職場をつくろうと努力はしていますが、ある意味、無理な面もあります。自然学校の環境教育という形で、地元の学校でキャンプをしたり、いろいろなことをしながら、地元を学んでもらっていますが、無理があります。昔は、大杉谷から多くの人が大阪に出て行きました。炭や木材で大阪に流れました。その次は集団就職で名古屋、東京に出て行きました。しかし、調査をすると、最近の人はほとんど県内にいることがわかりました。モータリゼーションが発達して、近くの町は近距離になったのです。そのように考えると、近くに家族が住まわれることで、大杉谷という集落の人口は減りますが、集落としては存続できるということも考えられます。

——— **2010年度の林野庁、農水省の予算では、民主党の方針で経済効果が期待できないものは削減される見込みとなっています。こうした流れを止め、山村の良さを持続させていく教育を行うためには一体何が必要でしょうか？**

関原：（国と縁を切る！！→「クニへ」と回答）要するに、国と縁を切れればいいと思います。文句が出るというのは、どこかで頼っているからで





パネルディスカッション

す。それは仕方ないので、根性の中で縁を切ってしまう方がいいと思います。お前なんかいなくても生きていくという気持ちでいると、いつか向こうが仲間に入れてくれと言うかもしれません。

辻 : (「小さい力を信じる」と回答) 泰阜村は非常に国策に長く苦しめられてきた村です。自治体合併に至って、もう国策は信じられないと思っている人も多いです。従来の指標では、このような地域は不合理、経済的に非合理ということで切り捨てられ、この村はごみのようなものでした。そのような指標は、食べていくためには当然大事にしなければいけないと思いますが、これからは新しい指標、ものさしをつくっていかねばならないと思います。要は、周辺に置かれている、弾き出されてしまった小さい力が——それは子ども、老人、障がい、僻地、農山村のことですが——本当は強い力を持っているということをしつかり再評価して、それらが結集して支え合って初めて、大きな力が出てくると思います。従って、今までの指標でものを考えるのではなく、今まで捨ててきてしまった指標でものを考えていくような地域づくりを自然学校が果たせたらよいのではと思います。国と縁を切るまではいかないが、国のことはあまり信じたくないとは思っています。



高野 : (「調査/発信、教育→機運」と回答) イギリスでは、経済的に困難な時期だからといって、青少年の教育に力を入れないと、将来、さらに大きな経済的ダメージを生むという調査結果が、2009年くらいからたくさん出ています。民主党議員の教育は、即効性的には必要ですが、やはり調査・研究をした結果として提示しない限り信頼できません。従って、もっと調査・研究をして、それを伝えていく、発信していくことがムーブメントになっていかないと、世の中、特に議員は動きません。政府の予算の話ではなくて、社会の流れの中で、このような農山村の教育力や青少年だけではなく、いろいろな人の自然体験や環境教育・野外教育が重要なのだという機運をつくっていかねばなりません。



大西 : (「70%インフレ」と回答) 現在、文化や地域というのは金食い虫で、経済効果がありません。従って、切り捨てられるという話もよくわかりますが、そのような場所にある、金に換算できないものの価値を見直してもらい、それにもっと金を出してもらおうという方向性が必要なのではないかと思います。



07

まとめ

最後に、3名の専門家から、まとめの挨拶が行われました。

鹿熊：（「あたたかいお金が希望になる」と提示）参加した方々はそれぞれ、出身地も考え方も違いますが、同じようなことを目指していると感じました。それをまとめるものは何かと考えると、温かいお金なのではないかと思います。私は、雑誌や本のライターをやっている、取材を仕事にしています。対象はほとんど地方で、都会を知らない、東京を知らない地方の人たちをずっと見ていますが、地方で議論になっているのは、やはり経済、お金の問題です。なぜ若者はとどまれないのか、人口が減っていくのかは経済の問題で、やはり経済の仕組みがおかしいという点では皆認識が同じです。ただ、お金を語ると、何か汚いものを扱うように、もっと大事なことを話そう、お金より大事なことを話そうという機運になりがちです。そもそもお金や経済のあり方を一回語り直さないと、地方の問題は解決しないのではないのでしょうか。都会ではお金があれば一人で生きていけます。これを逆に言い換えると、お金がなくなったら、都会というところは人の生きていけない場所ということに。その現象が年越し派遣村の問題などで出ています。お金がどんどん冷たく、冷酷になっている。地域の中にお金は必要なのですが、それはやはり温かいお金であるべきで、その点では伝統的な田舎の中にある交換経済は非常に温かい。例えば、誰々の知り合いだから買って帰る。見える範囲でお金を回し合うという仕組みはお金を温め合う田舎の伝統的な仕組みです。さらに昔は「講」というものがありました。これは皆で集まって、お金を融通し合って、借りたい人に渡すような仕組みです。地域金融とでも言うべきものもあったのです。今日意見を聞いて、皆さん「お金を稼ぐ」ということを模索しているのだと感じました。今のお金、経済とは違うお金を目指しているのだと感じます。田舎ならではの経済の仕組みづくりを、もう一回持続可能というテーマの中で語っていくような機会があってもよいのではないかと思います。



まとめ

広瀬：（「伝承と貢献」と提示）私は、自然学校の役割は、この2つの言葉に尽きるだろうと考えています。私自身は30年ほど前に、本当に小さな村に住みつき始めました。全く地縁も血縁もないところに行ったわけですが、なぜ、そこに行ったのかというと、関原氏の言うところの自給自足で生きるリアルな暮らしをしたいと思ったからです。行ってみたら、昔の人々はすごい「日本人」でした。当時の人たちはもう皆死んでしまいましたが、私は、その人々に徹底的に教わりまわりました。教わりまくったことによって、今、私がやっているホールアース自然学校というのできあがったと考えています。今、見渡してみると、若者たちがいなくなって、家の中でも子どもたちもいなくなって、大人が子どもに、あるいは年寄りが若者に伝えるということがなくなってしまいました。限界集落に行ってみると、確かに皆元気なのですが、それは次世代がいらないから、仕方なく自分でやっている元気なのです。確かに頑張っていて、その限りではよいのですが——「伝える」という本能が人間にはあると思うの





まとめ

ですが——その伝える相手を失ってしまっている状況があります。自然学校は、スタッフも参加者も現地をフィールドに現地の人と知恵を伝え、伝わる関係をつくることで、もう一度、田舎の、すごい日本人の力がよみがえるようなことになるのではないかと思います。さらに、「結い」や田舎の支え合いということ、つまり貢献ということは、市場経済に翻弄されてしまった今の日本社会をもう一度洗い直しをするために、お互いに貢献し合う関係を持つことです。自然学校は地域を救うではありません。そのような一方通行の話ではなく、持ちつ持たれつ、お互いに支え合う、教え合う、学び合うという人間関係をもう一度作り直すことではないでしょうか。それが、自然学校ができる貢献の一つの形なのではないかと思います。



阿部：（「参画と協働の再興（ハブ）」と提示）私も各地の自然学校に足を運んでいます。自然学校の活動を見ていて、あるいは田舎で育った経験を重ね合わせて見ていくと、自然学校は、持続可能な地域づくりの大きな牽引車になっていることは間違いないと確信しています。今日の皆さんの話を聞いて、まさにその確信は強まりました。東京を含めた日本の都市はもう持続し得ない、持続不可能に陥っています。日本の自殺者数は、OECDの指標の中で常にトップ3に入っています。誰とも関わらないで一日を過ごしてしまう孤立化の度合いにおいては、ずば抜けて日本がトップです。また、子どもたちが未来に希望を持っていない、これも日本はトップです。これは今日参加した方々の地域だけの問題ではなく、日本全体の問題なのです。そのように考えると、今、まさになくなろうとしている集落を抱えている地域と、東京は合わせ鏡なのです。この合わせ鏡の問題をどう捉えるか。これは私たちの問題なのです。

しかし現在、日本において、あまりにも危機感がありません。これは非常に大変な状況を象徴しているのではないのでしょうか。今、私たち自身がもう持続し得ないのです。一方、地域で暮らしている人々の中には、今そこにおいて、その集落の人々と関わる、ときどき外部の人々と関わる、あるいは地域の様々な自然と関わることで、生きている、人生を楽しんでいるという実感を味わっている方々が確かに多く存在しています。そういうことを、今、都市に暮らしている人々が知らなければなりません。この日本の地域の問題は、都市の人口が地方に移動しない限り、解決できないでしょう。つまり地方回帰です。どうしたら都市の人々が地域に帰っていくのか。帰っていくだけでなく、地域で暮らしていけるのか。おそらくこれは、1ターンをした人々に学ぶことが多いのですが、それだけではなく、今、都市に暮らしている我々が、都市よりも地域の方が豊かだということ、感覚ではなくて説得力があるものとして出さなければならぬと思います。同時に、それはやはり日本の政治が優先してやるべきことだと思います。そういう意味で、この自然学校が今後の地域の持続可能な地域づくりに果たす役割は非常に大きいのです。大きいだけでなく、非常に重要なのです。



人と自然との関係や、人と人との関係、人と社会との関係、この関係や繋がりの中で初めて、我々は生きている、生かされているという存在感を感じることができるのです。その関係性がどんどん断ち切られている場の典型が今の都会なのです。その切られた関係性を再び繋いでいく、その営みこそがESDです。つまり、それぞれの繋がりをもう一回学び取り、そして、その繋がりを再構築していくことです。今の繋がりでは、もう持続し得ない。私もあなたもこの社会も持続し得ない。では、どのような繋がりならば持続するのだろうかということをとータルで見ている。それが環境であり、経済であり、社会であり、文化です。バラバラでは駄目なのであり、トータルで見えていく、統合していく、そういった視点です。

この地域における持続可能性といった時に、住民が参加するのは当然です。つまり、住民が主体でなければできません。かつての地域においては、どこにも参画と協働がありました。否が応でも地域のいろいろなことに参加しなければなりません。そして、参加し、話し合っ、決めたことは皆でやっていきました。しかし、この参画と協働が都市ではもうなくなっています。地域においても、どんどんなくなりつつあります。この参画と協働を、日本全国でもう一度地域からやり直さなければならぬのです。その際、かつての参画と協働ではなく、今風の、まさに市民が主体となった、市民社会における参画と協働を新たに作り上げていくべきでしょう。その時に、この自然学校が非常に役立つのではないのでしょうか。そして、それは環境だけではなく、地域経済の振興、福祉の問題を含めて様々な人々を繋いでいく、組織を繋いでいく、外と中を繋いでいく、そのようなハブとして、自然学校が今、機能していくのではないのでしょうか。ただし、この、かつてあった参画と協働をもう一度取り戻していくことは、かつての日本が良かったという話ではありません。かつての日本で育まれてきた、伝えられてきたもの——例えば自然資源の持続的利用や地域の中で育まれた文化など——を大切にしながら、現時点において我々が社会の主人公になっていくこと、それがまさにESDなのですが、自分たちが社会の当事者として未来を決定する力を付けていきます。これは、おそらく個々の地域、集落が持っていると思います。それをそこにとどめることなく、日本全体で広げていくことが大切なのではないのでしょうか。今日参加してもらったいくつかの地域においては、国際交流を含めた視点が入っていました。日本だけが独立した存在として、持続可能な国をつくることはできません。これはグローバル化の中で、ますます深刻化しています。そして、我々が置かれているような状況は日本だけではありません。地域の持続性の問題は、多くの国々で同じような問題が起きています。そのような国々において、同じような問題意識を持って活動している人々がいます。そういうことを含めて、やはり我々は地域における持続可能性の拠点としての自然学校を目指していくと同時に、国際的な視点を併せ持たなければならなりません。このことは今後の一つの課題でもあります。





08 当日配布資料

制作：大浦佳代（フリーライター・フォトグラファー）

配布資料：A

自然学校と地域の参考データ 80

配布資料：B

自然学校の活動と地域とのかかわり、パネリスト紹介

NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部 82

NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 86

NPO 法人大杉谷自然学校 90

TAPPO 南魚沼やまとくらしの学校 94

NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会 98



配布資料 A：自然学校と地域の参考データ

		NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部	NPO法人 グリーンウッド自然体験教育センター
地域	“地域”の範囲	上越市西部の中山間地域	泰阜村(所在は田本地区)
	市町村	新潟県上越市	長野県下伊那郡泰阜村
	合併	55年谷浜村、桑取村等→直江津市 71年1市1町合併→上越市 05年14市町村合併→上越市	明治22年市町村制で誕生以降、合併なし
	行政の担当窓口	新潟県上越市	泰阜村教育委員会 同総務課村づくり振興係
	アクセス(事務所)	JR直江津駅より35分(路線バス)	JR田本駅より徒歩20分 JR温田駅(特急停車)より徒歩60分
地勢		桑取川の源流から河口まで(17km)を含む中山間地域、豪雪地帯	天竜川の中流域、河岸段丘に集落
社会	“地域”の人口	約2,000人	1,914人、739世帯(10.1月) (田本地区:約90世帯)
	市町村全体の人口	約20万人	同上
	集落(地区)の数	30集落	19集落(村全体で)
	学校・小学校 中学校 高等学校	2校 1校(49名) 0校	2校(10年4月より1校に統合) 1校 0校
	高齢化率		約38パーセント
産業	かつて	農業、林業	林業、農業
	現在	農業(棚田米)、林業	農業、飯田市などに通勤
組織	廃校舎利活用	あり(市が設立、NPOが運営受託)	なし
	沿革	94年協同組合ウッドワーク設立 00年NPO法人木と遊ぶ研究所設立 02年NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部設立	86年古民家で1年間の山村留学 89年任意団体ダイダラボッチ協会設立 93年任意団体グリーンウッド遊学センター設立 → 01年NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター設立
	理事の概要	各集落の名士	NPO職員(顧問:国会議員、大学教授ら)
	パネリスト(自然学校)と地域との縁	ほぼUターン(隣の糸魚川市) 地域木材利用の木工業組合職員として地域にかかわり始める	Iターン(福井県福井市) 移住して17年
	スタッフの人数	常勤8~9名	NPO15名、(株)2名、専任講師2名、研修生2名
	スタッフの出身地	県内3名、他は全国各地から移住	全員が村外より移住
	年間予算	約4,500万円	約1億円
	行政からの財政支援	あり(受託事業、年間2700万円程度)	あり(年間600万円程度)
	別立て法人	かみえちご地域資源機構(株)	(株)グリーンウッド NPOこどもたちのアジア連合



NPO法人大杉谷自然学校	TAPPO南魚沼やまどくらしの学校 (事務局はNPO法人ECOPLUS)	NPO法人 おぢかアイランドツーリズム協会
旧大杉谷村	南魚沼市(とくに: 栃窪、清水集落)	小値賀島、小値賀諸島
三重県多気郡大台町	新潟県南魚沼市	長崎県北松浦郡小値賀町
59年大杉谷村+宮川村→宮川村 06年宮川村+大台町→大台町	04年六日町+大和町→南魚沼市 05年 + 塩沢町→南魚沼市	小値賀諸島外との合併はなし (佐世保市との合併を住民投票で否決)
大台町教育委員会 大台町役場大杉谷出張所	担当行政はなく、新潟県、南魚沼市それぞれの組織と連携	小値賀町役場産業振興課
JR三瀬谷駅より65分(町営バス)	栃窪: JR塩沢駅より車で15分(路線バスなし)、 清水: JR六日町駅より40分(路線バス)	佐世保港より1時間半(高速船)
宮川の最上流部、V字谷	魚沼盆地を囲む中山間地のうち市域の端(標高5-600m)、豪雪地帯	島しょ、五島列島の北部 自然学校がある野崎島は無人島
306人、164世帯(10.1月)	栃窪: 212人、58世帯(09.3月) 清水: 18世帯(10.1月)	3,020人、1,360世帯(09.12月)
約10,710人(10.1月)	約61,700人(09.4月)	同上
5集落		11集落(小値賀島内)
0校(99年に4校を統廃合) 0校(81年に3校を統廃合) 0校	栃窪: 1校(11人、04年に新校舎) 清水: 0校(76年に分校を閉校) 中学、高校: 0校	1校(97名) 1校(80名) 1校(88名)
69.7パーセント	栃窪: 36.8%、清水: 38.6%	41パーセント
林業、ダム建設	栃窪: 農業、スキー関係、清水: 林業、 JR送電線保線、登山客民宿	漁業25億円(最盛期の93年)
約7割が年金生活、3割が林業、土木関係	栃窪: 農業(魚沼産コシヒカリ)	漁業10億円、農業4億円
あり(町が直接管理)	なし	あり(町が設立→NPO化)
01年任意団体大杉谷自然学校設立 07年NPO法人大杉谷自然学校設立	05年(栃窪小)学校存続委員会発足 06年(有)とちほパノラマ農産設立 07年TAPPO南魚沼やまどくらしの学校活動開始(事務局はNPO法人ECOPLUS)	01年ながさき・島の自然学校設立 05年任意団体小値賀アイランドツーリズム協会設立 →07年NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会設立
地域の有識者、団体代表		旧観光協会、自然学校の職員ら
Uターン(旧宮川村) 自然学校運営を希望して帰郷、祖父と同居	Uターン(旧塩沢町) 00年頃から野外キャンプ地として各地区と付き合い、父の知人あり	Iターン(大阪府) 田舎暮らしを目的に家族で移住、当初は自然学校の非常勤スタッフ
常勤7名、非常勤1名、研修生2名	常勤2名	NPO4名、(株)8名、研修生6名
県内1名、他は全国各地から移住	隣接市1名、県外1名	島内出身2名、他は県外から移住
約3,800万円		約1億円
あり(年間600万円程度)	なし	あり
なし	なし	(株)小値賀観光まちづくり公社



NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部

風 土

- ・ 新潟県の南西部。桑取川は標高 1000m の水源から日本海までわずか 17 k m。海岸まで中山間地が続く、「世界一短い水循環系」（関原さん）。支流を含めた川沿いに 15 集落。
- ・ 背後に最高峰 2460m の頸城連峰を背負い、ブナ林直結の水で千年の間、同じ田でコメがつくられてきた。水が豊かな豪雪地帯。伝統的な生活文化、民俗行事が残されている。
- ・ 谷沿いに海と山の文化が混交する。桑取川にはサケが遡上する。

活動理念

- ・ 山里の自然、景観、文化、地域産業を「守る、深める、創造する」。
- ・ シンボルマークは「結」（ゆい）。

自然学校の来歴・変遷

NPO 発足の背景（地域外の動き）：木材によるモノづくりから地域へ

- ・ 94 年、協同組合ウッドワーク設立。
→ 上越地域の建具業者の組合。地域の木材で、地域の職人が、全国に通用するものをつくるのが理念。国産材供給、間伐材利用などのコンクールで数々の受賞歴。
- ・ 木を介して桑取谷地域との関係性。→ 川清掃に自主的に参加。継続的な関係が深まる。
- ・ 00 年、NPO 法人木と遊ぶ研究所（新潟県第 1 号の NPO）設立。
→ 木材の産地認証機関。森林保全と利活用の情報を消費者まで流し、循環型の森林活用をうながす。→ 常勤スタッフが就業することで人材のゆりかごとなる。

NPO 発足の背景（地域内の動き）：ゴルフ場ではなく地域資源

- ・ 93 年、桑取谷最奥部のゴルフ場計画が中止に。上越市の水源（30%）を守る市民の反対運動がきっかけ。→ 94 年、水道水源保護条例制定、保護地域に。
- ・ 94 年、明日の桑取を考える会、発足。地域住民の半分が会員、地域主導型の活動。
- ・ 98 年、「リフレッシュビレッジ事業」（農水省の補助事業）で、温泉施設、農産物加工所などの設置。→ 地域住民による、地域資源研究会、郷土料理研究会、朝市・夕市の生産組合などができる。ウッドワークも温泉施設に、地域間伐材の家具を提供。

“地域の NPO” 発足へ

- ・ 01 年、NPO 法人木と遊ぶ研究所が、桑取谷の「伝統生活技術レッドデータ」調査（180 戸）を実施。→ “森を守る” のではなく“森が守られる仕組みを守る” ことが必要だという気づきから、調査を実施。→ “口伝技術絶滅のピークが 10 年後” という危機的状況が明確に。村人・自身が驚いた。
- ・ 02 年、NPO 法人かみえちご里山ファン倶楽部、発足。地域から 80 名の発起人。
→ 『村のことは村でやる』。NPO 木と遊ぶ研究所から事務局の人材。理事は地域住民。

今後の事業計画

- ・ 新しいクニ（＝自治性があり生産をまかなえる範囲の村落集合体）づくり。桑取谷では



- 取物、植林資源、水、エネルギー（桑取谷には欠）、教育、民俗伝統、文化、産業。
- ・ 棚田米（“有縁の米”プロジェクト）梅干や味噌などの物品販売。→ 都市購買という『講』で「クニ」の維持、すなわち『結い』を維持する仕組み。『結い』の成果は『講』の支持者にも還元される。
 - ・ 10年7月、“生活デザインミュージアム”をオープン予定。連動して、森林や木工のマイスタースクール、大学と連携した教育も計画中。2町歩の森林をすでに入手。
 - ・ ことこと村づくり学校で改修した、築200年の古民家でレストランを。

現在のおもな事業内容

地域活動の支援

- 地域資源の調査、記録（基本原則として以下を守る）→ 具体的な事実を調べる、聞き取れる人間関係を最優先、結論や理想の押しつけをしない、口伝の記録、復元と実施につなげる、継続するには復元したものに新たな意味と価値を付加する、など。
- 地域清掃・環境保全活動を支援 → 協同作業を支援することは、結いの場に参加するための完全義務。草刈や水路整備は“土地のかたち”を把握する学びの場。
- 地域教育連携事業 → 05年より地元小学校と連携した放課後活動。

自主事業（NPOだからできること）

- 体験ではなく学校 → ことこと村づくり学校（古民家改修）、棚田学校（通年）。
- 原体験 → さんぞくライフ、子どもがひとりで行くふるさと探検、など体験事業。

地域資源の掘り起こし（新たな“仕事起こし”）

- 伝統行事再現 → 45年ぶりに復活した行事も。スタッフの結婚式を村の伝統で。
- 自然体験活動や各種イベント、米や農産加工品販売など。

受託事業（続けるための基礎経費と、場のつくり出し）

- 上越市地球環境学校（廃校を活用した自然学校）→ 99年発足、02年から同NPOが運営を受託し、単なる指定管理ではなくコミュニティの場として位置づけを改める。08年から、NPOスタッフを地域支援員として配置。
- 上越市くわどり市民の森 → 水源涵養森林の管理・体験企画など。

地域とのかかわりのトピック

地域への対し方の流儀

- ・ 「村を救って感謝されたい」人間は、環境を愛する自分が好きなだけ。根づく具体的なフィールドがないので、対象が広がって“地球環境”をふりかざす。地域での活動を「何年間だけ」と区切ってやって来る者は、個人のスキルアップなど目的が利己的。
- ・ 地域は食べ物も文化も人間関係も満たされている。食料自給率は1000%、東京は1%。
- ・ 地域に対し礼儀をわきまえ、時間をかけてゆっくりと。自分の生活は自分で律するべし。
- ・ “〇〇体験”は田舎のディズニールランド化、疲弊を招く。娯楽的な体験ではなく、技を学ぶ“学校”にすることが大事。村落の本質は“モノをつくっている場所”である。



- ・ NPO が果たす役割は、農民になることではなく、就農できる仕組みをつくること。そのためには NPO は、都市とムラの間で“宙吊り”であり続けることが大事。

誇りの復元

- ・ 外からの目によって、地域が自分たちの地域資源を再評価し“場の力”を感覚する。「おれたちには力がある、力があつたんだ」と地域が思えるような活動がまず NPO の役割。

地域に外から若者が入ることの重要性

- ・ 45 年ぶりに復活した伝統行事。45 年前に何が？→道路ができて村からひとが流出した。伝統行事は意味があるから伝統に。→ 祭礼は、外からひとが入ってくる今だからこそ重要。内外の人間関係を溶解・再凝集させてくれる。
- ・ 地域に抜けている 20、30 代は、ムラ内のバラバラだった“集落（町内会）という珠”をつなぎ、数珠にする紐の役割。外の若者はムラに対し前科（対立の歴史）がなく、誰とでもサラから話ができる。→ つなぐ役割。
- ・ 集落支援員のモデルとなった活動は、全国的に成功事例として注目されている。

協働幻想

- ・ 行政と NPO の協働は幻想。→ 広域合併後、「行政の手が薄くなったところを NPO に安くやらせる」という意識がある。行政担当者に「NPO は貧乏だからカツ丼も食えないだろう」と面罵された経験も。その「安くやらせるというアウトソーシング」が「協働」だと行政はいう。

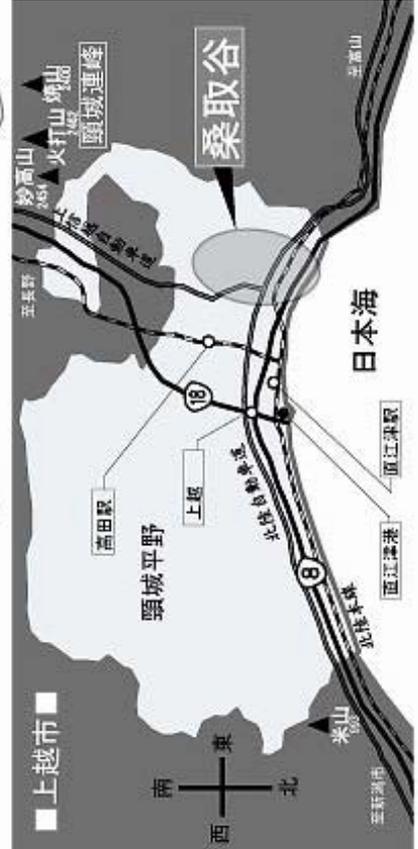
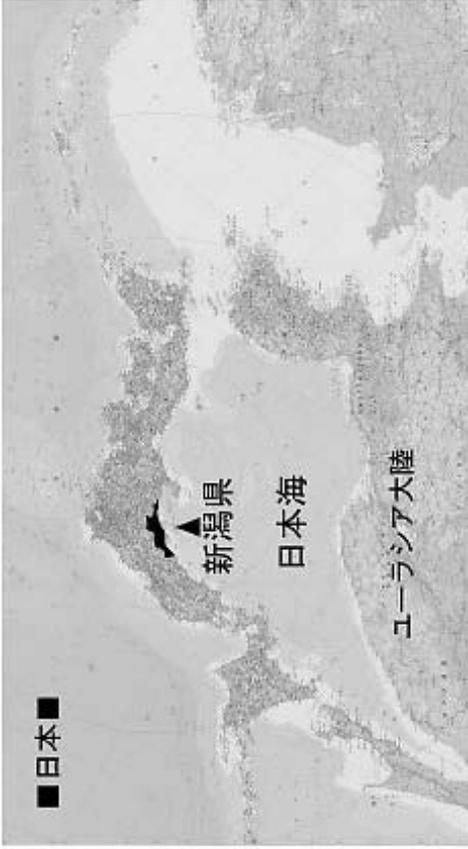
パネリスト紹介

関原 剛さん（かみえちご山里ファン倶楽部・専務理事）

- ・ 1961 年、糸魚川市出身。目の前の海や野山で遊んで育つ。高校卒業後、東京へ。商業施設の設計会社を辞め、95 年に U ターン。協同組合ウッドワークの求人「17 時に終業」を見て、「夕方釣りができる」と職員に。
- ・ 建具も森林もシロウトだったため、一生懸命勉強。その世界に決定的に欠けていたプロデューサー的役割を担い、“スギ間伐材家具では日本一（自称）”の集団に成長させる。「オレはずーっとプロダクト側の人間なんです。つくり手」。かみえちごは無給理事。針葉樹家具販売で（おもに）生計。

岩片克己さん（白山神社宮司、かみえちご山里ファン倶楽部・理事）

- ・ 1952 年生まれ、西横山集落出身。桑取谷にある白山神社の宮司（神主）さん。神主さんとしては若手だが地域に人望があり、NPO と地域のつなぎ手としても活躍している。
- ・ 若いころにユーラシア放浪や、穂高山荘で剛力に従事など経験が豊富。仕事での中国赴任などを経て、実家の白山神社の後を継ぐ。
- ・ 現在、かみえちごの理事として、とくに若いスタッフの育成に熱心。





風 土

- ・ 長野県の南端部。天竜川の中流域だが V 字谷が連なる山間地。河岸段丘に 19 の集落と耕地が点在する。標高は 770m～450m と落差が大きい。森林率 86%。気候は東海地域に近い。
- ・ 村内には国道がなく、交通信号もない。天竜川に沿って、愛知県豊橋市と上伊那郡辰野町を結ぶ JR 飯田線が走る。特急も運行し、豊橋駅と温田駅間を 2 時間で結ぶ。
- ・ かつては養蚕が盛ん（現在は 1 軒）だったが、村は 5000 人の人口を養えず、満蒙開拓団に多くを送り出した。悲しい犠牲の歴史をもつ。
- ・ 現在は年金（高齢者福祉）が最大の産業。「自宅の畳の上で死にたい」という願いをかなえる“在宅福祉”を掲げ、福祉の村として全国的に注目されている。

基本理念

「多様性の共存」

活動理念

「地域に根ざし、暮らしから学ぶ」

- ・ 暮らしの中に学びの原点がある。暮らしの中の 4 大基礎活動、「食べる、寝る、遊ぶ、働く」を通して、助け合いや自立性について学びあう。
- ・ 生活に必要なものをなるべく自分でつくる。→ 米・野菜は耕作。食器は、登り窯で焼く。エネルギーは薪（風呂、暖房）で調達から薪割りまで行う。料理も自分らでする。
- ・ 暮らしの段取りは、何事もすべて自分たちで話し合っで決める。
- ・ 地域のもつ潜在的な教育力を重視。風土が育んだ独自の生活文化に学ぶべき。“結（ゆい）”の助け合いの精神、自立の精神、山里の村社会で暮らすルールなど。

自然学校の来歴・変遷

短期キャンプから長期キャンプ（＝山村留学）へ

- ・ ～85 年、飯田市の野外教育財団で、グリーンウッド現会長の梶さち子さんが短期キャンプを実施。やがてプログラム化されたキャンプに疑問をもち、子どもの自主性を重視したフリープログラムキャンプを実施するようになる。
- ・ 86 年、短期キャンプの延長で、1 年間の長期キャンプ（＝山村留学）を計画。財団の縁で泰阜村の古民家へ、梶さんらスタッフとキャンプ参加者の子ども 4 人が移住。
- ・ 87 年、山村留学（＝長期キャンプ）2 年目、子どもの参加者 15 人。電柱や枕木で母屋を建造する。子どもたちが中心となって作業し、屋号を“だいだらぼっち”とする。
- ・ 地域からの反発。→ 山村留学の開始は、戸塚ヨットスクールの事件と時期が重なる。こつ然と現れた集団に地域は不信感を抱く。山村留学の地域懇談会を何度も開き、溶け込むために誠心誠意の努力。梶さんは「お嫁に来るような覚悟で来ました」と訴えた。

山村留学の地域への定着、法人化へ

- ・ 89 年、飯田の財団から独立。任意団体ダイダラボッチ協会を設立。



式名を「暮らしの学校・だいだらぼっち」とする。

- ・ 93年～、短期事業「信州子ども山賊キャンプ」開始。
- ・ 95年～、村からの助成金交付開始。
- ・ 01年、NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター、設立。
- ・ 03～05年、施設の建て替え。母屋の他にも建物を増やす。村、県、国、各1/3補助。
- ・ 02年、地域の子ども対象の「あんじゃね自然学校」を開始。地域に眠る教育力（必ず消える“自然と共生する”技術、知恵、文化）をいかす。村の社会教育を肩代わり。

今後：株式会社の設立と学校法人化を手探り

- ・ 09年2月、株式会社グリーンウッド、設立。“村への恩返し”が、コンセプト。豊田市にとってのトヨタのような収益体として貢献したい。当座の売上目標は5千万円。
- ・ 10年4月～、公立小学校を1校に統合。グリーンウッドは地域の教育機関の役割も？

現在のおもな事業内容

- ・ 長期事業 → 山村留学。「暮らしの学校・だいだらぼっち」。年間の定員20名。
- ・ 短期事業 → フリープログラムのショートキャンプ「信州子ども山賊キャンプ」。09年は1030人の子どもたちが全国から参加。
- ・ 各種教育プログラム → 教師・指導者育成、キャンプボランティア育成など。
- ・ 地域活動や持続的な暮らしの伝承。「あんじゃね自然学校」を地域の子どもや子育て世代を対象に月1回開催。

地域とのかかわりのトピック

行政が“持続可能な村づくり”に教育を位置づけ

- ・ 役場) 泰阜村は福祉の村、持続可能な村を目指す。観光立村を否定、ゴルフ場はいらない。信号もコンビニもなくいい。→ 自然を守り先人を尊ぶ、19世紀の村でいこう。教育も持続可能な村づくりの一端として村で支援。
- ・ 短期キャンプでは、1か月間に村の人口の半分1000人が地域の外から来る。
- ・ 役場) 08年からIUターンプロジェクト開始。10年後には人口1500人の危機感。空き家の改修費を村が補助。子育て世代がねらいで“都会で失われた教育”を売りにする。グリーンウッドのスタッフを検討委員会の座長に任命。シンクタンクとして期待。
- ・ 役場) 年間400万円の補助は、小学校が複式学級になると村の負担となる教員1人の年収分、との考え方。全国100ほどある山村留学の中でも、最安の補助額。

波及効果、地域への教育を見直す

- ・ 「村の税金で都会の子を育てるのか」という地域からの批判は根強い。
- ・ 講師として協力する地域のひとたちから、「地元の子どもどころか、親世代にも生活文化や技術が伝わっていない」という反省。→ 親世代にも体験させる取り組みへ。
- ・ 山村留学の子たちと机を並べた、地元の若者が地域に戻り始めている。いったん村の外に出て初めて、なぜ都会の子が山村留学に来ていたのか、村の価値を理解。



さを教える体験プログラムに人生を否定されるほどの衝撃。率先してキャンプに協力。

地域に産業を生む

- ・ 短期キャンプなどの地域協力者が集まり、グリーンツーリズム研究会を発足。民宿の開業、キャンプ地の整備など活動を始めている。地域に活気。
- ・ 地域に小さな産業を生む。キャンプの野菜は地元農家 15 戸が契約栽培。自主的に有機減農薬で栽培している。NPO 事業すべてで、年間 6900 万円が地域に還元されている。

地域にいかに溶け込むか

- ・ 地域の拒絶反応は、「なぜ泰阜村のような田舎に大学出の優秀な人材が来るのか？オウムのような集団ではないか」、「都会の不良が、純粋な村の子を汚染するのでは」との警戒心が根底に。その上、「50 年たっても養子は養子」という風土。→ 単なる I ターン者ではなく、ここに骨をうずめるという覚悟が徐々に理解され、認知が進んできている。
- ・ 役場の職員とスタッフは、子どもの PTA が一緒など地域の住民同士のお付き合い。
- ・ 集落の自治会、消防団、青年会にはすべて参加し、イベント役員、PTA 役員も受ける。

パネリスト紹介

辻 英之さん

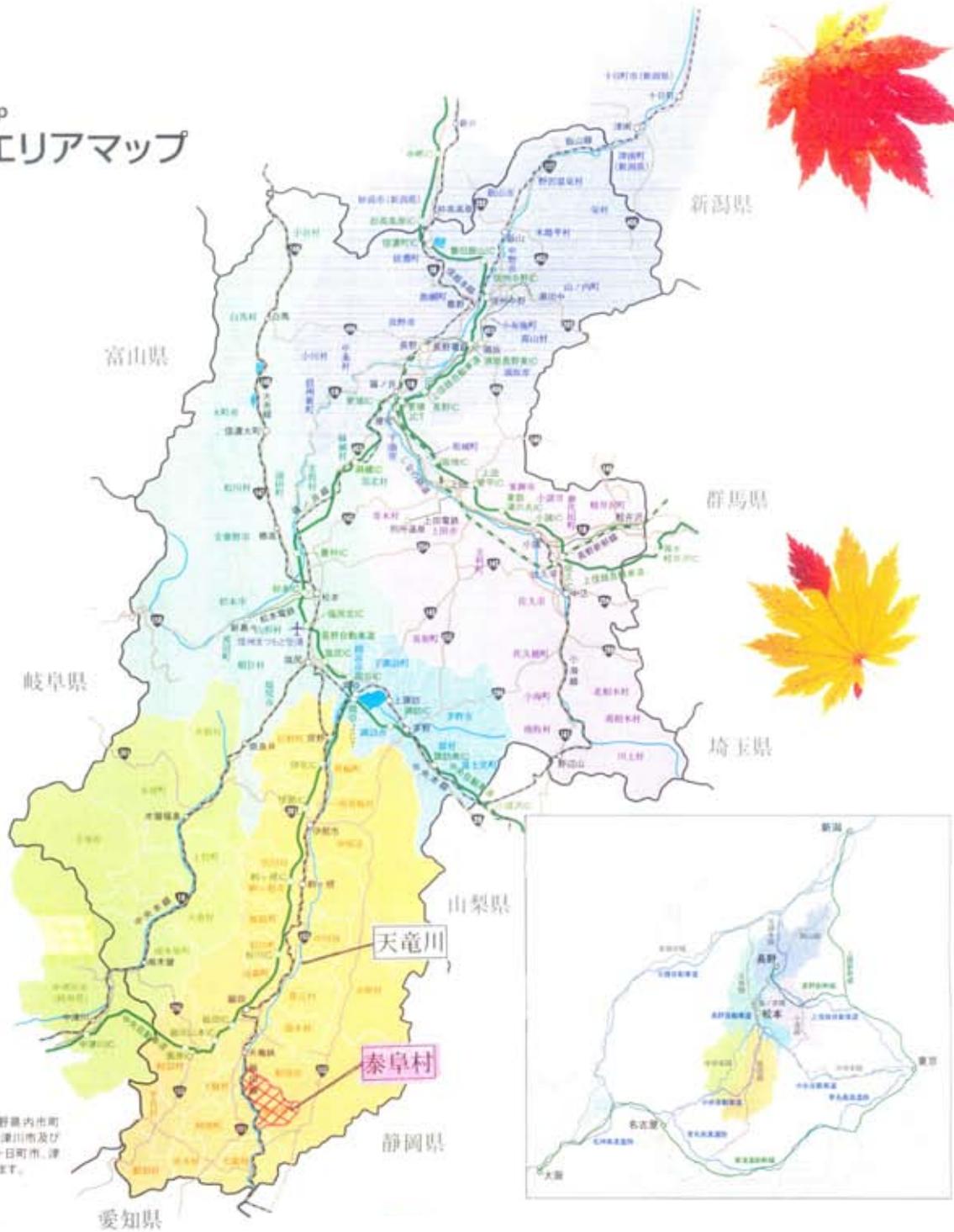
- ・ 1970 年、福井市生まれ。大学卒業後、北海道のへき地での体育教員を目指す。教育実習のついでに「いだらぼっち」を見学。学校教育の枠外で 2 年ほど学ぼうかと職員に。
- ・ 北海道から妻がきてくれて、小 6～小 1 の 2 男 1 女の子ども。スタッフもいだらぼっちの子どもたちも、ひとつの大家族のように暮らす。
- ・ 移住から 15 年たったころ、地域のひとから「土地があるぞ」「家は建てないのか」などと話してもらえるようになった。「15 年たってやっと、理解してもらおうというあせりがなくなった。肩の力が抜けたら、地域との距離が近くなりました」。

横前 明さん（泰阜村総務課村づくり振興係長）

- ・ 1961 年、泰阜村生まれ。役場職員ひと筋 30 年。前の所属は、教育委員会教育振興係長。村長が描く“福祉が産業の泰阜村”を支える役場職員の職に誇りと自負。
- ・ 村は今が一番たいへんな時期だが、「21 世紀は必ず都会から人がくる村になる」と信じる。人口 2000 人の今、住民ひとりひとりの親戚筋から性格まで、全部頭に入っている。
- ・ 若いころには、信号もコンビニもない田舎に疑問。「自然は腹の足しにならない」と。しかし今では、四季で変化する山々など、自然豊かな空間を提供できることがすばらしいと思える。「田舎のよさがわからないのか？と、全国に向かっていいたいですね」。



Area Map
信州エリアマップ



信州DCには、長野県内市町村の他、岐阜県中津川市及び新潟県妙高市、十日町市、津波町が参加しています。





風 土

- ・ 伊勢湾に注ぐ宮川の源流と最上流部。三重と奈良の県境の、1000m前後の山に刻まれた深いV字谷に沿って集落が点在する。自然学校は標高 200mほど。宮川は国交省が“水質日本一の川”に選ぶ清流だが、大台町中心地のやや上流にダムがつくられており、アユは放流である。
- ・ 吉野熊野国立公園、原生林で有名な大台ヶ原（日本百名山）への三重県側からの登山口があるが、04年の水害で道が崩れ現在は通行できない。
- ・ 宮川の河口は、漁業がさかんな伊勢湾。海の環境を育む森への、漁民の信仰が篤い。
- ・ 多雨。04年9月、台風に伴う豪雨により大規模な土砂災害が発生、深い傷を負った。
- ・ シカの食害が深刻。

活動理念

- ・ 地域の教育力（自然、人、文化）を生かした環境教育事業を通し、持続可能な新しい未来を創造することを目指す。
- ・ 各種自然体験の特色は、①懐かしい未来のためのアイデア箱、②昔の日本人のすごさを伝える劇場、③宮川の山と川など自然が遊び場。

自然学校の来歴・変遷

自然学校発足の背景

- ・ かつては林業が主要産業。山 1000ha（ヘクタール）あれば3代先まで暮らせるほどの価値。町に住む大山持ちが、集落の人を雇用する構造。戦後、スギやヒノキの人工林に。
- ・ 昭和30年前後、大杉谷の上流に宮川ダムの建設。作業員が家族ぐるみで移住し、ピーク時の大杉谷の人口は1000人、映画館が3軒もあった。工事が終わると人口は流出。
- ・ 昭和50年代以降、木材の自由化で林業が業として成り立たなくなる。
- ・ 大杉谷周辺の山は1000ha単位で同一所有者。まとまっていて買いやすいため、最近になって、森林資源の木材以外の価値が注目され、地域に新たな不安要因も。
→ CO2クレジット（森林管理をCO2吸収量にカウント）として森林獲得（すでに大手企業が1400haを購入）。あるいは、水資源目当てに水源の山に外部資本（国外も含め）が関心を示し視察が入る。新興宗教の移住、自然保護団体の森林購入もすでにある。

自然学校を地域拠点として行政が設置

- ・ 99年、大杉小学校、閉校。地域の4小学校を統廃合。当時の県知事が大杉谷の自然のファン。「三重県宮川流域ルネッサンス事業」としてフィールドミュージアムの構想。
- ・ 01年、大杉小、廃校。校舎を利用し、地域総合センター（デイサービス機能）と大杉谷自然学校を開校。大西さんがUターンし、村役場からの出向職員と2人で立ち上げ。
- ・ 07年、NPO法人化。理事は町内の有識者で、通常の活動はあまりない。

地域の教育力を生かしたプログラムを

- ・ 当初、自然学校のコンセプトは“癒し”に。都会人に自然体験と癒しの場を提供。交流



- ・ やがて、日々の暮らしの中で“地域に残る豊かな暮らし”を再発見、地域の大きな教育力に気づく。
- ・ 04年9月、台風の豪雨で大規模な土砂災害が発生。町全体で7人の犠牲。自然学校近くの久豆集落でも唯一の商店が流される。→ ひとがいなくなることを実感。
- ・ 05年ごろから“地域がなくなる”危機感。地域の人材が“飯のタネ”の自然学校は、存亡の危機。地域の知恵をいかした体験プログラムをいっそう充実。

自然学校を、限界集落対策の中間支援組織に？

- ・ 09年、町の「限界集落対策のモデル事業」が大杉谷出張所でスタート。
→ 窓口業務だけだった出張所を機能強化。職員を2名から4名に増員（ほかに集落支援員1名）、産業課長を出張所長に抜擢、など。
- ・ 出張所では、限界集落対策の具体案を模索中。自然学校には、実行にあたっての中間支援組織として役割を期待。出張所を自然学校の中に移す案も出されている。
- ・ 10年3月、「ふるさと交流会」を開催予定。集落の出身者を呼び戻すUターン作戦。大杉谷と大阪、名古屋の3か所で地域出身者の交流会を開催。自然学校が業務を担当。

現在のおもな事業内容

- ・ 環境教育事業 → 一般参加者向け体験事業、学校・団体向け体験事業など。
- ・ 環境教育普及事業 → 人材育成のための研修や講演会など。
- ・ 調査研究 → 豪雨災害後の魚類調査、地域調査など。
- ・ 合計して年間140本ものプログラムを開催（08年度）。

地域とのかかわりのトピック

経済的に自立した自然学校を

- ・ 開校時、「5年以内に経済的に自立せよ」と村。初年度（01年度）の運営費は、100%村の助成（1377万円）。08年度には650万円まで減、自立度が高まっている。
- ・ 行政の担当は教育委員会。合併時に、産業課へ移行する話があったが、「教育機関に事業収益は見込めない」と自然学校側が反対。
- ・ 町議会の中には、町人口の3%足らずの大杉谷に予算をつぎ込むことへの批判も。
- ・ 行政は「町職員1人分の人件費でNPO職員は2人雇える」とNPOを位置づけ。

地域の資源（人）が消える危機感とは

- ・ 出張所) 09年、出張所職員が地域の全戸を訪問し、聞き取り調査。→ 結果は職員を驚かせた。「地域のひとびとは今の生活に満足している。幸せだと感じている」。
- ・ 出張所) 限界集落への不安感、川の下流の集落や町が抱く不安感。つまり、上流の集落がなくなると、「次は下流の自分たちの集落がなくなる番だ」という不安。
- ・ 大西さん) 残る必然のない集落は、消えるのが自然のなりゆき。集落が消えても地域は困らない。困るのは地域の資源を飯のタネにしている自然学校のみ。
- ・ 大西さん) 村社会は、何百年も持続してきた巧妙な仕組み。田舎は都会人の癒しの場で



ないがしろにしてきた現代人は、ここに来て“ざんげ”すべきではないだろうか。

自然学校に期待される役割

- これまでの活動で、地域のひとがプログラムの先生として活躍、郷土料理研究の女性グループが地域で頼られる重要な存在になるなど、地域が生き生きと元気になった。
- 久豆集落) 自然学校のおかげで外からもひとが集まる。今後、空き家対策で定住に期待。
- 出張所) 雇用の場でもあり、町が 600 万円出す価値はある。環境教育プラス新たな産業へ拡大を期待。自然学校の存在自体が「見放されていない」安心感を地域に与える。
- 出張所) 大西さんの働きは大きく評価。かつ逸材を採用した町の功績でもある。
- 地域の民泊協力は 14 軒。自然学校の事業と連動し一般客の受け入れはない。貸布団、給食サービス（地域の郷土食研究グループ）を利用し、高齢の民家への負担を軽減。

パネリスト紹介

大西かおりさん

- 1972 年、旧宮川村出身。高校時代から下宿して地域外の学校へ。大学卒業後、JICA の青年海外協力隊で 3 年間、フィリピンで理科の教員をつとめる。
- 帰国後、「生まれた地域で働ける仕事」を求め、自然学校に可能性を見出す。北海道の自然学校で研修中に、大杉谷自然学校立ち上げの話があり、就職を即決した。
- 両親は近郊都市に出て、86 歳の祖父と 2 人暮らし。やがて地域の暮らしの技術や知恵が自然よりすごいことを発見。「じつは祖父もすごかった」と思い知る。
- 仕事を終えて帰宅すると、エプロン姿の祖父が食卓をととのえて待っている。「食べ物にお金がかからず、通勤は車で 15 分。田舎サイコー！田舎暮らしはやめられない！」。

寺添幸男さん（大台町役場大杉谷出張所長）

- 1956 年、旧宮川村出身。行政マンひと筋。08 年度まで産業課長として、町に産業と雇用をつくる仕事をしてきた。道の駅、温泉宿泊つきアウトドアレジャー施設、食品加工施設、製材加工業など多彩。「大杉谷でも産業を」と地域外にも広くアンテナを張る。
- 「あと 2 年で何とかせなあかん。町は大杉谷を廃村にする考えはっさいないです。そのために自然学校を置いているんですよ。」



風 土

- ・ 新潟県南部、群馬との県境に近い南魚沼市。魚沼産コシヒカリの産地、魚沼盆地をぐるりと囲む山間地に散在する集落のうち、栃窪は盆地の北の標高 500m、清水は盆地の南東、上越国境の清水峠に続く標高 600mに位置する集落。いずれも豪雪地域。
- ・ 栃窪は、近くにシャトー塩沢スキー場ができた昭和 40 年代ごろから民宿業（約 10 軒、今は 1 軒）やスキー関連の雇用で出稼ぎがなくなる。60 町歩の棚田でコメを栽培。
- ・ 清水は、かつて峠の関所があったほか、修験道や登山で知られる巻機山の登山口で、宿坊や民宿（かつて 7 軒、現在 3 軒）。昭和 30 年代から、登山口に東京などの大学山岳部が山小屋を建て、学生が子どもに勉強を教えるなど集落との交流があった。また、東京の J R 各線に電力供給する送電線が清水峠を通り、保守関連で J R の雇用も。

活動理念

- ・ 長年にわたって地域社会が自然環境と調和して存続してきた知恵と技を、持続可能な社会づくりという現代社会の課題解決に活かすことを目指す。
- ・ 特定の施設だけで実施するのではなく、地域全体を「学びの場」とする。地元のお年寄りや子どもたちも指導者となり、外部の人々とともに学び合う「地域まるごと自然学校」。

自然学校の来歴・変遷

栃窪で小学校の存続委員会

- ・ 栃窪小学校で、子どもの減少と木造校舎の老朽化。→ 塩沢町の合併前に新校舎を建設し廃校を食い止めようと、集落で「学校建設委員会」を発足し町議会への要請活動を。
- ・ 04 年、栃窪小学校の新校舎落成。次は存続のために集落で「学校存続委員会」を発足。
- ・ 05 年、山村留学で児童数増を検討。高野さんに相談し、勉強会と視察（泰阜村のグリーンウッド自然体験教育センター）。→ 「半端な覚悟では実行できない」と断念。
- ・ 08 年、特認校（市内在住なら入学が可）指定。現在 11 人中 4 人が学区外からの通学。

栃窪に集落営農組織の法人誕生

- ・ 06 年、国の中山間地直接支払制度の 2 期目。1 期と違う営農をしないと 2 割減。→ 集落営農組織の法人、(有)とちくぼパノラマ農産、設立。棚田のすばらしい展望から命名。
- ・ 社長は、元町役場職員で、栃窪集落の現区長。地域の公益性と事業として成功させる覚悟をこめて、法人化。高齢の人の田んぼ受託作業なども。出資者は 9 軒→20 軒。また、社長は埼玉の自由の森学園との縁で、20 年近く田んぼの体験学習を受け入れている。

清水集落では

- ・ 77 年から、巻機山の自然環境を保全するナショナルトラスト活動。清水集落もかかわり、交流も。登山ブームもあり、巻機山を媒体に多くのひとが清水集落に来る。
- ・ 08 年、3 月。清水地区活性化委員会、発足。産業の検討など活動が活発に。

事務局 (NPO 法人 ECOPLUS) の活動と地域とのかかわり

- ・ 10 数年前、スノーキャンプのフィールド¹⁾に栃窪を。高野さんの父の知人が当時の区長。



法人 ECOPLUS（東京、代表は高野さん）が受託。アンケート調査、都市参加者を募ったモデル事業など実施。第1回「南魚沼・風と土のフェスティバル」開催。

- ・ 06年、清水集落で、「環境と教育」をテーマに、村の暮らしや知恵を学ぶ国際的な研修会を開催。清水集落とのつながりが生まれる。
- ・ 07年、栃窪で、第2回「南魚沼・風と土のフェスティバル」開催。テーマは「環境教育で地域を元気に！」。体験を通して、持続可能な地域づくりを考える試み。

助成金で TAPPO の事業開始

- ・ 07年、ECOPLUS が「セブン - イレブンみどりの基金」の助成金申請。07～09年度の3年間（300万円×3年）の助成が決定する。
- ・ 07年4月、TAPPO 南魚沼やまどくらしの学校、事業を開始。“たっぼ”は地元の方言で田んぼの意。事務局は ECOPLUS が務め、栃窪の事務所に専従職員を配置している。
- ・ 評議員（11人）は、南魚沼市長ほか学識経験者、有識者ら。運営委員会のメンバー（17人）は、栃窪と清水の地域役員、婦人会役員、PTA 役員、小学校長など。応援団は新潟県知事はじめ10年1月20日現在96人を数える。

今後の展開と可能性

- ・ 「みどりの基金」は09年までだが、事務局の運営は ECOPLUS が支えて事業を継続。
- ・ 地域に“小さなビジネス”を。栃窪は米の販売、加工品も検討、清水はナメコの販売。
- ・ 栃窪での山村留学の可能性も、まだ完全には消してはいない

現在のおもな事業内容

- ・ いきものプロジェクト → 集落周辺の動植物の定期的な生態調査、栃窪小も参加。
- ・ 田んぼのイロハ講座 → 年間5回、都会からの参加者が地域農家にコメづくりを学ぶ。
- ・ 連続キャンプ、やまざと子どもショートステイ → 子ども対象の体験プログラム。
- ・ その他：南魚沼の他の中山間地集落とのネットワークをつくる活動やイベント。
清水集落では、やまざとワークショップ → 清水集落の価値や可能性を地域と外部が一緒に見つめ直すワークショップ。ナメコ栽培の共同作業なども。

地域とのかかわりのトピック

地域の受け入れは、期待ととまどいが半々

- ・ 栃窪の区長）助成金の話は「はずればばいいな」と内心。（旬とちくぼパノラマ農産の運営だけでも大変なのにお荷物が増え、地域に協力者がいるかどうか不安だった。事務局や外から来た先生の「この集落の今後」の話は、高級すぎて理解できない。生活の実感とは離れていると感じる。われわれは経済が考え方の最初にある。
- ・ 栃窪の区長）TAPPO、よかったことは多い。地域の子どもの積極的になった。自分の意見を発表できる。若いひとも来て楽しい。個人的には、都会のひとに、農業や米づくりのこと、無農薬栽培がどれだけ大変かなど、知ってもらえることが一番の喜び。
- ・ 高野さん）集落の女性は、料理のすばらしい技術をもっているが、女性はなかなか表に



- ・ 清水) 大学山岳部との交流があったから、山の中なのにハイカラな集落。外から若者が来るのは楽しい。見返りを期待するのではなく楽しいからやっている。ただ、集落 100% 全員が賛成ではない。深くやるとむずかしいことがある。
- ・ 高野さん) 日本中に「中山間地の価値は何か」と問いたい。その答えをおさえないまま農山村に消えてほしくない。都市を支えているのは農山村だと、体験で理解すべき。

地域とのキャッチボールで物事が進む

- ・ 高野さん) 集落を単に残せばいいとは考えていない。栃窪には小学校存続の意思とパノラマ農産があり、清水には 50、60 代の「あきらめていない」ひとがいるからかかわる。清水ではとくに地域と外のキャッチボールで、地域の将来のデザインが描かれている。
- ・ 清水集落) ワークショップで、ナメコの原木栽培を集落でやる動機づけができた。ヒントをもらうのはいいこと。都会の人には、労働力も見返りも期待しないが、販路は期待。

若い世代が戻って地域に活気が

- ・ 栃窪には 20 代の若い世代が戻り始めている。形はいろいろ。都会の大学に在学中でイベント時に戻る、勤めは町で住まいは集落、地域で林業に就職、など。20 代の若者が TAPPO の活動でスタッフを。集落にはお嫁さんも来て 09 年に赤ちゃんが 3 人誕生。

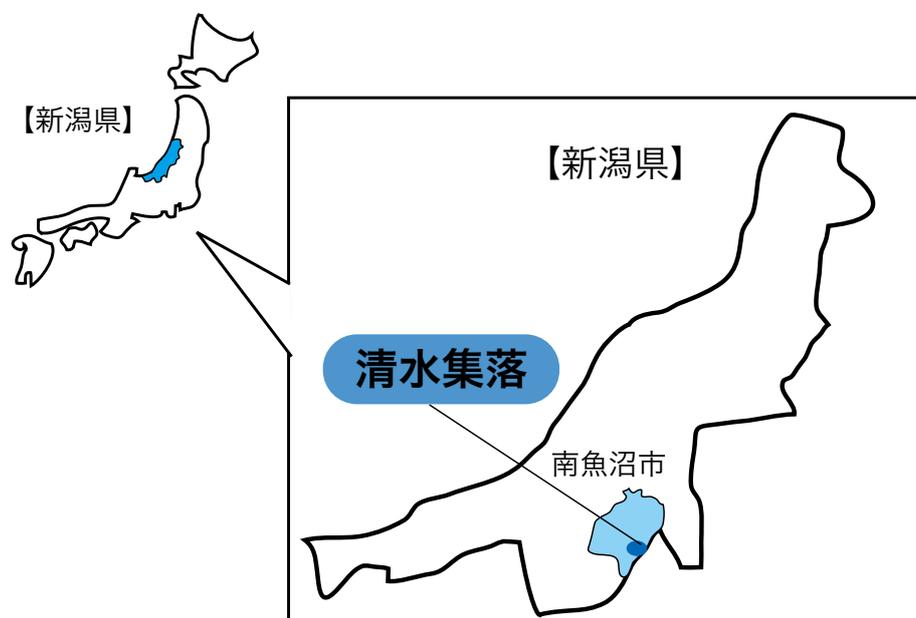
パネリスト紹介

高野孝子さん

- ・ 1963 年、旧塩沢町の酒造業（現在は販売業）を営む旧家に生まれる。
- ・ 北極海横断などの国際的な冒険プロジェクトを重ねながら、イギリスで環境教育についての研究を行い、エジンバラ大学で教育学博士号を取得、日本の野外・環境教育を先導。
- ・ 05 年に、南魚沼市内に住まいを得て、他の地域と行き来する生活。地元の出で、父親が栃窪など集落と付き合いがあり、身元がたしか。「だから、『わたしはこの大きな地域の子どもです』とって集落の門を開け、しかもわがままなことはいえるんです」。

小野塚彰一さん（清水地区活性化委員会委員）

- ・ 1949 年、清水集落の生まれ。JR の保線、建築土木関係などの仕事をしてきた。
- ・ 地域の仲間と一緒に、神社の鳥居やゲートボール場をつくったり、公民館新築に力を注いだりなど、集落のために熱心に活動。
- ・ 持ち前の明るさ気さくさから、外から来る若者に人気。「都会のひとが清水に来て、ここで何かいいものを見つけて、それを自分の人生にいかしてもらえたらいいと思うよ」。





風土：小値賀島

- ・ 17の島から成る小値賀諸島最大の島。五島列島の北端部、西海国立公園内。
- ・ 自然環境に恵まれ、古来より裕福な島。五島列島の中では例外的に平坦な地形で、米がつかれる。海も遠浅なため豊かな漁場に恵まれ、漁業が盛ん。捕鯨、交易（遣唐使の寄港地）でも栄えた歴史がある。
- ・ ひとつひとつには、外に開かれたおおらかな気質がある。“もてなし”を徳とし、現在でも秋祭には門戸を開き、誰でも招き入れて酒食を供する風習がある。

風土：野崎島

- ・ 小値賀島に隣接し、町営船で30分。
- ・ 江戸後期に五島藩の殖産殖民政策で開拓。野首集落には隠れキリシタンが移住した。明治初期の弾圧を機に、集落で教会建設を一念発起。集落の全17戸が結束し、40年近くかけ日々の食を削って貯蓄。明治41（1908）年、長崎の教会群の中でも屈指の建造物、野首教会を建堂した。
- ・ 昭和40年代から集団離村始まる。88年に最後の1戸（神主夫妻）が野崎島を離れた。
- ・ 野生のキュウシュウジカ500頭が生息し、“園丁”の役割。島の景観が荒れていない。

自然学校の来歴・変遷

自然や文化を生かした観光立地化へ

- ・ 平成に入るところ、島の文化遺産を守り観光にいかすことを町の方針に掲げる。
- ・ 外部資本のリゾート開発を否定。町として、「野崎島ワイルドパーク事業」に着手。
 - 廃校舎（84年廃校の小中学校）利用で、自然学校整備（宿泊機能、キャンプ場）。
 - 旧野首教会の復元修復。町が数千万円を投入し、単なる修復ではなく“復元”したことで、県の文化財に指定。→ 世界遺産暫定リストに登録。

野崎島の自然学校からスタート

- ・ 98年、野崎島が拠点の自然学校「ながさき・島の自然学校」発足。01年に本格始動。子ども自然体験キャンプ、各種体験ツアー、島内ガイドなどを実施。
- ・ 01年～、野崎島で“おちか国際音楽祭”開催。以後、毎年開催している。

ツーリズムへと軸足を転換

- ・ 05年、高砂さんがスタッフとして参加。同年、長崎県で民泊の規制緩和。
- ・ 05年、町が運営する観光協会、自然学校、民泊を進める協議会の3者を統合し、任意団体小値賀アイランドツーリズム協会、設立。事務所を小値賀島に設置する。
- ・ 06年、民泊を事業としてスタート（当初は7軒、現在は50軒が登録）。
 - 自然体験、民泊体験を含む“ツーリズム業”へ事業拡大。旅行会社などに営業を展開して、各種ツアー、修学旅行の誘致を積極的に行う。県や国の助成事業も申請。
- ・ 07年、NPO法人おちかアイランドツーリズム協会、設立。

産業化の限界突破を図る



校) や団体受け入れ数の限界。②価格の限界：教育旅行、民泊の料金設定の限界。

- ・ 高付加価値の観光業（古民家ステイ）と、島の物産開発と販売などへ事業拡大を図る。
- ・ 09年、株式会社小値賀島観光まちづくり公社、設立。（資本金 390 万円、うち町の出資 20 万円で今後の出資予定はなし）
- ・ 古民家再生事業。国の補助事業など約 2 億円で 4 軒の古民家を修復。レストランとバー、レセプションを備えたセンター棟 1 軒、ステイ施設 3 軒。1 泊 1 人約 3 万円見込み。

現在のおもな事業内容

- ・ “島のコンシェルジュ” 機能として、ツーリズム全般。修学旅行などの教育旅行、団体ツアーの受け入れ、民泊を含む個人旅行コーディネートも一括して受ける
- ・ 「ながさき・島の自然学校」で野崎島をフィールドにした、各種自然体験、キャンプ、ガイドツアーなどを実施。日本人が失った“本当の豊かさ”を考える問いかけも。
- ・ 各種国際交流やイベントの開催。

行政の担当

- ・ 一貫して産業振興課が担当。吉元勝信課長は、自然学校発足時から二人三脚で活動を支えてきた。吉元課長は、「本当の“まちづくり”とは、歴史、文化が次の世代に伝わるための仕組みづくり」だと考える。一度島を出た若者が U ターンできる町、子どもたちがこの町に育ってよかったと思える町づくりを目指すという。

地域とのかかわりのトピック

少子高齢化対策

- ・ 役場) 交流人口増加を歓迎。移住者の受け入れも積極的。農業では町が運営する（財）担い手公社が研修・就農支援事業を展開し、成功している。ただし、「I ターンもいいが、U ターンが増えて初めて次の展開ができる」と、U ターン者増加を願っている。
- ・ 高砂さん) 数年内に高校がなくなる危機感が切実。年間の出生は 10 人以下。せっかく若い世代が移住してきても、高校がなければ島に残れないリスク。

スタッフの人材と町の受け入れ

- ・ 役場) 高砂さんのような人材が来てくれたことが大きい。全国から来た若者が、地域によく溶け込んでがんばっている。ただ、スタッフにもう少し地元出身者をに入れてほしい。小値賀の本当のよさを知っているのは小値賀で育った者のはず。
- ・ 高砂さん) 高齢化のスピードに追いつくためには、事業化を急がなくてはならない。スタッフは、専門分野での経験とスキルをもち、即戦力となる人材が必要。

NPO の経済的な自立

- ・ 町行政は自然学校（→NPO）に“足枷をかけない”という基本姿勢。ただし「発足後 3 年以内に、目標を決めて経営計画を立て実現する“自立した NPO 法人”に」と注文。
- ・ 初年度は、運営費を 100%町が拠出（年間 500 万円）。2 年目は、町の委託事業、NPO の企画事業に補助金。NPO 事務局でも、町外から助成金を集めた。3 年目、町は人件



- ・ 高砂さん) 小値賀町は「地方行政はかくあってほしい」という秀逸な行政。I ターン 2 年目の自分を、町の命運をかけた観光事業の専務理事をすえた度量の大きさはすごい。

株式会社化

- ・ 役場) ここまで大きくなるとは思わなかった。事業展開が速すぎて、もはや行政はついていけない。今後の事業には、より多くの島の住民がかかわれるようにしてほしい。
- ・ 高砂さん) 観光を、漁業や農業と並び立つ産業にするために、NPO では限界がある。NPO では資産の蓄積ができず、投資がしにくい。株だと出資を募れるので事業の資金調達ができる。この会社の事業は労働集約型なので、経費の 8 割を島に落とせる。子育て世代の雇用創出のためにも有望だ。年商の目標 5 億円。
- ・ 高額な古民家ステイは、観光客のためにハードルを下げる仕組み。民泊か古民家ステイかを選択できるようになる。

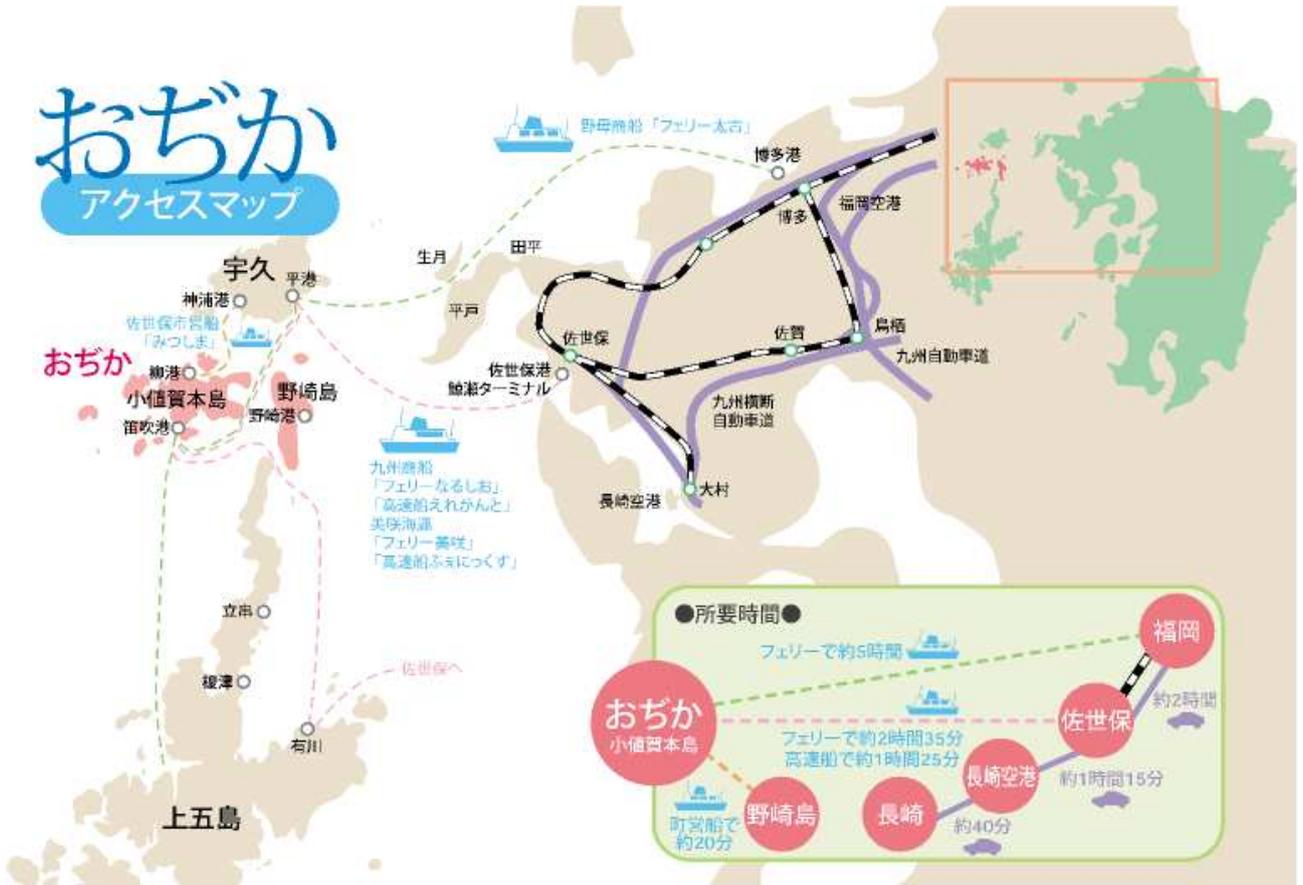
パネリスト紹介

高砂樹史さん

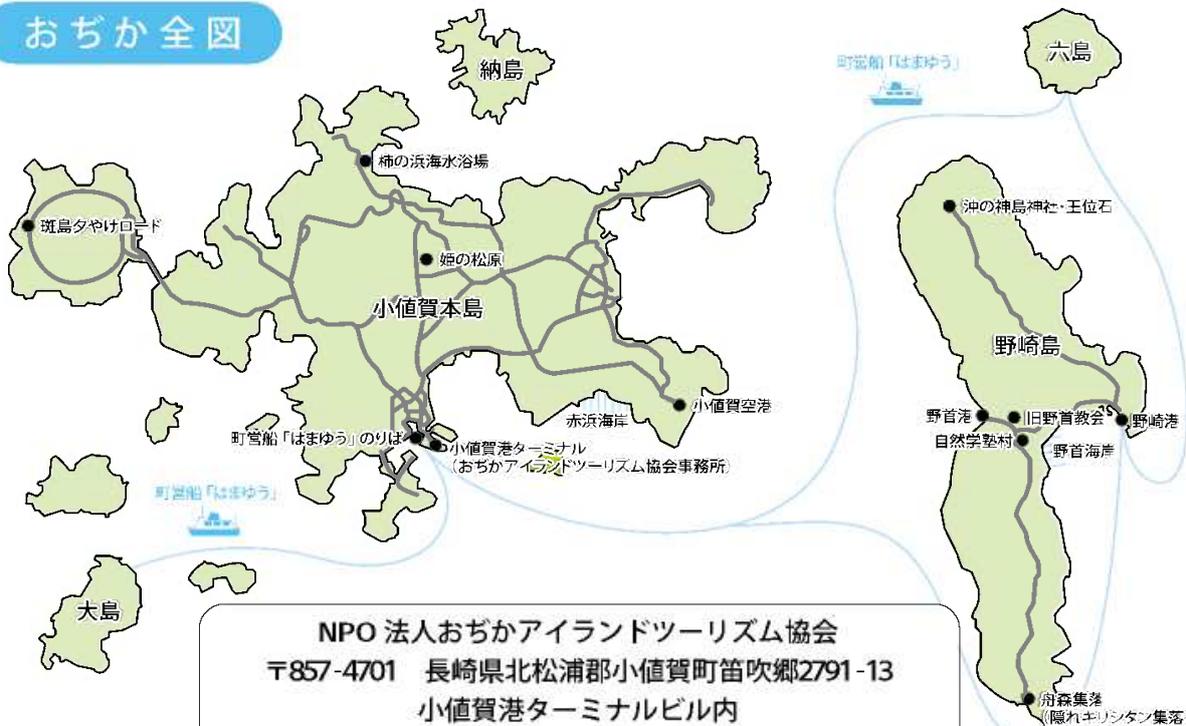
- ・ 1965 年、大阪府八尾市出身。大学卒業後、インド、ヒマラヤを放浪。額に汗して働くひとびとの姿、都会なのに鶏がいる暮らしにふれ、「日本は異常だ」と感じたのが原点。
- ・ 25 歳で劇団わらび座の公演に感動し入団。在籍 10 年のうち 2 年間は、東京事務所でプロデュース的な仕事も。00 年に退団。島根などで有機農業を学んだ後、「昔の大阪のような町、食べ物が体になじむ、完全な田舎」が気に入って、04 年末に小値賀島に移住。
- ・ わらび座の劇団員だった妻との間に 3 人の娘 (9 歳から 3 歳)。自給的な 1 反の田を耕すほか、畑作なども。「田の力と書いて男。田んぼを作らなければ男じゃないでしょう」。



おぢか アクセスマップ



おぢか全図

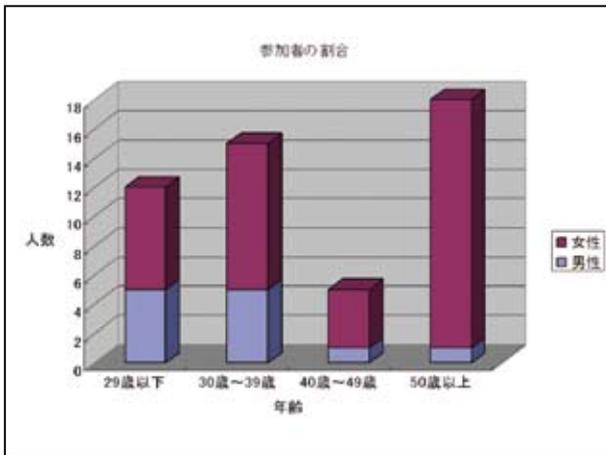


NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会
 〒857-4701 長崎県北松浦郡小値賀町笛吹郷2791-13
 小値賀港ターミナルビル内
 TEL 0959-56-2646 FAX 0959-56-3530
 ホームページ: nozakijima.jp メール: info@nozakijima.jp
 ブログ「おぢかの島日記」 <http://nozakijima.exblog.jp/>

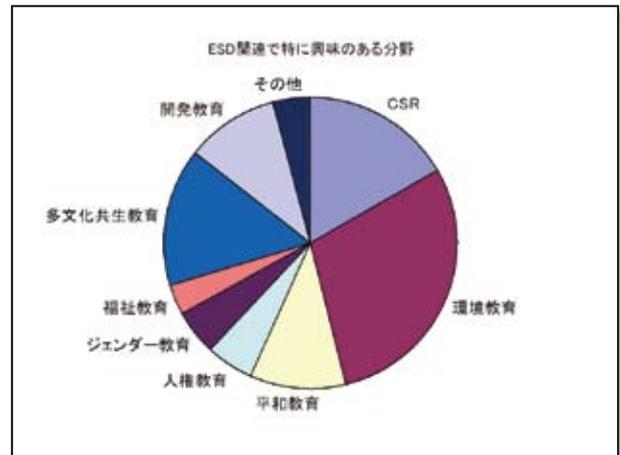


(参加者 88 名のうち、54 名から回収)

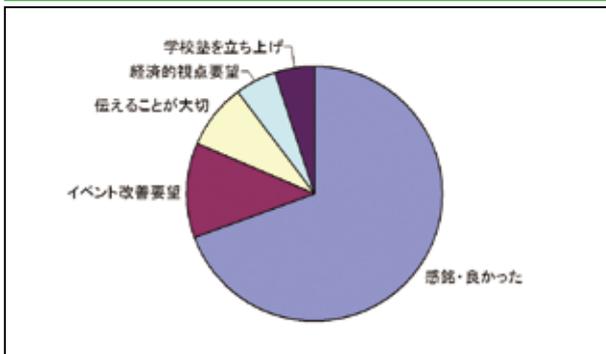
1 参加者の割合



2 ESD 関連で特に興味のある分野



3 イベントのご感想やご意見、講師の方へのメッセージなどをご自由にお書き下さい。



一部抜粋

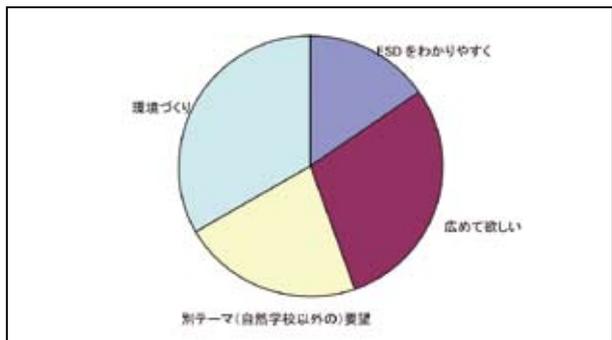
- 点として開発されていることが、その場だけの事でもったいない。文化が人の中にあるつながっている。このことは分かっているつもりだけど、何か伝える、大きくする等の方法がないのかな。
- 関わっている人達は、NPO の人も地域の人も幸せそうでした。色々な取り組みが見えました。毎日の生活につなげるには、(都会で)色々考えさせられました。行政と NPO と企業、立場が異なりますが考え方が大事だと重なる部分を大切にしたいと思います。人と人の関係を作るのに、自然はとて大きな力を与えてくれるのだと感じました。
- 各地の実践者と地元も行政や村の方からの具体的な取り組みを伺うことができ、日本の都会ではあまり語られない現実が浮かび上がってきました。ありがとうございます。
- 自然学校がここまで重要なものになっているとは思わなかった。様々な視点があってよかった。ESD のスパンで考えた時に、自然学校の考え方は経済として考えても利益あるものがあるはず。これを理解してもらえれば金はあるはず。
- 地域づくりに本格的に取り組むようになったんだな。そういった経緯を共有する場をもっと広げていきたい。
- 勉強になったことと地域のやっかいな課題を解決するのは、なかなか大変と気付かされました。皆さんどうぞ前に進めましょう。大変面白かったです。
- 地域の実態が分かり、大変勉強になった。現場だけにまかせていく為、限界集落が段々無くなっていく現状。都市部が関係する(協力する)方法について意見交換する必要性。
- これから自然学校のような要素を含んだ塾事業をはじめようと考えています。今回イベントに参加し、思い描いていた事業に近い要素が多く、とても勉強になりました。あとは教材づくりとスタッフ集めです。
- 自然学校の役割が大きくなり、また変わってきていることがよく分かりました。
- 自然学校を立ち上げようとしています。自分の立場がみえちごの関原さんのお話しされた宙づりの人たちにあたるもので、地域にも属さず都市にも属さずが心に落ちました。
- どの発表者からも地域に根ざしたリアルな生活感覚による活動の様子がよく感じられた。都市に住んでいる私たちは、町場の地域社会と地域環境を守る活動こそ大事にしなければならなかった。司会進行が絶妙でユーモアがあり大変良かった。
- 今回は自然学校関係者に加えて、地域のサポーター、役場の方などが一緒に出られたのが良かったです。自然学校(だけ)が地域の活性化の担い手や救世主ではなく、様々なアクターと共にネットワークのハブとしての役割を担っていくというのが実際のあるべき姿かなと思いました。



- ❶ 各地の自然学校で行われてきた事が、「結」、「人と人のかかわり」、「自然とのかかわりの中で生きてきた日本人」。50年前・30年前までは当たり前の生活が、経済優先の国の施策で日本中が先祖からつたわっていき「心」「技術」が失われようとしているものを「教育」（自然の中での）を通して、伝え（復活）ようとしている活動の例を知ることができました。
- ❷ 学びの大切さを学ばせて頂きました。
- ❸ 自然学校のガイドとしては、活動のヒントが多く得られました。いろんな方法の中で、目指している地域の発展は同じであり、パワーをいただきました。高校教員としては子供達にネイティブジャパンのよいところを、数多く経験させたいと思いました。教育現場には情報がきません。旅行会社ではなく、直接情報を知る機会がほしいと思っています。
- ❹ 日本の将来をどうするのか、その根本を考えさせられた。講師の方々に自らの信念を体で実現していることに感動した。
- ❺ 発表を意見交換を通じて、社会のあり方、教育のあり方を再考した。多くのことを学んだ。
- ❻ 今日はエコツーリズム、グリーンツーリズムに興味があって参加させていただきました。東京で活動するNPO/NGOの活動には出かける機会はありませんでしたが、今回のように地域で活動するNPOの方からお話をきくことは今までなかったもので、大変有意義でした。紹介されたイベントにも参加してみたいと思います。ありがとうございました。
- ❼ 地域の力を感じます。地方が元気になる方法は？ 豊かな自然があり、素敵な人がいるけど、このままでいいのか？ やることがある物は同じ。キーは人なのではないか？ 限界集落の話でもありましたが、別に不便を感じてない。逆に都会の人がきたがっている。大変勉強になりました。
- ❽ 多様なアプローチや考え方がそれぞれにリアルで今後のあり方を考える上で参考になった。
- ❾ 地域の活動化というイメージを持って臨んだが生き方の原点を見直すことからはじまるという視点を得た。
- ❿ 各地の取り組みを理解できた。外部から入りこむ大変さ苦労をもう少し。
- ⓫ とても勉強になりました。子供の頃に山村留学したかったなあと思いました。（そしたらどんなに豊かな人間になっていたか…）
- ⓬ かみえちご山里ファン倶楽部：自分がリアルだから他者にもリアルになる→とても心に残った（実感）。大杉谷自然学校：昔の日本人のすごさを伝える劇場→私もそんなことがしたい。多様な活動が求められる自然学校でいいじゃん!って思う。土着がないといいね。無料でこれだけのイベント… ありがたいです。
- ⓭ とてもよかった。ESDと自然学校を自分なりに深く勉強してみたい。
- ⓮ 自然学校に興味があったので本日のイベントに参加させていただきました。自然学校に携わっている方々のお話を初めてうかがったのですが、どのような志でどのような活動をされているのかを詳しく教えていただきとても勉強になりました。特に「具体を大切にし、抽象に陥ってはいけない」との指摘が印象的でした。4月から大学4年生になりますが、卒業までに是非一度は何らかの形で自然学校に関わっていきたいと思います。本日は、実際に自然学校に携わっている方々のお話を聞けるという貴重な機会を設けていただき、ありがとうございました。
- ⓯ 多様な取り組み、多様な視点をうかがえ勉強になりました。ネイティブ日本人のすごさを渋谷を歩いている若者達にどう伝えられるか、考えていきたいと思っています。
- ⓰ 関原氏の話が強烈でした。自己がリアルであるということ。こういう話は自然学校の業界であることが少ないですね。かみえちごが持っている力の根拠を見た気がしました。とても魅力的な顔ぶれ、内容だったので、個人的にはもっと話が聞きたかったです。
- ⓱ ガツンと頭をやられました。こもってはいはだめですね。地域の人に教わりまくりたいと思います。本当にありがとうございました。
- ⓲ 初めて参加したが、こんなにも内容が濃く勉強になって面白いものだとは思いませんでした。期待していた以上に、多くのことを学べたシンポジウムでした。自然とかがわっている方は、どこか大きく、そして豊かな方が多いように感じました。司会の方もとても面白かったです。ありがとうございました!
- ⓳ それぞれの自然学校の活動、考え方、思い…とても魅力的だったり、とてつもないパワーを感じたりした（でも、具体だからこそ魅力的なのかもしれません）。そんな時間でした。自然学校がその地域の人とつながりをつくってきた、それが不可欠であったように、自然学校同士、地域同士がつながりをつくることを、当事者として求めているのか。求めているならそこからどんなものが生まれそうなのか、お聞きしたいと思いました。“あたたかいお金”とても良い、力強い言葉ですね。
- ⓴ 奇しくもご縁のある地域の方ばかり、期待以上の収穫でした。シンポジウムの書いて表示して発表する手法も、とても良かったです。ご準備等大変だったでしょう。ありがとうございました。
- ⓵ 地域づくり型「自然学校」の現状が分かりました。「自然学校」というCB・SBと社会的企業を創ろう!!
- ⓶ 地域の深刻な事情と可能性について学ぶことができました。



4 ESD に期待することをご自由にお書きください。



一部抜粋

- 🍃 みんなを巻き込むチカラ。無くなるものが何なのか。それを知らなければ不安は生まれない。未来は全てが新しいのか?
- 🍃 今回のイベントではあまり出てこなかった問題点、特に都会の生活の中での ESD の役割みたいなものをテーマに、またお願いします。人それぞれの学びを発展させていくものかと。個と社会のつながりをスムーズにしてくれるようなものであれば。(ESD は、地域への回帰のお話がありましたが、私見ですが、東京から大学を無くすというのはどうでしょうか?)
- 🍃 本当に ESD のいい日本語の言い換えが欲しいですね!(いろんな人がいろんな訳を試みるのもいいけれど。)
- 🍃 ESD の大事さをもっと広めて下さい。阿部先生の熱い話も大変参考にかつ自信にもなりました。ありがとうございました。
- 🍃 相互協力体制を構築する知恵について、討論する場が必要。
- 🍃 様々な自然学校が全国にあると感じました。そのような自然学校情報を集め、より多くの人にコンタクトしやすい環境づくりも必要なのでは? そうするとよりアクセスしやすいと感じました。
- 🍃 地域の活性化と環境意識の醸成。
- 🍃 学術的な ESD を普及するのではなく、地域の人たちの活動を ESD 的に見たらどうかということを考えてもらいたい。村の人たちは地元のことをどうするかを考えている。そのことを ESD がサポートしてくれる仕組みづくりに期待したい。
- 🍃 このキーワードに関わる様々なセクターや人々ともっと出会いたいです。
- 🍃 日本の各地域に存在していた文化継承を、なんとか持続可能なものにして、未来につなげていけないものでしょうか。都会でも伝統技能を持った方の後継者がいないのです。これも現実。何故でしょうか。
- 🍃 センターを越えた取り組みが本当に必要なことだと感じた。地域の行政がもっと理解してほしい。
- 🍃 いつもコミュニケーションがあって良いと思います。日本文化・伝統みたいなものを取り上げると面白いのではと思いました。
- 🍃 学んだ子供達がどのように活躍するのか見てみたいです。
- 🍃 地域に目をむけた研究を教えてください。持続的開発とはどういうことですか?

- 🍃 国内外の事例を今後ご紹介いただきたい(自然学校だけでなく)。1事例、テーマをきめて1時間くらいしっかり現場の声をうかがえるとなおありがたい。日本が中国など、アジアの環境教育を支援する道を探っていただきたい。
- 🍃 環境教育が含まれるかもしれませんが、自然観察会のような地域の自然(歴史も当然含みます)に親しむイベントは、地域の愛着を深めたり、地域内の交流を進めたりするのに、良い活動だと思います。「案内役と参加」という構図ではなく、参加者それぞれが何らかの専門家として対等な参加者となるようなイベントが望ましいと思います。ESDにおいても大切な取り組みとなると考えます。
- 🍃 Politicians、政治家の ESD はどうすればいいんだろう…
- 🍃 各地の実践例の紹介と現状(仕組みがどうあるべきか)を包むような発想(哲学)が知りたい。
- 🍃 ESD って何だろう? という絶え間ない問題提起。
- 🍃 本が精神的に豊かになること。そして世界にプラスの影響をあたえること。
- 🍃 実践者をすくい上げて欲しい、広めて欲しい。
- 🍃 言葉の意味を深く掘りさげていくと本当に意義深い。期待します。
- 🍃 経済的な問題は理念的な議論だけでよいのでしょうか? もう少しリアリティのある議論が必要では…
- 🍃 日本の地域の経験と海外の地域の経験の相互交流についての発表・勉強会などを開いていただきたいです。
- 🍃 今回の参加者も関係者が多数いました。もちろん関係者にも勉強になる話ですが、ESDも含め、関心をもっていない人が来てくれるような、もう少しレベルの低い場もつくっていただきたいと思います。
- 🍃 平和教育という視点が、日本の教育でとりあげられにくいので、他者、理解、コミュニケーションの視点でESDが役立つしたいと思います。
- 🍃 今回のように具体的な ESD に向かう形を多く見せていただけたらと思います。
- 🍃 こういった自然から学ぶこと、それが都会の学校ではなかなか難しいと思います。田舎だけでなく、都会でも通用する ESD がこれから普及していくことを期待しています。
- 🍃 これからの教育のあるべき姿だと思います!
- 🍃 今、数値化できていない、自然学校がもたらす効果の中には、ESD の要素は多分入っているように思います。ESD の視点で、効果を言語化し、可視化、できれば数値化することで、各地域、各自然学校の持つパワーを一般化して発信することはできないかな…
- 🍃 ESD をもっとわかりやすく浸透させる。今日の内容を HP 上に公開。若いこのような内容を期待している人たちに発信する。
- 🍃 まず認知度を上げる必要があるのではないかと?

おわりに

1996年「自然学校宣言」というシンポジウムを東京で開催した。この時「全国に100の自然学校をつくろう」と言っていたが、その後あっという間に数百の「自然学校」が誕生した。社団法人日本環境教育フォーラム自然学校センターは、自然学校に必要な6つの機能を以下のようにまとめている。

- ①年間を通して行う様々なプログラムを実施するために必要な施設やフィールド。
- ②プログラムの実施や企画、運営、安全管理や人材養成、経理・財務などを行うためにマネージャー、デレクター、インストラクターの3つの役割(職務)を担う専門性を持った人材がいる。
- ③フィールドや場、または対象者に応じて、通年を通して実施する環境教育をねらいとした様々な活動があること。
- ④社会との関係性を持ち、公益に資する自然学校のミッションと、それを具現化するビジョンを持ち、組織運営していくための仕組みを制作すること。
- ⑤プログラム実施上の安全管理はもとより、自然学校組織を健全に維持・運営するために必要なあらゆるリスクに対する安全管理と危機管理システムが構築されていること。
- ⑥上記①～⑤を総合的にマネジメントし、社会的信用を得て健全に運営できるための機能(組織)をもつ。

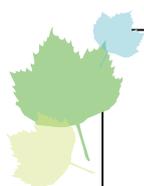
自然学校の6つの機能を整理したのは2001年頃だった。この頃は「自然体験活動の拠点」という意味の自然学校が主流であった。この有様がこの10年の間で随分と変わってきた。今回ご登場願った5つの自然学校は「自然体験活動の拠点」であると同時に「地域再生の拠点」という新たな役割を期待され、実際にその役割を担っている。こうした役割を担っている組織は必ずしも「自然学校」と名乗っていないところも多い。例えば今回の5つの組織のうち「自然学校」と名乗っているのは「大杉谷自然学校」のみだ。

「自然学校は地域を救う」という今回のお題は、このシンポジウムの準備を始めて間もなく「随分と不遜な物言いかも知れない」と感じていた。案の定登壇者の方々からは、このタイトルに違和感があるとの発言があった。地域と自然学校が対峙していた80年代～90年代とは状況は随分と変化している。すでに自然学校は地域の中にどっぷりと入り込み、地域の一員として地域内の社会的企業としての役割を果たし始めているのだ。

2002年・2006年と広い意味での自然学校の全国調査を環境省や社団法人日本環境教育フォーラムが実施している。2010年にも全国的な調査を行い、その調査結果は2011年3月に開催を予定しているシンポジウムで発表したいと考えている。

今回のシンポジウムにご協力いただいた、各自然学校の皆さんはじめ多くの方々に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

2010年4月11日 立教大学ESD研究センター 運営委員 川嶋直



「自然学校は地域を救う」

～ ESD(地域を元気にする) 拠点として期待される自然学校～

シンポジウム報告書

発行日 : 2010年

発行人 : 阿部治 (立教大学 ESD 研究センター長)

発行所 : 〒171-8501

東京都豊島区西池袋3-34-1

立教大学 ミッチェル館別棟1階

ESD 研究センター

TEL・FAX : 03-3985-2686

編集・発行 : 株式会社インセクト



eco 
RIKKYO Eco Open Programs for
Education & Research Activities
opera!

